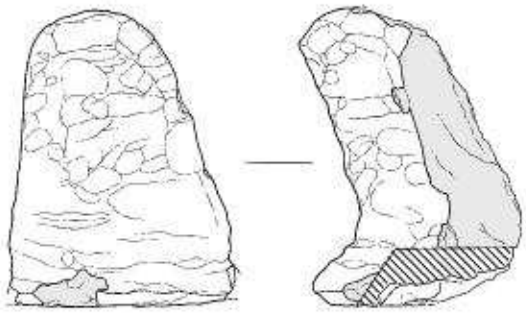


桜井市立埋蔵文化財センター
発掘調査報告書　27集

桜　井　市

平成17年度国庫補助による
発掘調査報告書

2006．3．31

桜 井 市 教 育 委 員 会

纒向石塚古墳と調査地（上が北）

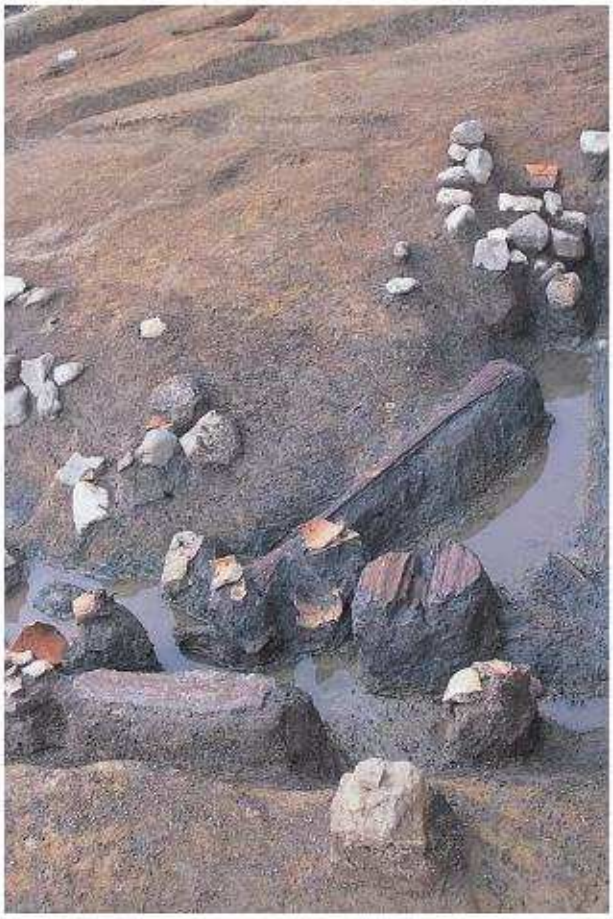
方形周溝墓１（南より）

方形周溝墓２（南西より）

纒向遺跡第144次調査①

石塚東古墳周濠遺物出土状況（南東から）

鳥形木製品

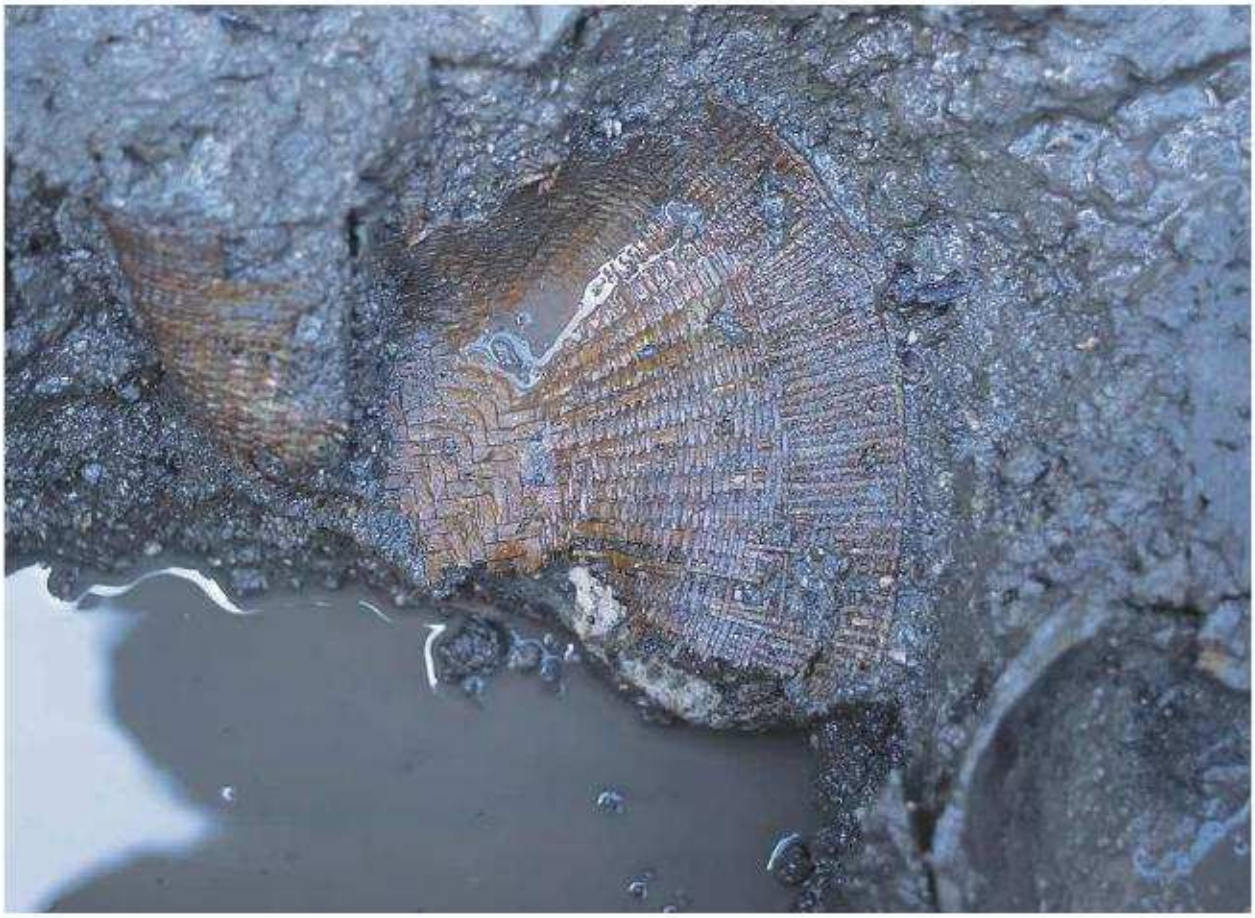


笠形木製品・櫂形木製品

纒向遺跡第144次調査②

土坑 2　遺物出土状況

土坑 4　遺物出土状況



土坑 2　籠状製品出土状況

土坑 4 出土　土製支脚

序

私たちの桜井市は奈良盆地の東南部に位置し、市域の約７割を山地が占める自然の豊かなまちです。しかし近年は平野部を中心に開発が進み、市民生活の利便性が向上する一方で、かつての桜井市の姿が失われつつあります。市内には纒向遺跡、大福遺跡、上之宮遺跡や、箸墓古墳、茶臼山古墳、メスリ山古墳など全国的にも注目される貴重な文化遺産が数多く分布しており、この地域が古代におけるわが国の中心地であったことが知られていますが、こうした遺跡も開発にともなう破壊が危惧されています。

桜井市ではこれらの遺跡を保護し、啓発するための事業の一つとして市内遺跡の調査・保存に力を入れており、本書には平成17年度に桜井市が国・県の補助を受けて実施した発掘調査のうち安倍寺跡、谷遺跡、纒向遺跡の調査成果をおさめております。

現地調査にあたりましては指導・助言を頂いた多くの関係機関の方々、地主及び地元協力者の方々、酷暑・厳寒のなか作業に従事して頂いた作業員・学生諸君、遺物の整理・報告書の作成に協力して頂いた整理員の方々に深くご厚礼申し上げます。

本書が文化財の普及・啓発の一助となり、また研究者の方々の資するところとなれば当教育委員会としても望外の喜びであります。

平成18年３月31日

桜井市教育委員会

教育長　石　井　和　典

例　　言

1．本書は平成17年度国庫補助事業として奈良県桜井市教育委員会が実施した、市内遺跡の緊急調査及び範囲確認調査の報告書である。本報告書では安倍寺跡第19次調査［(株) 水光］、谷遺跡第22次調査［北出仁志氏］、纒向遺跡第144・145次調査［橋本泰尚氏、北島治氏］の、4 調査の成果を報告している。

2．調査主体：桜井市教育委員会事務局

教育長 石井和典、事務局長 森北好則、教育次長 中川行央、文化財課長 森幹雄

文化財課主幹 杉本好成、主任 橋本輝彦

技師 松宮昌樹、福辻淳、技師補 丹羽恵二、臨時職員 木場佳子、橋爪朝子、辰巳智圭子

3．調査担当者：福辻淳、丹羽恵二、橋爪朝子

4．調査補助員：堂浦千景、西田良子、更谷綾、福西貴彦（奈良大学大学院）、西本和哉（同）、山口寛（天理大学）、岩城圭吾（同）、相場さやか（奈良大学）、赤井友洋（同）、風早加奈子（同）、山 香織（同）

5．調査作業員：嶋岡辰雄、井上久幹、上田猛、宮前秀年、辻カズ子、川島利市郎、田仲啓治、高奥恵子、中西智子、宮久保吉暐、澤田己喜雄、小南一也

6．整理作業及び報告書作成：上記調査補助員及び嶋岡由美、橋本真理、西田千秋、大島郁美、井ノ本奈津子、奥山こず恵

7．現地調査及び遺物整理に関し、以下の方々からさまざまなご指導・ご教示を頂いた。ここに記し、感謝の意を表します。石野博信氏（香芝市二上山博物館）、萩原儀征氏（日本考古学協会員）、苅谷俊介氏（同）、寺澤薫氏（奈良県教育委員会）、高橋克壽氏（奈良文化財研究所）、小澤毅氏（同）、和田一之輔氏（同）、和田晴吾氏（立命館大学）、関川尚功氏（橿原考古学研究所）、中井一夫氏（同）、今尾文昭氏（同）、坂靖氏（同）、青柳泰介氏（同）、鶴見泰寿氏（同）、北山峰生氏（同）、河野一隆氏（九州国立博物館）、青木勘時氏（天理市教育委員会）、木場幸弘氏（高取町教育委員会）、置田雅昭氏（天理大学）、菱田哲郎氏（京都府立大学）、中久保辰夫氏（大阪大学大学院）

8．本書の執筆は各調査担当者がおこない、文末に明記している。なお本書の編集は福辻がおこなった。

9．遺構写真は全て調査担当者が撮影した。遺物写真のうち巻頭図版 4 の土製支脚は佐藤右文氏（アートフォト右文）に撮影していただいたもので、それ以外の遺物は調査担当者が撮影した。

10. 本書における座標値はすべて世界測地系によるものを示している。なお方位は座標北を表し、レベル高はすべて海抜高を表す。

11. 本書記載の土器実測図の断面は、土師器・土師質系のもの－白、須恵器－黒、瓦器－網目とした。また土製品・石製品の断面は斜線で表現する。

12. 図版の遺物番号は、該当する各節の図の遺物番号に対応する。

13. 出土遺物をはじめ調査記録一切は桜井市教育委員会において保管している。活用されたい。

表紙：纒向遺跡第145次調査　土製支脚

目　　次

序
例言
目次
第１章　平成17年度の国庫補助による発掘調査 …… 1
第２章　発掘調査の成果
　第１節　安倍寺跡第19次発掘調査報告 …… 3
　第２節　谷遺跡第22次発掘調査報告 …… 17
　第３節　纒向遺跡第144次調査（纒向石塚古墳第９次調査）概要報告…… 19
　第４節　纒向遺跡第145次発掘調査報告…… 29
図版
抄録

表 ・ 挿 図 目 次

表１　平成17年度国庫補助事業による調査一覧…… 2
表２　瓦一覧表……15
表３　土器・その他一覧表……16
表４　土製支脚一覧表……50
表５　ヤナイタ２号墳埴輪観察表……56
表６　纒向遺跡第145次調査土師器観察表 ……56

図１　桜井市の位置…… 1
図２　平成17年度国庫補助事業による調査位置図（S＝１/40000） …… 2
図３　安倍寺跡第19次調査位置図（S＝１/2500）…… 3
図４　北区平面・断面図（S＝１/100） …… 4
図５　南北溝瓦出土状況図（S＝１/50）…… 4
図６　北区南北溝出土瓦①［平瓦］（S＝１/６） …… 5
図７　北区南北溝出土瓦②［平瓦］（S＝１/６） …… 6
図８　北区南北溝出土瓦③［丸瓦］（S＝１/６） …… 7
図９　北区出土遺物 ［瓦（S＝１/６）・不明銅製品（S＝１/２）・土器（S＝１/３）］…… 8
図10　北区出土土器（S＝１/３）…… 9
図11　南区平面・断面・出土状況図（S＝１/50）……11
図12　南区出土瓦① ［平瓦］（S＝１/６）……13
図13　南区出土瓦② ［平瓦］（S＝１/６）……14
図14　南区出土遺物［瓦（S＝１/６）・鉄滓（S＝１/２）・土器（S＝１/３）］ ……15
図15　谷遺跡第22次調査位置図（S＝１/2500）……17
図16　トレンチ平面・断面図（S＝１/80）……18
図17　纒向遺跡第144次調査位置図（S＝１/3000） ……19
図18　これまでの調査位置（S＝１/1600）……19
図19　上層平面図（S＝１/140） ……21
図20　石塚東古墳周濠遺物出土状況（S＝１/80）……22
図21　石塚東古墳周濠出土遺物（S＝１/３・１/４） ……23
図22　下層平面図（S＝１/140） ……25
図23　纒向石塚古墳周濠復元図（S＝１/1600）……26
図24　纒向遺跡第145次調査位置図（S＝１/4000） ……29

図25　トレンチ平面図（S＝１/200）……30
図26　トレンチ断面図（S＝１/80）……31
図27　ヤナイタ２号墳平面図（S＝１/80）……33
図28　土坑２・溝２平面・断面図（S＝１/30）……35
図29　土坑４平面・断面図（S＝１/30）……36
図30　ピット・土坑平面・断面図（S＝１/40）……37
図31　自然流路北側流芯 遺物出土状況（S＝１/30）……39
図32　ヤナイタ２号墳関連遺物①（S＝１/３）……41
図33　ヤナイタ２号墳関連遺物②（S＝１/３）……42
図34　土坑２出土遺物①（S＝１/３）……43
図35　土坑２出土遺物②（S＝１/３）……44
図36　土坑２出土遺物③（S＝１/２）……45
図37　土坑４出土遺物①（S＝１/３）……47
図38　土坑４出土遺物②（S＝１/３）……48
図39　土坑４出土遺物③（S＝１/４）……49
図40　自然流路出土遺物①［北側流芯上層］（S＝１/３）……51
図41　自然流路出土遺物②［北側流芯上層・下層］（S＝１/３）……52
図42　自然流路出土遺物③［南側流芯］（S＝１/３）……53
図43　土坑１［97］・ピット４［98・99］出土遺物（S＝１/３）……53

図 版 目 次

巻頭図版１　［纒向遺跡第144次調査①］
　纒向石塚古墳と調査地
　方形周溝墓１
　方形周溝墓２
巻頭図版２　［纒向遺跡第144次調査②］
　石塚東古墳周濠遺物出土状況
　鳥形木製品
　笠形木製品・櫂形木製品
巻頭図版３　［纒向遺跡第145次調査①］
　土坑２ 遺物出土状況
　土坑４ 遺物出土状況
巻頭図版４　［纒向遺跡第145次調査②］
　土坑２ 籠状製品出土状況
　土坑４出土 土製支脚

安倍寺跡第19次調査

図版１　安倍寺跡第19次調査（１）
　北区南北溝（北より）
　北区全景（西より）
　北区全景（東より）
図版２　安倍寺跡第19次調査（２）
　南区瓦出土状況（南西より）
　南区北半部全景（南東より）
　南区全景（南より）
図版３　安倍寺跡第19次調査（３）
　北区出土平瓦
図版４　安倍寺跡第19次調査（４）
　北区出土丸瓦
図版５　安倍寺跡第19次調査（５）
　北区出土平・丸瓦
図版６　安倍寺跡第19次調査（６）
　北区出土土器①
図版７　安倍寺跡第19次調査（７）
　北区出土土器②
図版８　安倍寺跡第19次調査（８）
　南区出土平瓦
図版９　安倍寺跡第19次調査（９）
　南区出土平・丸瓦
図版10　安倍寺跡第19次調査（10）
　南区出土遺物

谷遺跡第22次調査

図版11　谷遺跡第22次調査
　トレンチ全景（西より）
　東端落ち込み断面（北東より）
　トレンチ南壁（北東より）

纒向遺跡第144次調査

図版12　纒向遺跡第144次調査（１）
　調査地遠景
　杭（南より）
　完掘時の杭（南西より）
図版13　纒向遺跡第144次調査（２）
　井戸１土層断面
　井戸２遺物出土状況
　井戸２完掘状況（西より）
図版14　纒向遺跡第144次調査（３）
　石塚東古墳全景（南より）
　竪杵
　臿・用途不明木製品
　円筒埴輪
図版15　纒向遺跡第144次調査（４）
　上空から見た纒向石塚古墳と調査地
　上空から見た調査地（上が北）

図版16　纒向遺跡第144次調査（５）
纒向石塚古墳周濠（南より）
纒向石塚古墳周濠と方形周溝墓１の関係
方形周溝墓１の全景（北西より）
図版17　纒向遺跡第144次調査（６）
方形周溝墓１土器出土状況（東より）
方形周溝墓２全景（南東より）
方形周溝墓２土器出土状況

纒向遺跡第145次調査

図版18　纒向遺跡第145次調査（１）
調査地遠景（南より）
トレンチ全景（右側が北）
トレンチ全景（北より）
図版19　纒向遺跡第145次調査（２）
ヤナイタ古墳群上面検出状況（北より）
ヤナイタ２号墳埴輪出土状況（北西より）
溝３ 埴輪出土状況（東より）
埴輪出土状況（北東より）
埴輪・溝２ 上面検出状況（上が北）
ヤナイタ１号墳・２号墳（南西より）
溝２・土坑２ 埋土断面（北東より）
土坑２ 上層遺物出土状況（東より）
図版20　纒向遺跡第145次調査（３）
土坑２ 完掘状況（東より）
溝２付近 トレンチ壁面（北東より）
土坑４ 下層埋土断面（西より）
土坑４ 底面遺物出土状況
土坑１ 埋土断面（西より）
土坑３ 埋土断面（西より）
ピット１ 埋土断面（南より）
ピット２・３ 埋土断面（南より）
図版21　纒向遺跡第145次調査（４）
ピット４ 埋土断面（西より）
ピット４ 遺物出土状況（西より）
ピット５ 埋土断面（西より）
ピット６ 埋土断面（西より）
溝１ 完掘状況（東より）
トレンチ北壁（南西より）
トレンチ北半西壁（南東より）
トレンチ南半西壁（南東より）
図版22　纒向遺跡第145次調査（５）
自然流路 遺物出土状況①（南東より）
自然流路 遺物出土状況②（南東より）
自然流路 土層断面（南東より）
図版23　纒向遺跡第145次調査（６）
ヤナイタ２号墳 関連遺物
図版24　纒向遺跡第145次調査（７）
土坑２出土遺物①
図版25　纒向遺跡第145次調査（８）
土坑２出土遺物②
図版26　纒向遺跡第145次調査（９）
土坑４出土遺物①
図版27　纒向遺跡第145次調査（10）
土坑４出土遺物②
自然流路（北側）出土遺物①
図版28　纒向遺跡第145次調査（11）
自然流路（北側）出土遺物②
図版29　纒向遺跡第145次調査（12）
自然流路（北側） 出土遺物③
自然流路（南側） 出土遺物
土坑１・ピット４ 出土遺物

第１章　平成17年度の国庫補助による発掘調査

１．桜井市の位置と環境

奈良県北部に位置する桜井市は、人口６万人余、面積98.93㎢の都市である。市域の北西部は奈良盆地東南部にあたる平地部が広がり、北東部から東部・南部にかけては大和高原や龍門山地などの山地部で構成されている。付近は奈良盆地と山間部の宇陀・吉野地域との結節点にあたっており、古くから交通の要衝であったと考えられ、市域には数多くの遺跡が分布する。

図１　桜井市の位置

市域北西部の平地部からその周縁の丘陵部にかけては、特に多くの遺跡が存在する。天理市境に近い市域北部の纒向遺跡は、古墳時代前期の大規模な集落遺跡として知られている。ここには箸墓古墳をはじめとする出現期の古墳が分布し、多くの外来系土器が出土することなどから、当時の日本列島における中心的な集落が存在したことが推定されている。このほか突線紐式銅鐸が埋納された状態で見つかった大福遺跡や、絵画土器の出土で知られる芝遺跡などの弥生時代集落遺跡が平地部に立地する。

丘陵に近い平地の南縁付近に目を向けると、桜井茶臼山古墳・メスリ山古墳という２基の大型前方後円墳が存在し、赤坂天王山古墳や文殊院西古墳など横穴式石室を持つ著名な古墳が多数分布している。上之宮遺跡では聖徳太子の「上宮」の可能性が推定される大型掘立柱建物や園池遺構が見つかっており、吉備池廃寺・安倍寺・山田寺など、大王家や有力氏族と密接な関連を持つ古代寺院跡がいくつも存在している。

このように桜井市には、古代国家の形成期に重要な役割を果たしたと考えられる遺跡が多数見られ、現在12件の史跡と２件の特別史跡を有している。桜井市ではこれら市内遺跡の範囲確認調査を行なうとともに、開発に先立つ緊急調査を日々実施している。

2．平成17年度の発掘調査

平成17年度に実施した国庫補助による発掘調査は５件である（表１）。このうち纒向遺跡第144次調査が重要遺跡範囲確認調査、珠城山古墳群第５次調査が史跡整備に伴う発掘調査、安倍寺跡第19次調査が事務所建築に伴う調査であり、その他谷遺跡第22次調査は個人住宅、纒向遺跡第145次調査は農業用温室建築に伴う発掘調査であった。本書では珠城山古墳群第５次調査を除いた計４件の発掘調査の成果について報告している。

表１　平成17年度国庫補助事業による調査一覧

地図No	調査名称	所在地	期間	面積	主な遺構・遺物	担当者
1	安倍寺跡第19次	安倍木材団地1丁目7−7	7月5日～7月15日	72㎡	柱穴、溝　瓦	丹羽
2	珠城山古墳群第5次	穴師1067−1ほか	8月3日～10月20日	120㎡	2号墳掘削、土壙墓	丹羽
3	纒向遺跡第144次	太田271−1	12月27日～3月31日	470㎡	石塚古墳周濠、石塚東古墳、方形周溝墓	丹羽・橋爪
4	谷遺跡第22次	安倍木材団地1丁目1−1	1月30日～2月6日	30㎡		福辻
5	纒向遺跡第145次	東田171−1、171−2	2月7日～3月31日	180㎡	ヤナイタ1・2号墳、土坑　土製支脚、箱	福辻

図２　平成17年度国庫補助事業による調査位置図（S＝1/40000）

第２章　発掘調査の成果

第１節　安倍寺跡第19次発掘調査報告

１．はじめに

安倍寺跡第19次調査は、奈良県桜井市安倍木材団地１丁目７番７で行われた事務所の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査地は安倍寺跡の推定寺域の南東隅付近にあたる。また、安倍寺跡東辺は阿倍山田道の推定地でもあり、それらに関連する遺構の検出が期待された。安倍寺跡は、左大臣安倍倉梯麻呂の創建伝承をもち、出土瓦等から７世紀中頃に創建されたと考えられている[1]。1965年に行われた発掘調査で金堂、塔、回廊が確認され、それらの中心伽藍は保存され、1970年に国史跡に指定されている。それ以降も周辺の開発に伴い調査が行われ、1989年の第８次調査[2]では、南北にのびる西面する石垣状の遺構が検出され、後の調査でもその延伸部分が確認され、寺域の西限が確定的になった。しかしながら、第15～18次調査[3]では今回と同様に南限の推定地付近で調査が行われているが、寺域を区画するような遺構の検出にいたらず、西側以外の寺域は確定していない。

なお、調査区は調査対象範囲の北側（北区　２ｍ×21ｍ）と南側（南区　３ｍ×10ｍ）の２ヶ所に設け、調査面積の合計は約72㎡で、調査期間は平成17年７月５日～７月17日までである。

2．北区の調査成果

（１）基本層序（図４）

調査前にすでに厚さ約40㎝の造成盛土がなされており（図４－１層）、その下層からは造成以前の現代耕作土（２～４層）が堆積していた。それより以下の基本層序は、にぶい黄褐色シルト層（６～８層）、にぶい黄褐色砂礫層（11、12層）、旧河川堆積に由来する径10㎝以上の礫を含む砂礫層（13～15

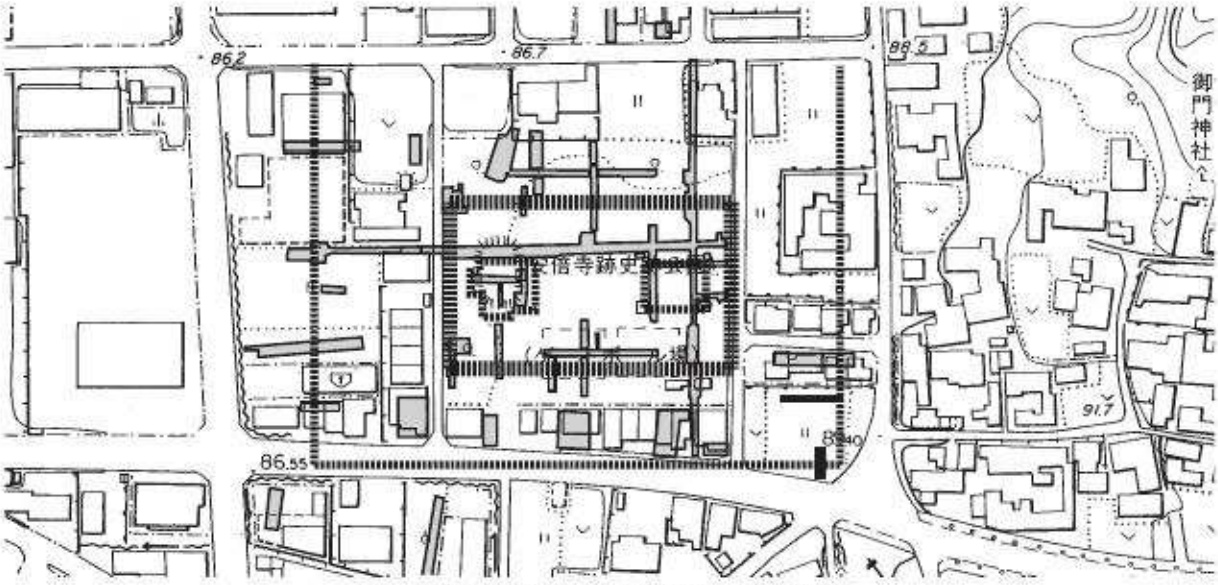


図３　安倍寺跡第19次調査位置図　（S=1/2500）

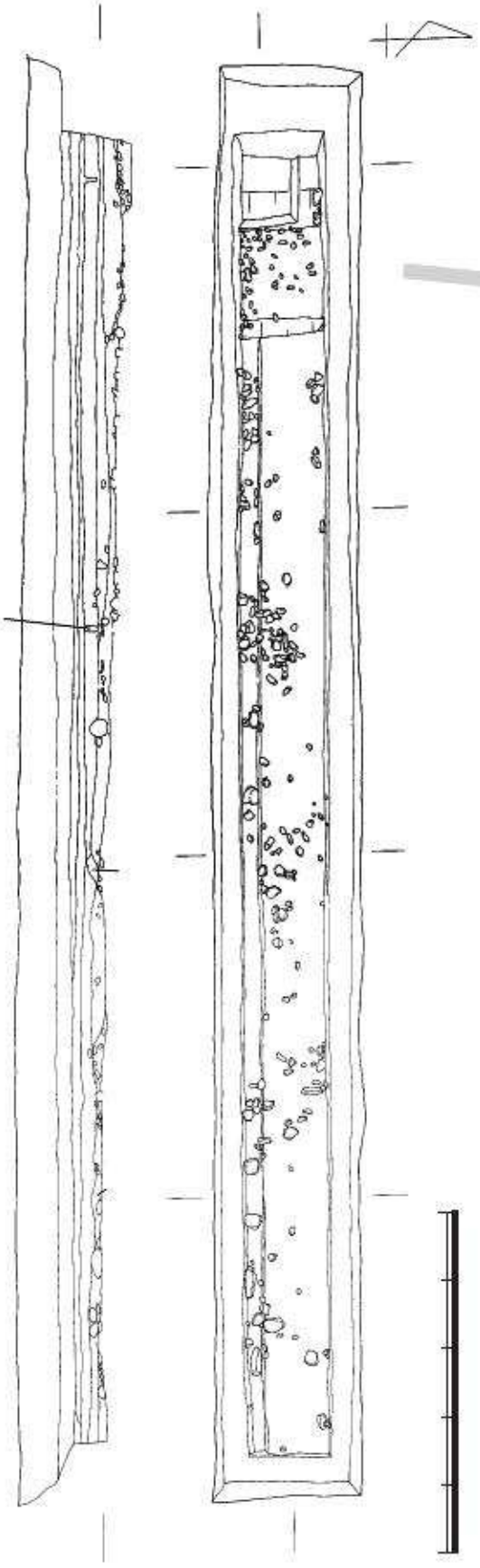


図４　北区平面・断面図（S=1/100）

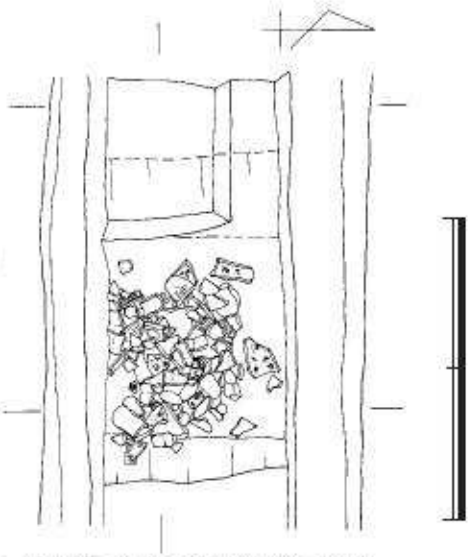


図５　南北溝 瓦 出土状況図（S=1/50）

層）が堆積する。各層から出土した遺物より、各層の堆積時期を推定すると、６、７層からは土師皿や瓦などが出土しており中世以降に、11、12層では古式土師器などは含むが瓦などは出土していないので古墳時代初頭～安倍寺建立以前に堆積したものと思われる。以上のことや、瓦が出土した南北溝が12層上面から掘削されていることなどから、この面が安倍寺が機能していた時期のベース面と考えられる。13層より下は、より大きな礫を含む層で河川による自然堆積と思われる。この層からは土器などの遺物は出土していない。

（２）検出遺構（図４・５）

遺構検出は11～13層上面で行い、調査区の西端で南北方向にのびる溝を検出した。深さは東側では約20㎝、西側では溝の肩は不明瞭であるが、瓦の出土

状況なども考慮すると約1.5mの幅を持つ溝状の遺構になると判断した。この溝からは、礫などに混じって平瓦及び丸瓦が折り重なるように出土しており、さらに南北にも広がっていくと思われる。それより下層の11、12層中からは、調査区中ほどよりやや西で、図10で図示した高杯や甕などの破片がややまとまって出土した。遺構らしきものは検出できなかったことや、11、12層は礫なども多く含むため、古墳時代初頭の旧河道中に埋没していた遺物だと考えられる。

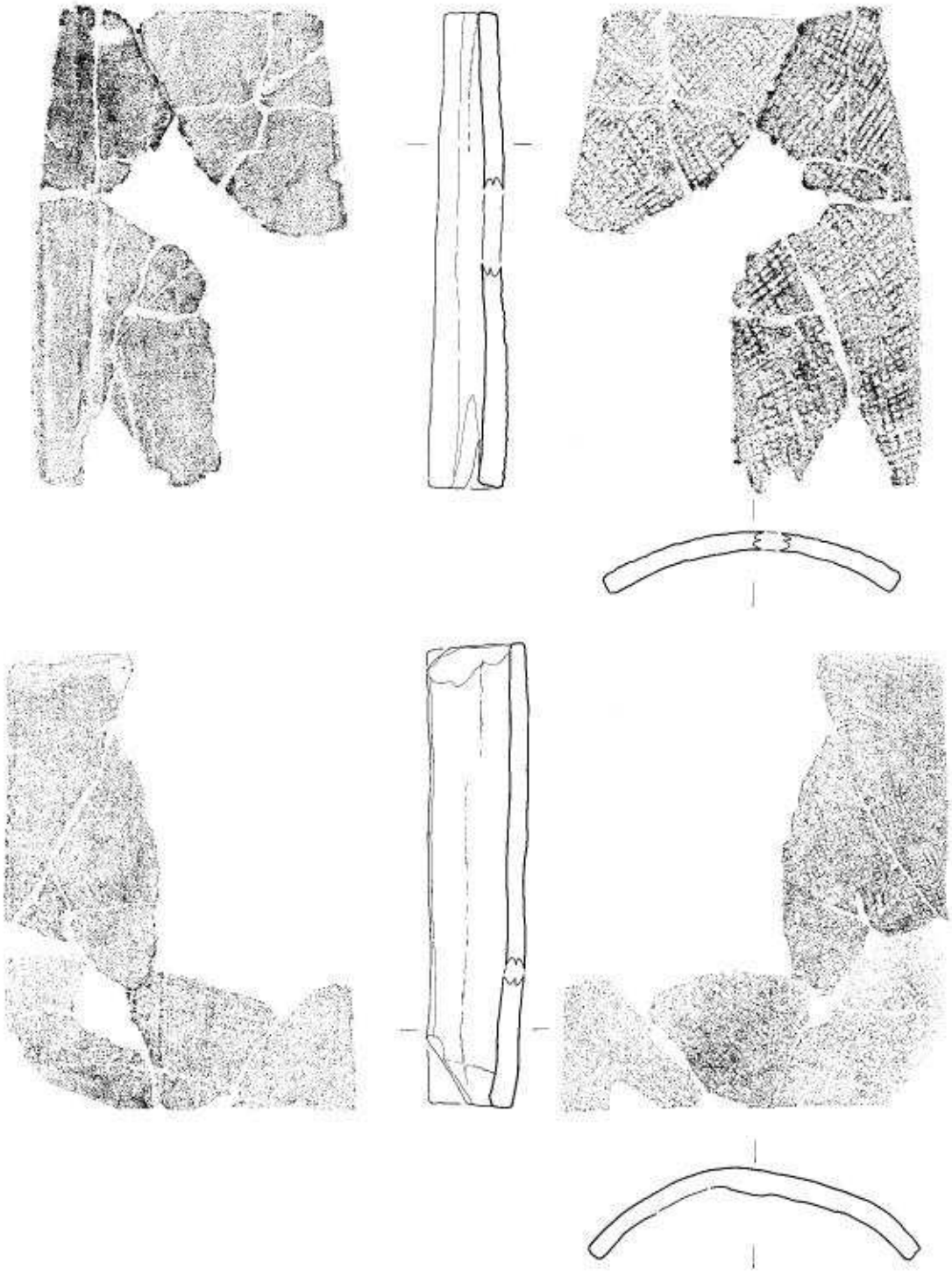


図6　北区南北溝出土瓦①〔平瓦〕(S=1/6)

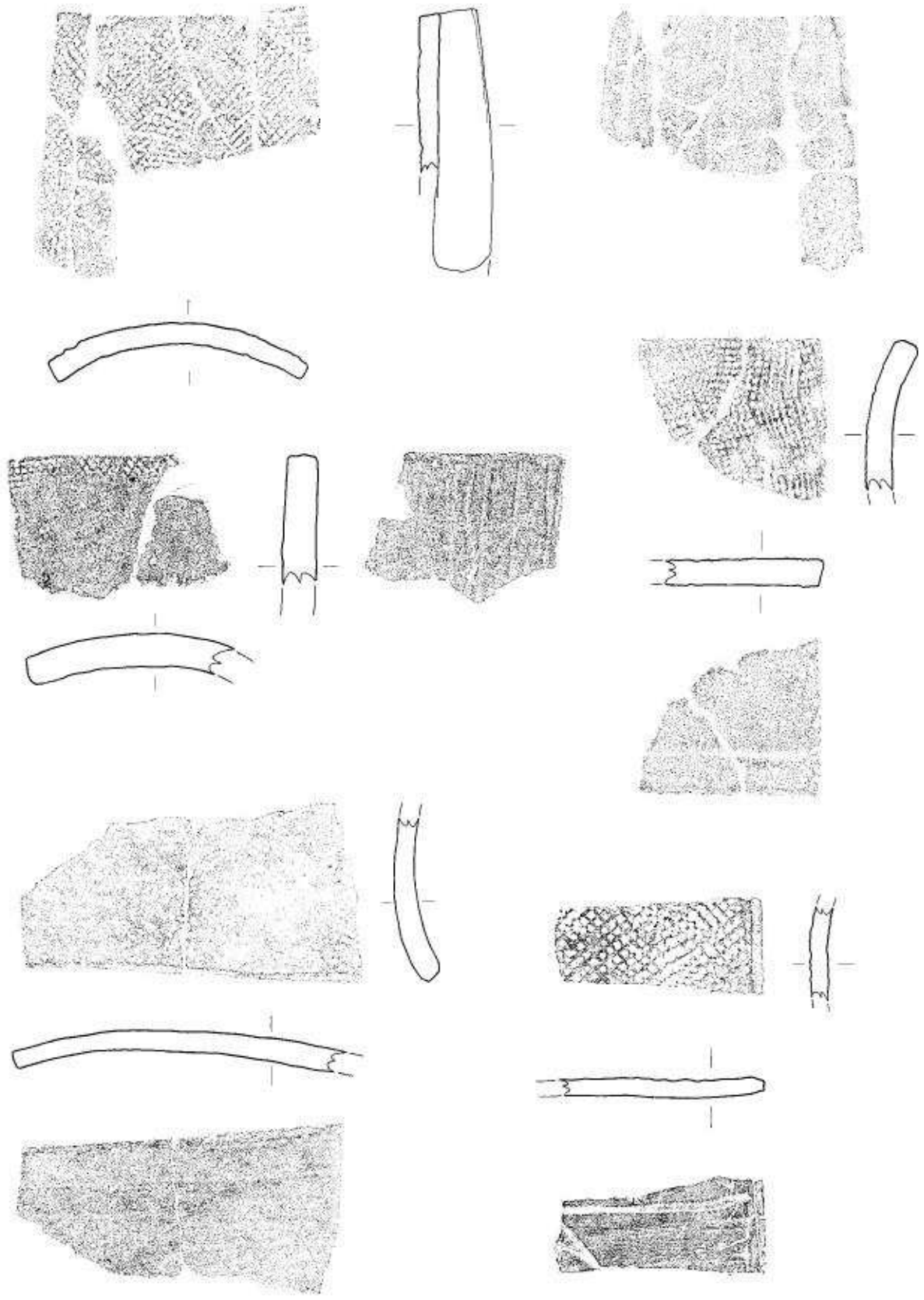


図 7　北区南北溝出土瓦②〔平瓦〕(S=1/6)

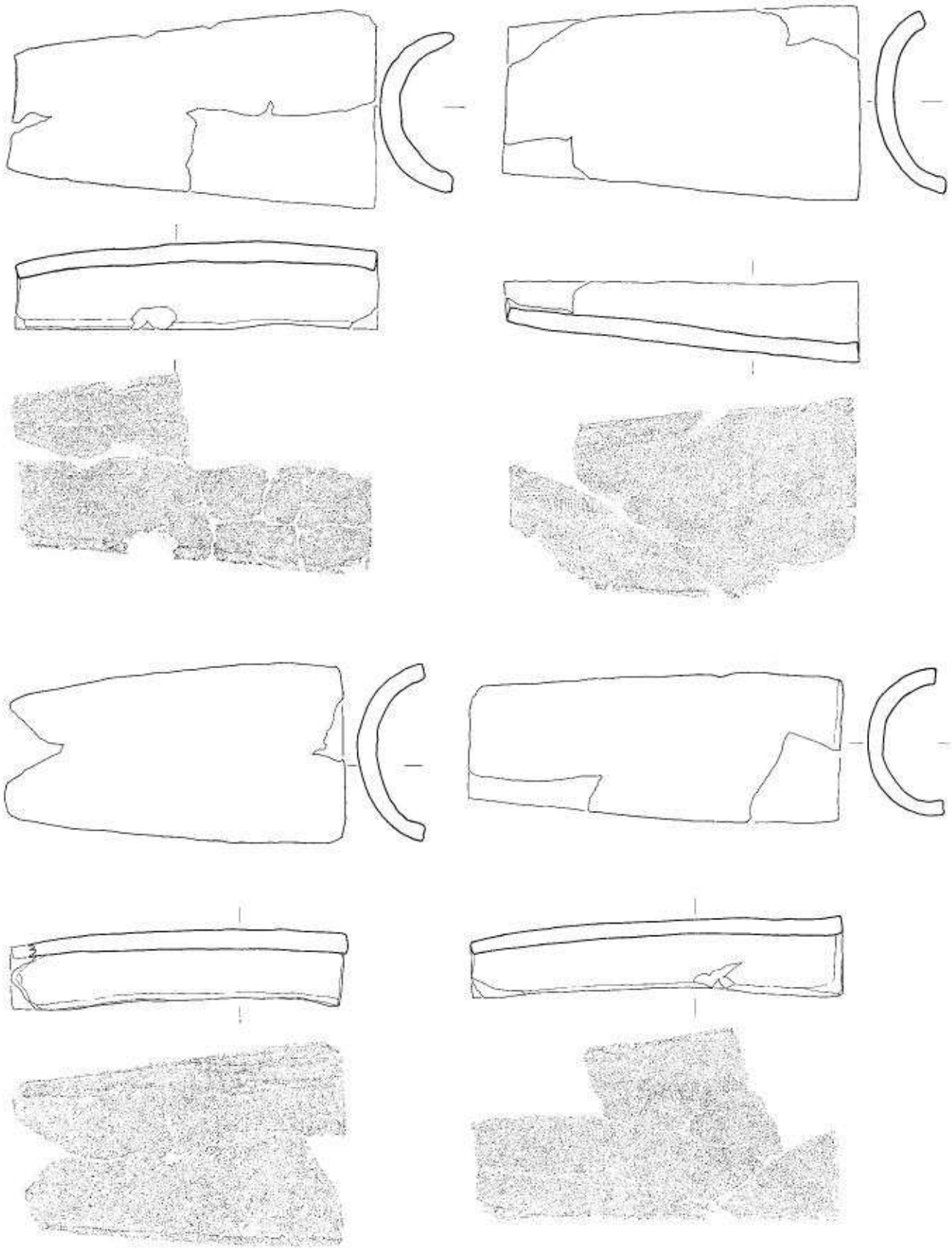


図 8　北区南北溝出土瓦③〔丸瓦〕(S=1/6)

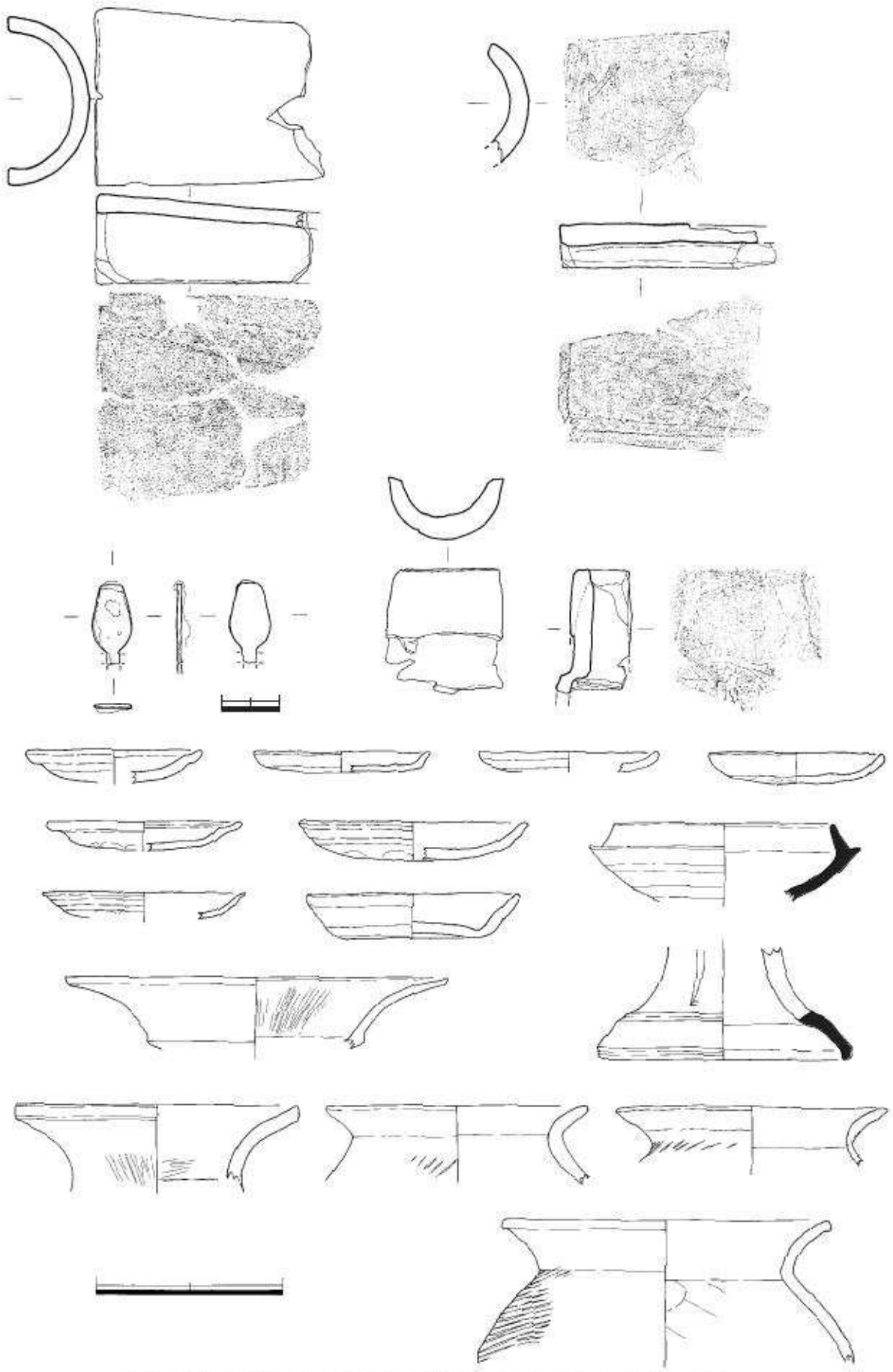


図 9　北区出土遺物〔瓦（S=1/6）・不明銅製品（S=1/2）・土器（S=1/3）〕

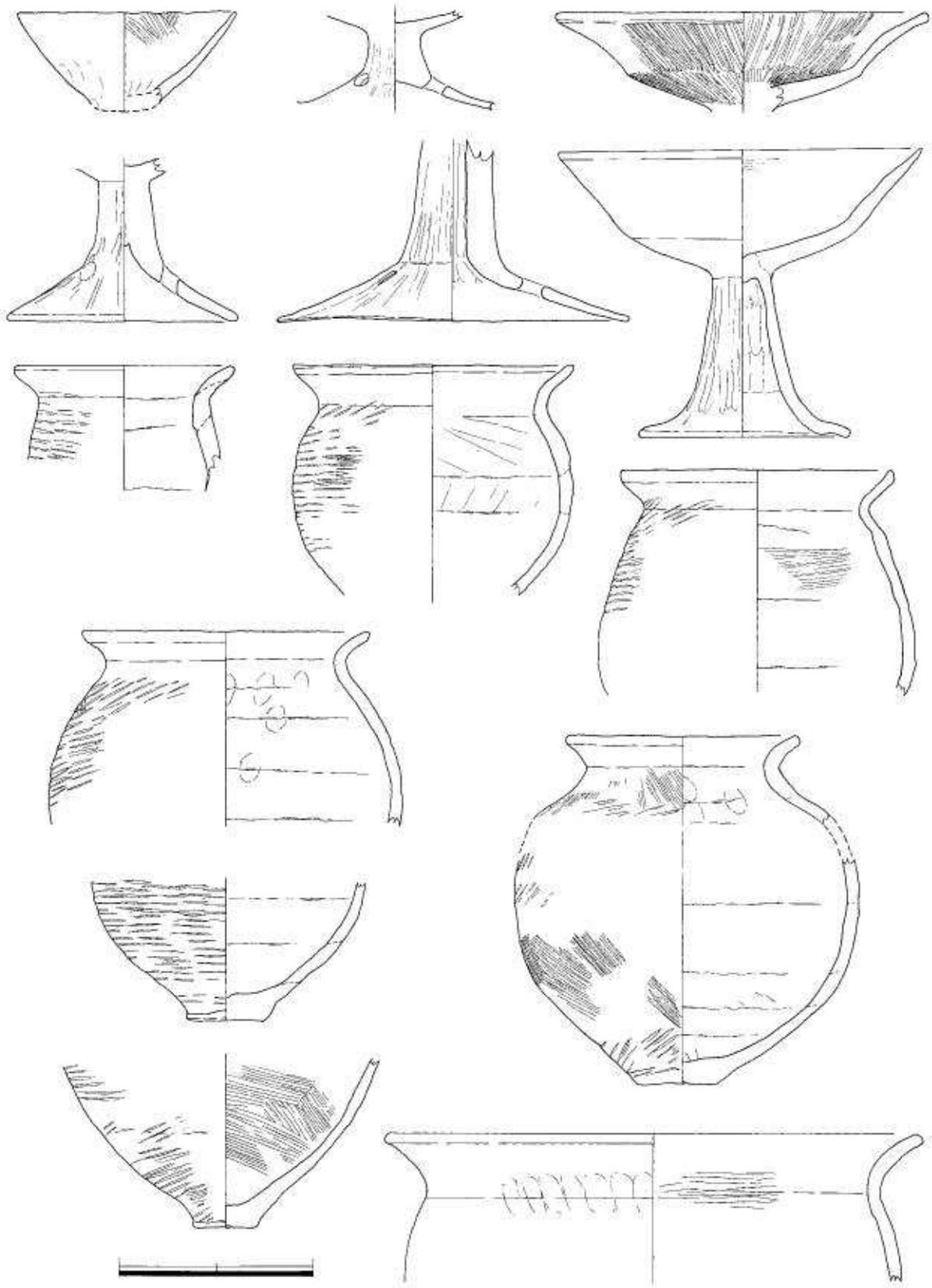


図10　北区出土土器（S=1/3）

（３）出土遺物の概要（図６～10・表２・3）

北区から出土したもののうち、瓦・土器・不明銅製品などを図示している。ここではその概要をのべるにとどめ、個々の法量、調整などは表２・３を参照していただきたい。南北溝からは瓦のみが出土している。平瓦よりも丸瓦の出土数が多く残存状態も丸瓦の方が良好な印象を受ける。平瓦は、凸面を格子目状のタタキ調整を施し、（２）などはそのうえからナデを施している。凹面は布目痕が残り、端部は面取りを施している。（４）のみが厚さ3.5cmと他と比べて厚手である。後述する南区で出土しているような縄目タタキをしているものはみられない。丸瓦では、行基瓦と玉縁丸瓦のものが出土しているが、行基丸瓦の方が多く、残りも良い。行基丸瓦のものは灰色系統で比較的硬質なものが多いのに比べると、玉縁丸瓦は灰白色でやや軟質である。行基丸瓦のものは、凸面はタタキ調整（おそらく格子目）をナデ消し、凹面には布目痕が残る。全長35～40cmで比較的規格はそろっている。

（15～30）は表土～中世包含層から出土しているものである。（15）は銅製のもので、出土地などを考えると仏具片の可能性もあるが用途は不明である。（31）～（45）は、図４－11・12層から出土しているもので鉢、高坏、甕などがあり、高坏などの形態から古墳時代初頭のものと思われる。

3．南区の調査成果

（１）基本層序（図11）

北区同様、調査前に厚さ約60cmの造成盛土がなされており（図11－１層）、その下層からは盛土以前に行われていた現代耕作に伴う土層（２～４層）が堆積していた。現代耕作土層以下の基本層序は、灰黄褐色シルト（５層）で、それ以下は砂礫層及び砂層が堆積しており、河川による自然堆積層になる。

出土遺物から各層の堆積時期をみると、５層からは土師器皿や瓦などを多く含む層で中世以降に堆積したと思われる。10・12～15層上面では後述するように多量の瓦が出土しており、これらの上面が安倍寺のベース面と考えられる。10～15層では瓦等は出土せず、古墳時代後期と思われる須恵器等含んでおり、古墳時代後期～安倍寺建立以前に堆積したものである。16層からの出土遺物は確認していない。

（２）検出遺構及び遺物出土状況（図11）

遺構検出は10～15層上面で行った。調査区北半で東西に並ぶ柱穴（SP01・02）及び小溝（SS03）を検出した。柱穴は径50～60cm程の円形の掘形をもち、SP01の深さは約50cm、SP02は約60cmである。柱穴の芯々間は、2.4mである。調査区の範囲では建物になるか東西方向に延びる柵になるかは判断できない。また、SS03は検出面では深さ約10cm、幅は約20cmの小規模なもので、調査区中央付近では削平されたためか確認できなかった。この小溝は柱穴から近接して検出されたことや、方向が柱列の平行しているため、雨落ち溝のような可能性もあるが、調査区内では判断できない。また、検出面においては調査区全体に平面的に平瓦や丸瓦が出土しており、特に南半側に集中している。瓦を除去すると、東西方向にのびる幅1.4mの溝状の落ち込み（SD04）がみられた。SD04は深さ約10cmで浅く、明瞭な溝にはみえないことや、瓦等がこの底に張り付くように出土したものでないため、積極的に遺構と判

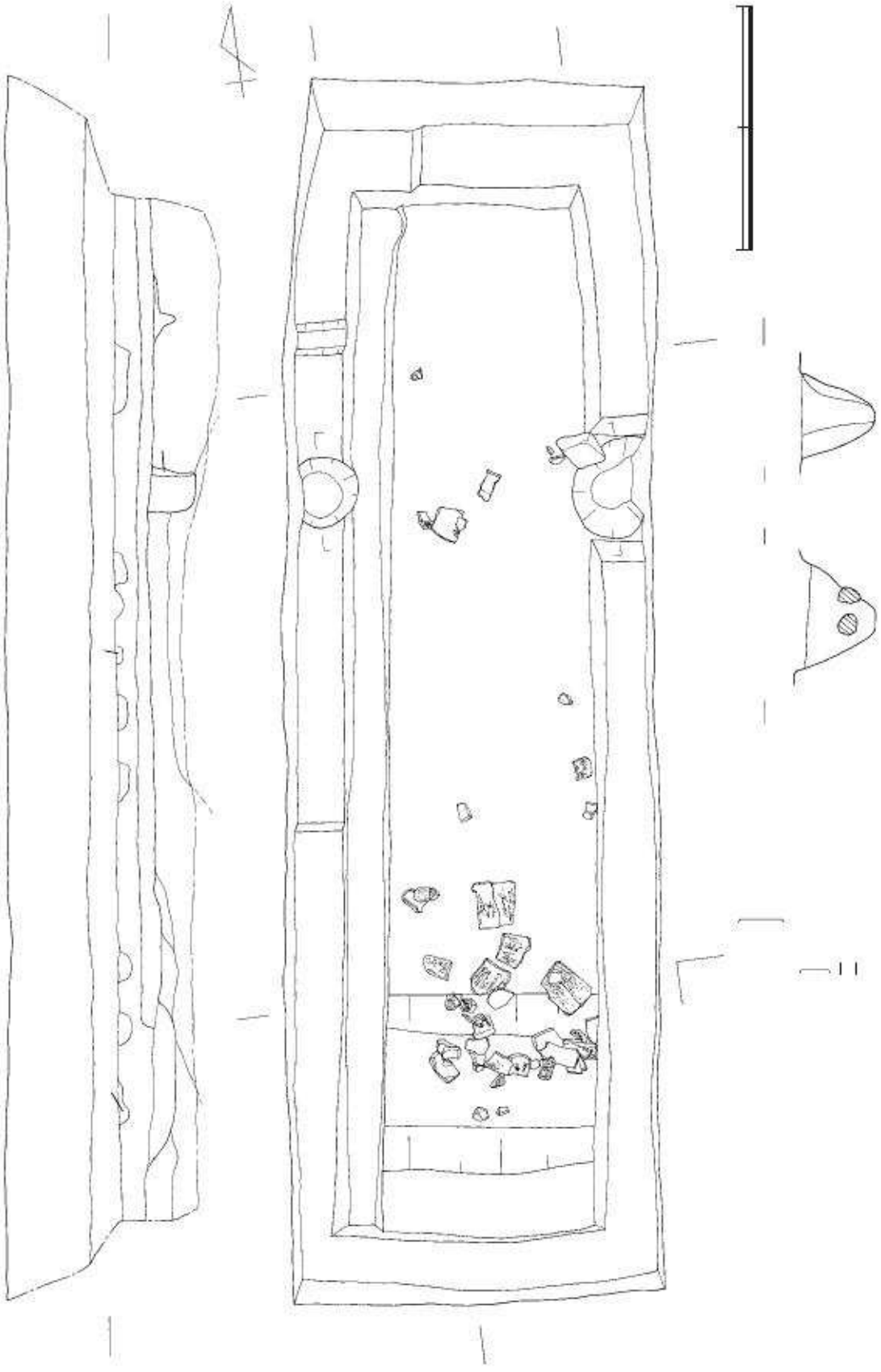


図11　南区平面・断面・出土状況図（S=1/50）

断しがたいが、この落ち込みを境に南側では、瓦などが出土していないことから一応図示しておく。

（３）出土遺物の概要（図12～14）

南区から出土したもののうち、瓦、土器、鉄滓を図示している。瓦類は、図11－10～15層上面から比較的まとまって出土している。平瓦は（46～50）のように、凸面縄目タタキで、凹面は布目が残って四周をやや広めに削っているのが多く見られ、（46・47）のように完形に復元できるものもみられる。全長35cm前後と規格もほぼそろっている。その他では、タタキ調整をきれいにナデ消しているものや（51）、橙色の色調をもつもの（52）、凸面に格子目タタキ調整を施すもの（53・54）もみられるがいずれも網目タタキのものより少数で破片のものが多い。丸瓦は平瓦に比して出土点数が少なく、（55）のように玉縁丸瓦が破片でみられただけである。SP02からは甕口縁（57）が出土しているが細片のため遺構の時期を決定付けるものではない。瓦以外では、（58～63）は中世包含層、（56・64～67）は10～15層の河川堆積と思われるものから出土したものである。

4．まとめ

今回は安倍寺の推定寺域の南東隅付近にあたるため、安倍寺に関連する遺構の検出が期待された。北区で検出された南北方向に延びる瓦の集積した溝は、すぐ北側で行われた第５次調査[4]の調査区西端でも検出されており、これらが同様の溝であれば、少なくとも長さは約13m以上の規模をもつ溝になる。ここから出土している瓦は溝の西側にあった建物に葺かれた瓦を反映している可能性がある。一方、南区では東西に延びる2基の柱穴と小溝（SS03）、浅い溝状（SD04）の遺構が検出されている。柱穴は東西方向に延びていく柵列の可能性も残されているが、調査区内で確認した範囲ではこれらの遺構が寺域の南限を示すものとは判断できない。しかしながら、安倍寺に関連する遺構の可能性が高いといえよう。以上のように、寺域を示す明確な遺構は検出できなかったが、安倍寺に関連する新たな遺構を検出できた。今回検出した遺構が安倍寺の中でどういう位置をしめるのか検討が及ばなかったが、寺域内のこれからの調査に期待し、今後の課題としたい。

【註記】

1）花谷浩　2003「出土瓦をめぐる諸問題」『吉備池廃寺』奈良文化財研究所創立50周年記念学報第68冊

2）清水真一　1989「国史跡安倍寺・宮西地区　発掘調査概要」『桜井市内埋蔵文化財1989年発掘調査報告書１』など

3）橋本輝彦　1998「安倍寺跡第18次発掘調査概要報告」『桜井市平成10年度国庫補助による発掘調査報告書』第20集

4）1985年度調査　未報告　幅0.8mの浅い溝を検出しており、瓦も多量に出土している。

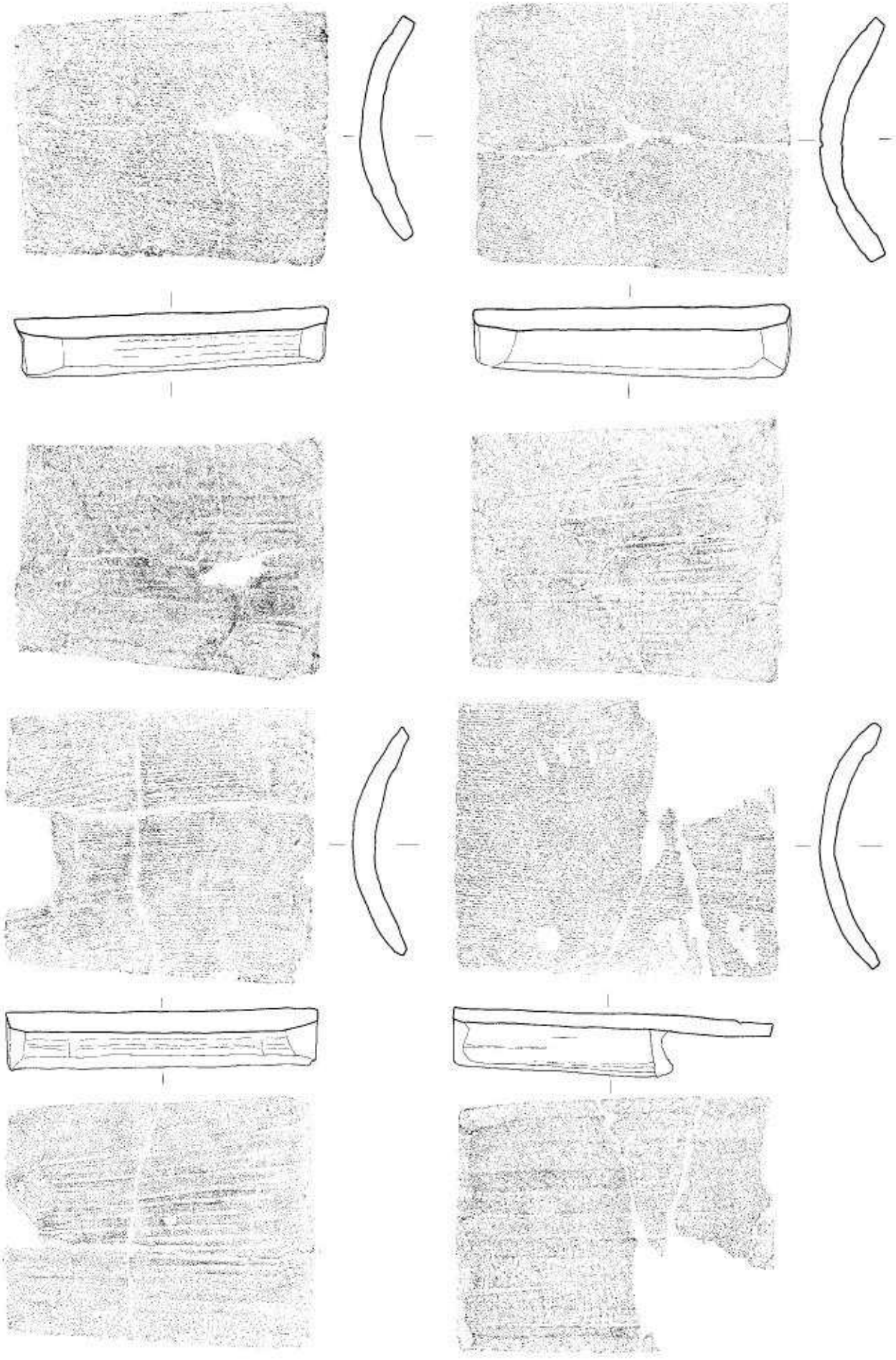


図12　南区出土瓦①〔平瓦〕(S=1/6)

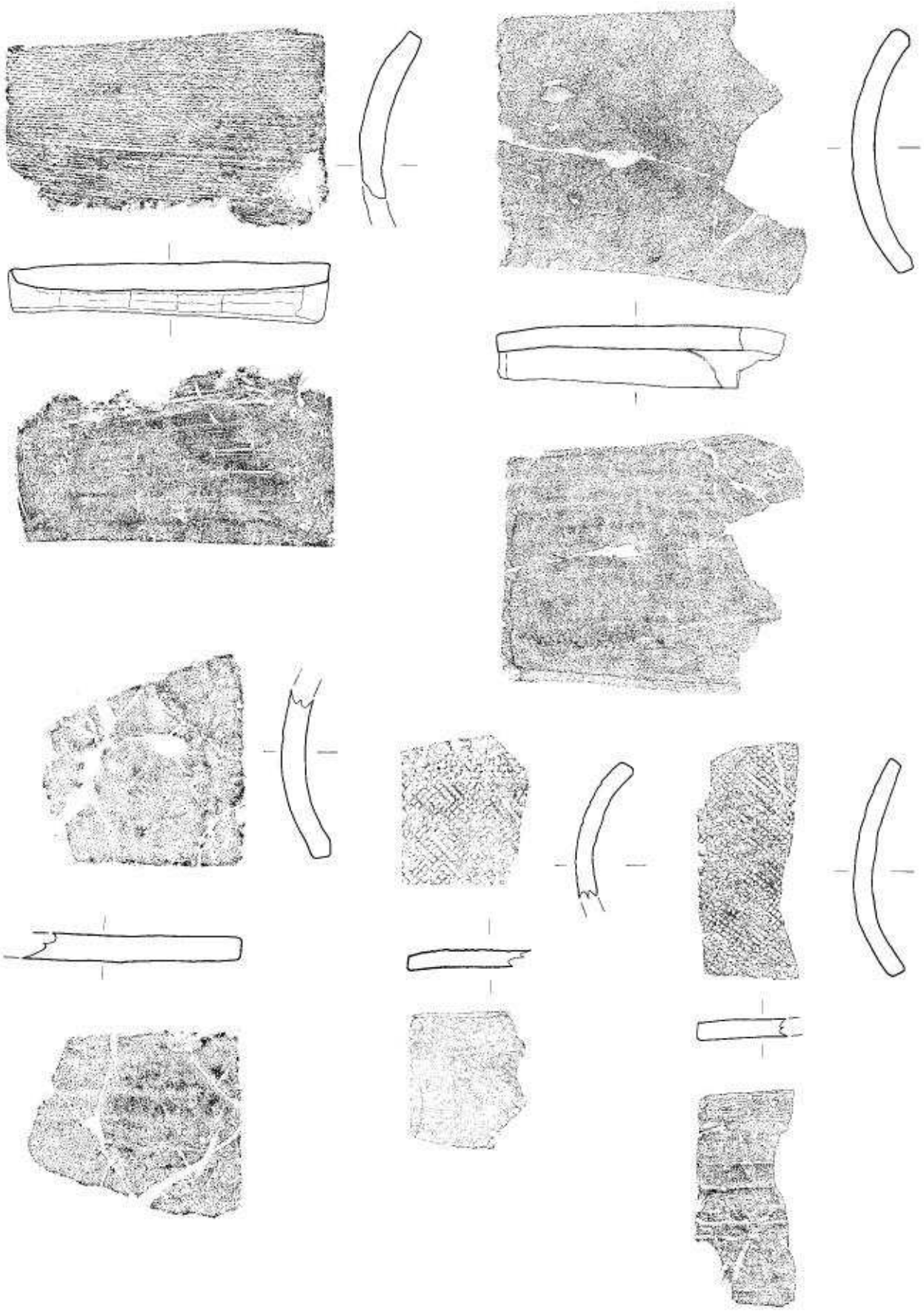


図13　南区出土瓦②〔平瓦〕(S=1/6)

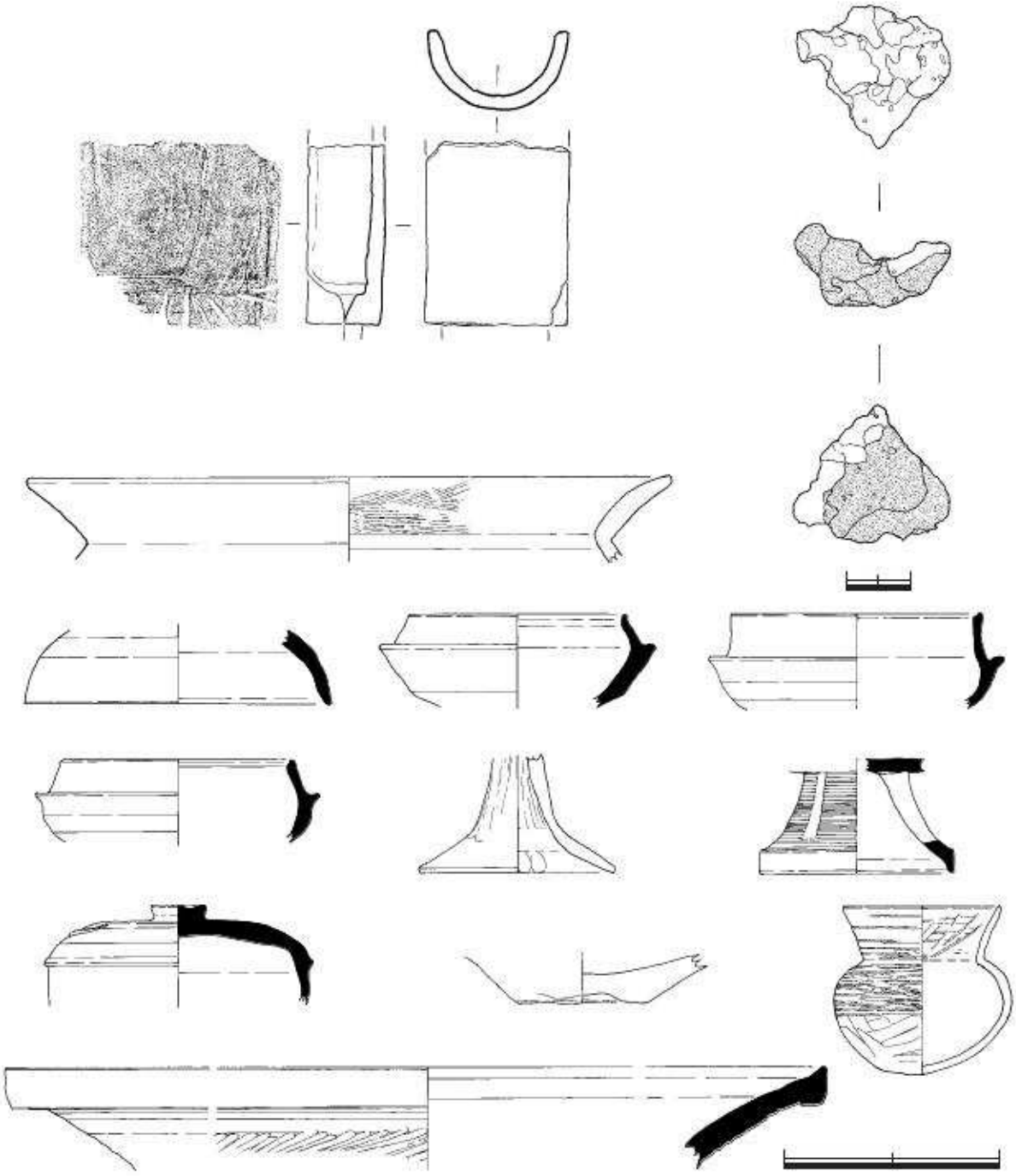


図14　南区出土遺物〔瓦（S=1/6）・鉄滓（S=1/2）・土器（S=1/3）〕

表2　瓦一覧表

図番号	地区	遺構・層位	器種	法量				色調	調整		残存状態
				全長	広端幅	狭端幅	厚さ		凸面	凹面	
1	北	南北溝	平	43.3	*28.9*	24.8	1.7	黄灰（2.5Y6/1）	格子目タタキ	布目	3/4
2	北	南北溝	平	42.3	30.2	*30.0*	1.7	黄灰（2.5Y6/1）	格子目タタキ	布目	3/5
3	北	南北溝	平	(28.3)		24.4	2.1	灰黄（2.5Y7/2）	格子目タタキ	不明	2/5
4	北	南北溝	平	(21.3)			3.5	灰（N5/）	格子目タタキ	布目	不明
5	北	南北溝	平	(20.0)			2.6	オリーブ灰(2.5GY5/1)	格子目タタキ	布目	1/5
6	北	南北溝	平？	(34.8)			2.1	灰（N5/）	格子目をナデ消す	布目	不明
7	北	南北溝	平？	(21.6)			1.8	にぶい橙（7.5YR7/4）	格子目タタキ	布目	1/6
8	北	南北溝	丸	39.4	*21.0*	13.0	2.2	灰（N5/）	格子目をナデ消す	布目	3/4
9	北	南北溝	丸	38.4	*20.8*	*16.2*	2.2	灰（N5/）	ナデ	布目	4/5

10	北	南北溝	丸	35.8	19.6	13.2	2.1	灰（N4/）	ナデ	布目	一部欠損
11	北	南北溝	丸	39.8	16.0	12.5	1.6	灰（N4/）	格子目をナデ消す	布目	4/5
12	北	南北溝	丸	(22.4)	19.0		1.7	にぶい黄（2.5YR6/3）	ナデ？	布目	1/2
13	北	南北溝	丸	(22.8)			2.0	灰白（5Y7/1）	ナデ	布目	1/4
14	北	中世包含層	丸	(12.4)		12.2	2.5	にぶい黄（2.5YR6/3）	ナデ	布目	1/5
46	南	瓦集中	平	35.0	27.5	23.5	2.4	灰黄色（2.5Y7/2）	縄目タタキ	布目	ほぼ完形
47	南	瓦集中	平	35.2	29.5	25.0	2.4	灰黄色（2.5Y7/2）	縄目タタキ	布目	ほぼ完形
48	南	瓦集中	平	34.6	28.7	24.9	2.5	灰黄色（2.5Y6/1）	縄目タタキ	布目	ほぼ完形
49	南	瓦集中	平	35.8	*28.5*	26.5	1.9	浅黄色（2.5Y7/3）	縄目タタキ	布目	4/5
50	南	瓦集中	平	35.0	*20.0*	*12.0*	2.2	灰(5Y6/1)～ 灰黄(2.5Y7/1)	縄目タタキ	布目	1/2
51	南	瓦集中	平	(31.2)	*29.0*	24.7	2.4	青灰（10BG6/1）	ナデ	布目	3/5
52	南	瓦集中	平	20.0			2.5	橙（7.5YR6/6）	不明	布目	1/2
53	南	瓦集中	平	14.8			1.9	灰（N4/）	格子目タタキ	布目	1/5
54	南	瓦集中	平	(12.0)	23.0	22.8	2.0	灰（N4/）	格子目タタキ	布目	2/7
55	南	瓦集中	丸	(17.0)	*13.2*		1.1	灰（5Y4/1）	ナデ	布目	1/2

＊法量の単位はcm。（）は、残存部。斜字は残存部から推定した値。

表３　土器・その他一覧表

図番号	地区	遺構・層位	種別	器種	口径	器高	色調	残存状態	調整等
15	北	包含層（中世）	銅	不明	全長3.0	0.2			
16	北	包含層（中世）	土師器	皿	8.9	(1.2)	橙（5YR6/6）	1/4	(外)ヨコナデ(内)ヨコナデ
17	北	包含層（中世）	土師器	皿	10.0	(1.5)	にぶい橙7.5Y6/4）	1/4	(外)ヨコナデ、押捺(内)ヨコナデ
18	北	包含層（中世）	土師器	皿	10.6	(1.4)	にぶい橙（7.5Y6/4）	口縁1/12	(外)ヨコナデ、押捺(内)ヨコナデ
19	北	包含層（中世）	土師器	皿	9.2	(1.1)	にぶい褐（7.5Y5/3）	1/4	(外)ヨコナデ、押捺(内)ヨコナデ
20	北	包含層（中世）	土師器	皿	9.2	(1.1)	にぶい橙（7.5Y6/4）	1/5	(外)ヨコナデ(内)ヨコナデ
21	北	包含層（中世）	土師器	皿	9.0	(1.7)	にぶい橙（7.5Y6/4）	1/10	(外)口縁部ヨコナデ、底部押捺 (内)口縁部ヨコナデ
22	北	包含層（中世）	土師器	皿	11.8	2.0	にぶい橙（7.5Y6/4）	1/5	(外)ヨコナデ、押捺(内)ヨコナデ
23	北	包含層（中世）	土師器	皿	11.0	(2.4)	橙（5YR6/6）	2/5	(外)ヨコナデ(内)ヨコナデ
24	北	包含層（中世）	須恵器	坏身	11.5	(4.1)	灰（7.5Y6/1）	口縁部1/5	(外)回転ナデ、ケズリ(内)回転ナデ
25	北	包含層（中世）	須恵器	高坏	脚径12.8	(5.9)	灰（7.5Y6/1）	脚1/6	(外)回転ナデ(内)回転ナデ
26	北	包含層（中世）	土師器	高坏	20.0	(3.7)	にぶい橙（7.5Y6/5）	口縁1/10	(外)？(内)ミガキ
27	北	包含層（中世）	土師器	広口壺	14.8	(4.5)	にぶい黄橙(10Y6/4)	口縁部1/2	(外)ミガキ(内)ミガキ？
28	北	包含層（中世）	土師器	甕	13.5	(4.1)	明赤褐色（5YR4/4）	口縁部1/6	(外)タタキ(内)口縁部ナデ
29	北	包含層（中世）	土師器	甕	14.2	(3.2)	にぶい橙（7.5Y6/4）	口縁部1/2	(外)タタキ(内)口縁部ナデ
30	北	包含層（中世）	土師器	甕	16.9	(6.4)	にぶい褐（7.5Y5/3）	1/10	(外)タタキ(内)ナデ
31	北	包含層（中世）	土師器	鉢	11.0	(5.0)	黄灰（2.5Y4/1）	1/4	(外)？(内)ハケ
32	北	図４－12層	土師器	高坏	頸径3.0	(4.9)	にぶい橙（7.5Y6/4）	頸部のみ	(外)ミガキ(内)
33	北	図４－12層	土師器	高坏	脚径2.6	(8.3)	明赤褐色(2.5YR5/6)	脚全周	(外)ミガキ(内)不明
34	北	図４－12層	土師器	高坏	脚径17.8	(9.2)	にぶい橙（7.5Y6/4）	脚部1/2	(外)ミガキ(内)不明
35	北	図４－12層	土師器	高坏	18.6	(5.0)	にぶい橙（7.5Y6/4）	坏部のみ	(外)ミガキ(内)ミガキ
36	北	図４－12層	土師器	高坏	18.4	(14.5)	明赤褐色（5YR5/8）	2/3	(外)脚部はナデ(内)坏部はミガキ？
37	北	図４－12層	土師器	甕	10.9	(6.3)	にぶい橙（7.5Y6/4）	1/2	(外)タタキ(内)ハケ
38	北	図４－12層	土師器	甕	14.1	(11.6)	にぶい黄褐色(10YR5/3)	1/4	(外)タタキ(内)ハケ？ナデ
39	北	図４－12層	土師器	甕	13.6	(11.4)	明赤褐色（5YR4/4）	1/10	(外)タタキ(内)ハケ
40	北	図４－12層	土師器	甕	14.4	(9.8)	にぶい黄褐色(10YR5/3)	口縁部1/4	(外)タタキ(内)ハケ？ナデ
41	北	図４－12層	土師器	甕	底径3.7	(7.1)	にぶい橙（7.5Y6/4）	1/3	(外)タタキ(内)不明
42	北	図４－12層	土師器	甕	底径2.8	(8.6)	にぶい黄橙(10Y6/4)	底部	(外)タタキ(内)ハケ
43	北	図４－12層	土師器	甕	11.5	(4.5)	にぶい橙（7.5Y6/4）	口縁部1/8	(外)タタキのちハケ？(内)不明
44	北	図４－12層	土師器	甕	底径4	(11.9)	にぶい橙（7.5Y6/4）	底部のみ	(外)タタキ(内)板状工具痕
45	北	図４－12層	土師器	甕	26.7	(7.6)	明赤褐色(2.5YR5/6)	口縁1/20	(外)ナデ、ユビ押さえ (内)ミガキ
56	南	図４－15層	鉄	鉄滓	4.3×4.8	1.2			底面に炉床粘土残存
57	南	SP02	土師器	甕	30.8	(4.1)	にぶい黄橙(10Y6/4)	口縁５％	(外)ナデ(内)ハケ
58	南	包含層（中世）	須恵器	坏蓋	14.1	(4.3)	灰白（N7/）	1/7	(外)回転ナデ(内)回転ナデ
59	南	包含層（中世）	須恵器	坏身	10.0	(4.3)	灰白（N7/）	1/5	(外)回転ナデ・ケズリ(内)回転ナデ
60	南	包含層（中世）	須恵器	坏身	11.6	(4.4)	黄灰（2.5Y6/1）	口縁1/4	(外)回転ナデ、削り(内)回転ナデ
61	南	包含層（中世）	須恵器	高坏	脚径8.8	(5.3)	灰（N5/）	脚部1/4	(外)カキ目(内)回転ナデ
62	南	瓦層	須恵器	坏身	10.6	(3.3)	灰白（N7/）	1/7	(外)回転ナデ・ケズリ(内)回転ナデ
63	南	瓦層	土師器	高坏	脚径8.8	(5.5)	明赤褐（5YR5/6）	脚部のみ	(外)板ナデ(内)ユビ押さえ
64	南	図11－15層	須恵器	坏蓋	最大径12.4	(4.7)	灰（N5/）	天井部のみ	(外)回転ナデ・ケズリ(内)回転ナデ
65	南	図11－15層	土師器	壺	5.8	(2.2)	にぶい黄橙(10Y6/4)	底部のみ	(外)不明(内)不明
66	南	図11－14層	土師器	小型丸底壺	7.2	7.7	明赤褐（5YR5/6）	ほぼ完形	(外)上半部ミガキ、下半ケズリ (内)ミガキ
67	南	図11－15層	須恵器	器台？	54.0	(4.7)	灰（N4/）	口縁1/13	(外)回転ナデ(内)回転ナデ

＊単位はcm。（）は残存部の値。調整等の欄で（外）は外面、（内）は内面の調整等。

第２節　谷遺跡第22次発掘調査報告

１．はじめに

谷遺跡第22次調査は、桜井市安倍木材団地１丁目１番地１において、個人住宅の建設に先立って行なわれた。桜井市街地の南西に位置する谷遺跡では、これまでに弥生時代から飛鳥時代を中心とする時期の遺構・遺物が見つかっている。注目されるものとしては、古墳時代の玉造関連遺物[1]、フイゴ羽口や鉄滓などの鍛冶関連遺物[2]が複数の調査で確認されており、付近に玉造や鍛冶などの工房が存在したことを示唆するものとして注意される。

第22次調査地は遺跡の南端部に位置し、西へ向かって下がる傾斜地の上端部分に立地している。そのすぐ西側で実施された第14次調査や第17次調査では鍛冶関連遺物が出土していることから[3]、今回の調査でも同様のものが確認される可能性が考えられた。なお調査は平成18年１月30日から実施し、２月６日に埋め戻しを完了している。調査面積は30㎡である。

2．基本層序と遺構・遺物

トレンチは対象地の中央に、東西10m、南北３mの規模で設定した。現地表面から30～50㎝程度は現代の盛土が存在し（図16－１・２層）、直下には現代の水田耕作土である粘質土が存在する（６層）。その下層にある粘質土（11層）は遺物を含んでいないため時期は不明であるが、これも土質の状況から現代の耕作土と考えてよいであろう。その下には風化礫で構成される地山が存在する（12層）。現地表面から地山上面までの深さは、トレンチ西端付近で50㎝余り、東寄りの位置では70㎝程度を測る。

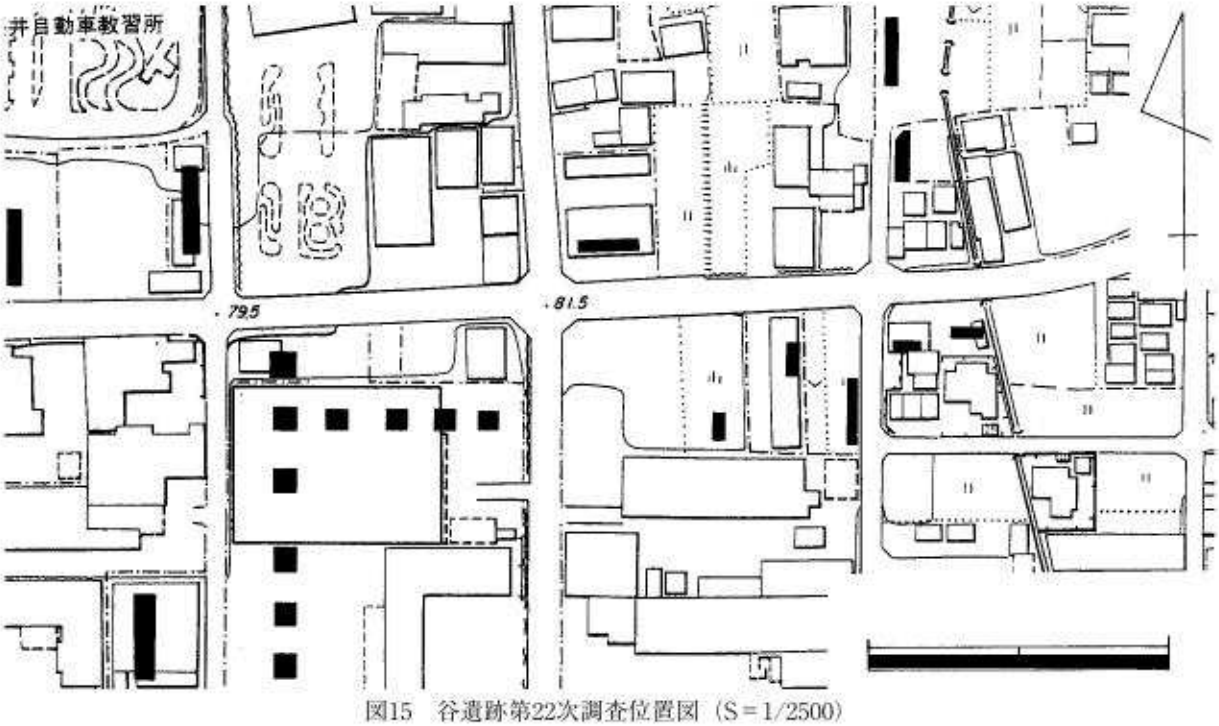


図15　谷遺跡第22次調査位置図（S＝1/2500）

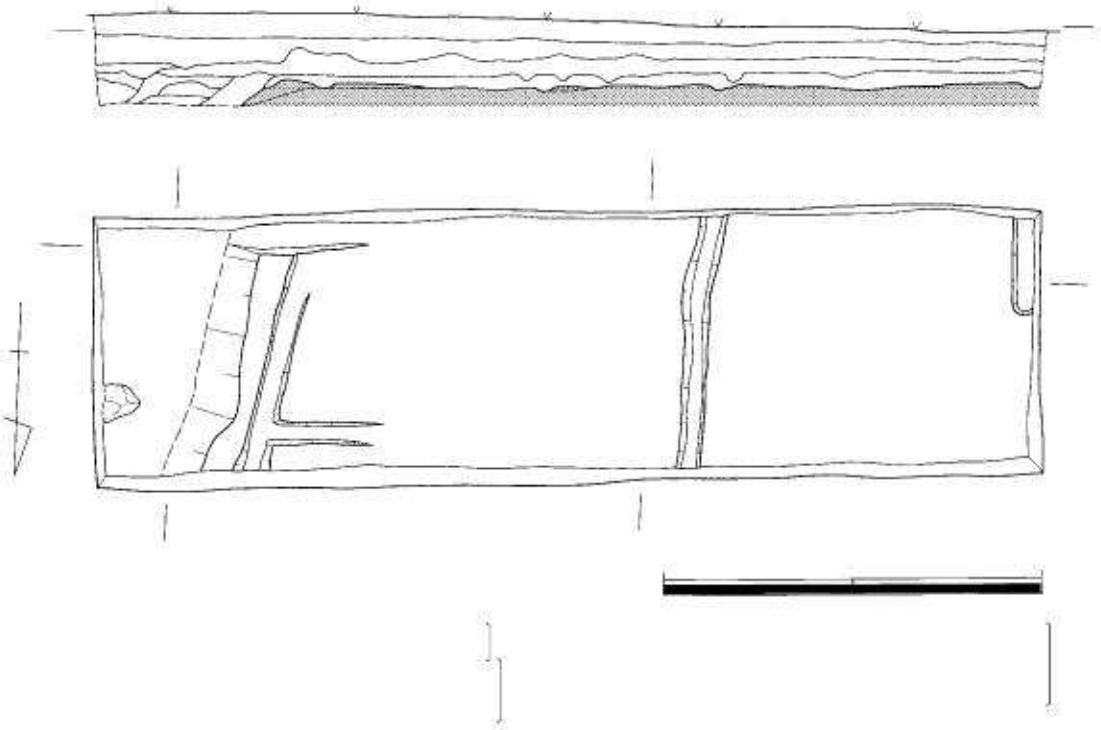


図16　トレンチ平面・断面図（S＝1/80）

地山上面で認識された遺構としては、現代のものと思われる溝が数条と、トレンチ東端付近の落ち込みがある。この落ち込みの埋土（10層）にはプラスチック製品の破片が含まれており、現代のものであることは明らかである。敷地の東縁には用水路が設けられていることから、この落ち込みは用水路設置時のものである可能性も考えられる。

出土遺物としては、落ち込み埋土より須恵器小片がわずかに確認されているに過ぎない。

3. まとめ

今回の調査では、当初想定されたような遺構・遺物は確認されなかった。現代耕作土の直下で地山が確認されたことから、比較的最近に旧地形が改変されたものと考えられる。一方、すぐ西側で実施された第14次調査では、西へ向かって下がる地山面とともに、古墳時代の整地層や遺構が確認されている。これらから第14次調査地付近が地形の変化点となり、これより東側には丘陵状の高まりが存在したと推定できる。今回の調査地はこの高まりが削平された部分に位置するものと理解できる。

（福辻）

【註記】

1）清水眞一　1994『桜井市内埋蔵文化財1992年度発掘調査報告書２　谷遺跡第５次調査』（財）桜井市文化財協会

2）松宮昌樹　2000「谷遺跡第14次調査報告」『桜井市平成11年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会

　松宮昌樹　2003「谷遺跡第17次発掘調査報告」『桜井市平成14年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会

3）註２）文献に同じ

第３節　纒向遺跡第144次調査（纒向石塚古墳第９次調査）概要報告

１．はじめに（図17）

纒向遺跡第144次調査は、桜井市大字太田271－１で行われた纒向石塚古墳の範囲確認のための調査である。纒向石塚古墳は、纒向遺跡の中心よりやや西よりに位置し、周囲には勝山古墳、矢塚古墳、東田大塚古墳などが築かれ、それらとともに纒向古墳群を形成している。纒向石塚古墳における調査は1971年の第１次調査に始まり、調査の初期の段階から最古段階の古墳として発表され注目を浴びることになった。その後今回まで８回にわたる調査が行われている[1]（図18）。

過去に行われた調査から、現在纒向石塚古墳の築造時期に関しては諸説あるものの[2]、墳丘の規模や形状は明らかにされている。墳丘の規模は全長96m、後円部径64m、くびれ部幅15～16m、前方部長32mで、周濠は後円部では幅約20mの規模で墳丘に沿うように掘削され、前方部前面では幅５mの規模で周濠が掘削されていることが判明している。このように、墳丘形状が明らかにされてきている中で、くびれ部付近の周濠外側の形状に関しては、当時の調査では上面検出での確認にとどまっており、周濠が長い期間オープンな状態であった当古墳の場合では、その形状を復元するにはこころもと無かった。よって、今回はくびれ部の北東側に調査区を設け、周濠を含めた古墳の全体像を明らかにする目的で調査を行った。調査では、後述するように石塚東古墳を新たに発見するなど予想外の成果もあり、埴輪を中心とした遺物が膨大な量であった。そのため、遺物整理作業が進行しておらず、ここでは遺構を中心とした概要を述べることにする。なお、調査期間は平成17年12月27日～平成18年３月31日で、３月25日には現地説明会を行なっている。調査面積は約470㎡である。

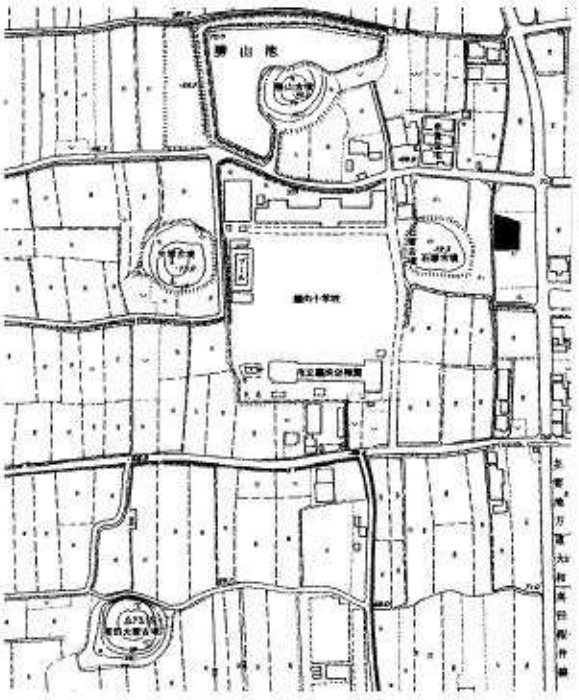
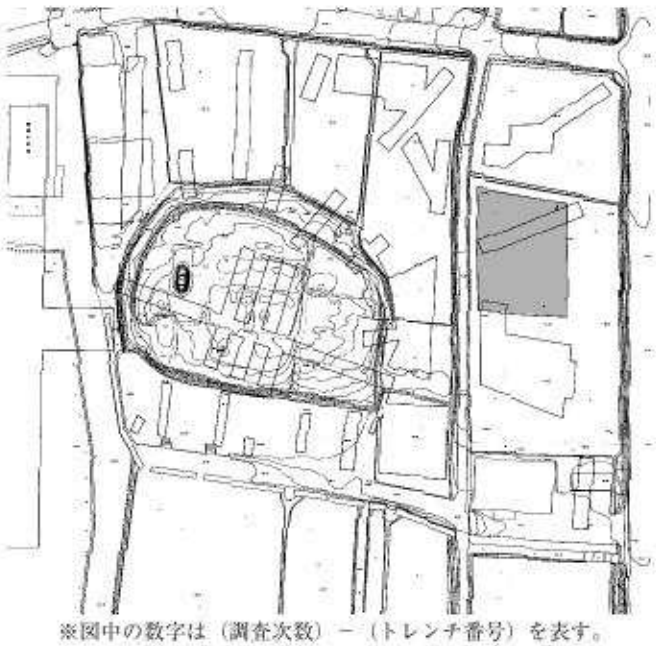


図17　纒向遺跡第144次調査位置図（S=1/3,000）



※図中の数字は（調査次数）－（トレンチ番号）を表す。

図18　これまでの調査位置　（S=1/1,600）

2. 検出遺構の概要

調査地は近年まで耕作が行われており、耕土が厚く堆積していた。まず、バックホーによりそれらを除去した。地形は総じて、南西方向に向かって下がるように傾斜しており、北西から南側にかけ包含層上面から多数のピットなどが検出されたため、まず、包含層上面で遺構を検出し、最終的には地山層上面で検出を行なった。結果、大きく分けて近現代（太平洋戦争時）、中世～平安時代、古墳時代中期後半、古墳時代初頭に属する遺構を検出した。以下それぞれについて概要を記したい。

（1）太平洋戦争時（図19）

調査区北西隅で、現代耕作土を除去時に直径20cm前後の丸太材を使用した打ち込み杭24本が対角長約4.7mの規模をもち、ほぼ正十二角の形状で、規則的に並んだ状態でみつかった。杭の端は斜めに切断された跡があり、戦後、農地として利用する際に耕作の妨げとなる部分を切断したと思われる。調査地周辺では、太平洋戦争末期に天理市の柳本飛行場から兵隊が来て対空用の高射砲陣地を設営したという話が残っており[1]、対空砲火用の機銃などのコンクリート製の台座の基礎を支えるものであったと思われる。ただ、これに関連すると思われるコンクリート片などはみつかっておらず、これらの施設がどの段階まで完成されたものであったかは不明である。

（2）中世～平安時代（図19）

上層の遺構として、井戸2基と柱穴約120基、土坑、素掘溝などの遺構を検出している。

井戸1（SE20011）は、一辺約1.8mの方形の井戸で、深さは検出面から約2.1mある。井戸枠などは残存していないが、その規模を考えると抜き取られた可能性もある。また、調査区南西に位置する井戸2（SE20163）は、約1.5m×1.3mの楕円形の掘形で深さが約1.3mある。井戸の埋土から曲物が出土しているが、掘形の底から50cm浮いた状態で出土しており、井戸枠として設置された状態ではない。井戸枠として使用していたものか、もしくは他で不要になったものを廃棄したものだと思われる。曲物内やその周辺から土師器皿や横櫛が出土している。その中の土師皿には「吉」とみられる墨書が描かれているものがあった。出土土器から、9世紀後半～10世紀頃のものだと思われる。また、11世紀以降のものと考えられる柱穴を約120基検出した。この中から、少なくとも2棟の掘立柱建物と、柵と考えられる柱列を約12m分確認している。調査区南端でみつかった掘立柱建物1は南北1間（約3.9m）・東西4間以上（約7.8m）の東西棟の建物である。これに重なる位置で確認した掘立柱建物2は、南北1間（約3.9m）・東西2間以上（約3.9m）の建物となる。柱列はこれらの建物の南北軸と平行に設置されており、2棟の掘立柱建物などに伴う柵列の可能性がある。（丹羽）

（3）古墳時代中期後半（図22）

調査区北東では、平安時代の包含層を除去した段階で新たに古墳の周濠を確認した。墳丘は完全に削平されていたが、周濠の形状から、円丘に短小な突出部がとりつく帆立貝形古墳であったことがわかった。当該地に「塚東」という小字が残るため石塚東古墳と命名した。

石塚東古墳周濠（図20） 周濠は幅2～4m、深さ0.5～0.8m程度で、埋土の堆積は大きく分けて、上層、中・下層、最下層と、墳丘・周濠外肩からの流入土で構成される。中層と下層はともに灰色粘

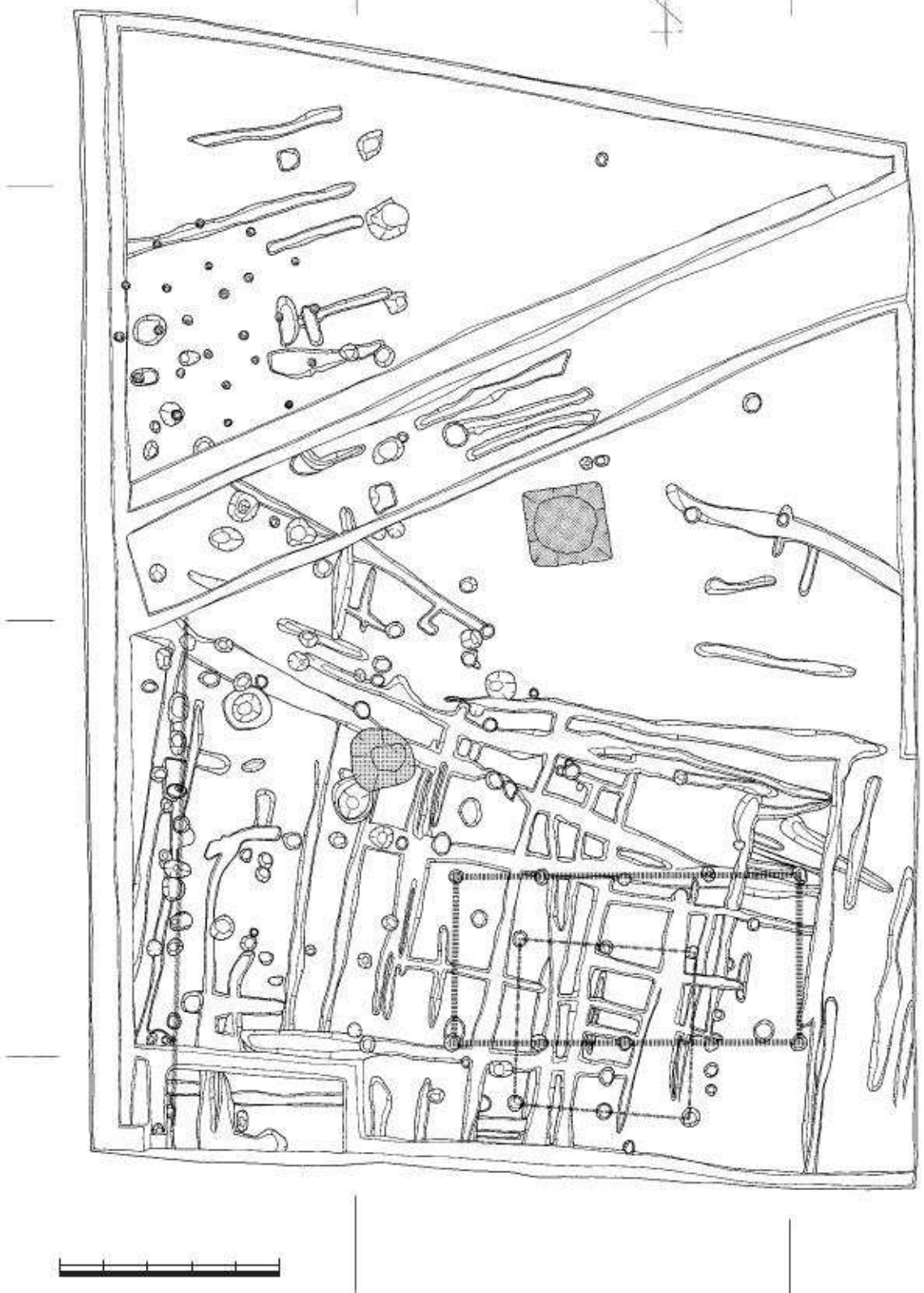


図19　上層平面図（S=1/140）

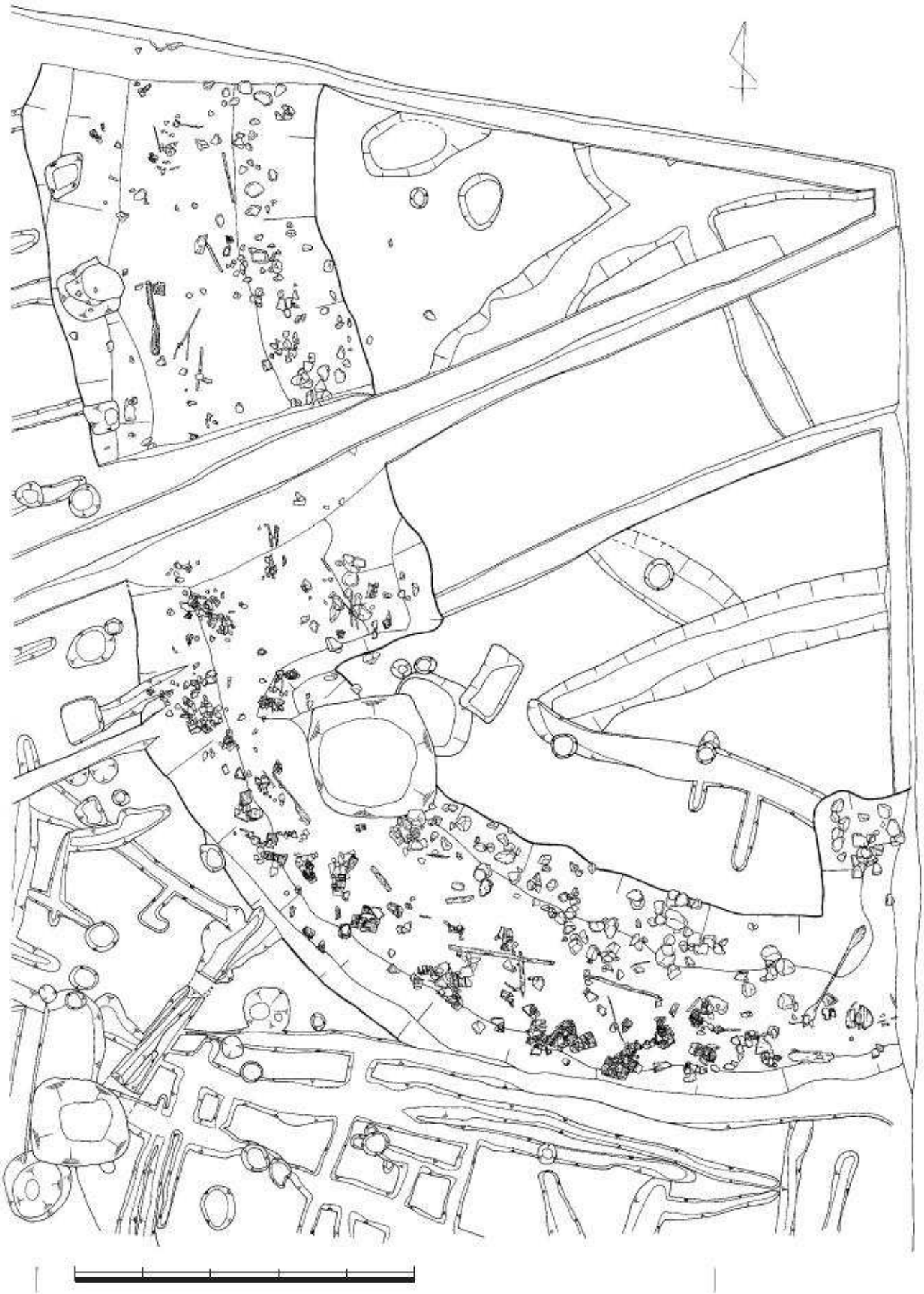


図20　石塚東古墳周濠遺物出土状況（S=1/80）

土で中層には比較的多くの砂礫が混じるが、両者を分層しえない箇所も多く、この場合を中・下層とした。木製品・埴輪片が非常に多い層である。墳丘側の流入土は、最下層上に堆積する礫や粘土ブロック混じりの層と、砂質土とシルトで構成される層がみられた。後者は下層堆積以降のもので、葺石と思われる石材が多くこの中に含まれていた。また、この流入土は墳丘を構成する地山の土に似ることから、墳丘崩落土と考えられるが、土量からみて大規模な削平に伴うものではないようである。なお、石材の中で原位置を保っているものがないため、墳丘基底部には葺石はなく、墳丘1段目テラスより上から葺かれていたと思われる。一方、周濠外側からの流入土は灰黄色の砂質土で、前方部周辺で出土した円筒埴輪の多くがこの層に伴っている。この層から出土した円筒埴輪は、完形に復元できる個体が多く、周濠外肩に並べてあったものと思われる。周濠は比較的早く埋没したようで、埋土中に古墳時代を下る遺物は確認できていない。

出土遺物（図21） 周濠から出土した遺物として、埴輪、須恵器・土師器などの土器類、木製品があげられる。その大半を占める円筒埴輪は、前方部周濠の外側から転落したものがほとんどである。これらは3条突帯4段構成で、器高約36cm、底径11cm、口縁部径21cmがおおよその平均とみられる。透孔は円形で中央の2段に2孔ずつ直交方向に穿たれている。突帯は断続ナデ技法によって器壁に接着したのち横ナデを施しており、突出度は低い。突帯間隔は均等割りが基本のようであるが、基底部と最上段がやや広い個体も目立つ。外面調整は縦ハケのみと縦ハケのち横ハケの2種がみられ、基底部に板オサエなどの底部調整技法が認められるほか、最上段にヘラ記号を刻む個体が非常に多い。（図21－2）はそのうちの一点である。また、口縁部径が30cmを測る大型品なども若干あり、樹立場所によって何種かの円筒埴輪が使い分けられていた可能性がある。朝顔形埴輪もわずかに確認できるが、これも大小2種が存在するようである。なお、形象埴輪は全くみられなかった。

土器は、須恵器、土師器が出土していた。そのうち（図21－1）は、後円部西側周濠の最下層より出土した甕で、器高7.2cm、口径7.6cm、胴部径7.85cmを測る。文様は、肩部に巡らした沈線の上下に櫛歯文が施されているほか、頸部と口縁下部に波状文がみられる。田辺編年のTK23～47型式期[4]にあたるものとみている。木製品は用途不明の木片も含め多数出土したが、古墳に樹立したと考えられるものとして笠形木製品と鳥形木製品が各1点ある。前者は周濠中層、後者は下層から出土した。これらを樹立するための支柱と思われる棒状の木製品も見つかっている。このほか、櫂形の木製品や竪杵が出土した。（橋爪）

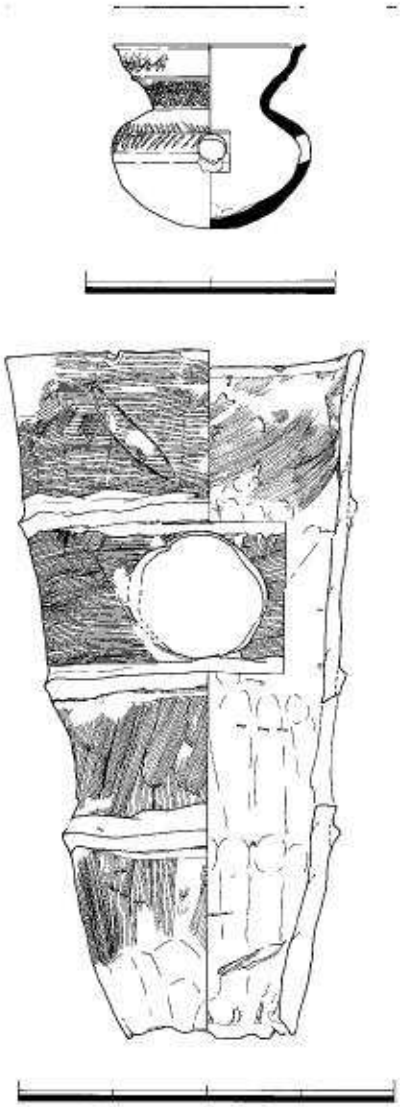


図21 石塚東古墳周濠出土遺物
（1. S=1/3 2. S=1/4）

（4）古墳時代初頭の遺構（図22）

3世紀代の遺構として当初の目的であった纒向石塚古墳の周濠をはじめとし、方形周溝墓の溝や、土坑などが検出されている。主な遺構についてその概要を記したい。

纒向石塚古墳周濠　調査区の南西隅で南西方向に傾斜する落ち込みを長さ16mにわたって検出している。深さは検出面から調査区内の最深部まで約95cmを測る。全体的になだらかな傾斜で、傾斜の角度は約8°～10°である。周濠底は今回の調査区よりさらに西側にあるため、調査区内では周濠の東の外側の傾斜面を検出したにすぎない。周濠内埋土は大きく2層に分かれ、上層は平安時代の土器が出土しており、下層からは小片であるが、須恵器が出土し古墳時代後期の堆積だと思われる。調査区内では築造当初に近い堆積層までは達しておらず、過去の調査の最上層～上層の一部を検出したものにすぎない[5]。また、周濠北端では土坑状に落ち込んでおり、埋土からは須恵器片が出土している。今回の周濠下層の埋土と切り合い関係もみられず、埋土の様子も似ているため同時期の堆積だと考えられる。築造当初のものか後世の攪乱によるものかどうか判断できない。

今回検出した周濠外側の形状は、第4次－4トレンチと第5次－5トレンチで検出されている周濠外側のラインをほぼ直線的に結んだ箇所に該当している。これにより纒向石塚古墳の周濠の形状は後円部では墳丘に沿うようにつくられ、くびれ部から前方部に向かって直線的に細くなるいわゆる馬蹄形に近い形状に復元することができる（図23）。

方形周溝墓1　調査区北西部で、「コ」の字状に溝（北辺約1.5m分、東辺約9m分、南辺約4m分）を検出した。南辺及び北辺の溝はさらに西へ続くようである。これらの溝が正方形だとすると墳丘規模が一辺約7.8mの方形周溝墓に復元できる。溝の規模は、幅0.9～1.8m、深さ0.3～0.4mである。特に北東隅付近の溝内から、甕・壺・器台・高杯などの土器が集中して検出された（図版17）。これらの土器から、庄内3式期の築造と考えられる[6]。また、南辺の溝の西側約1m分は石塚古墳の周濠と重複しており、方形周溝墓の南溝の上に周濠上層（平安時代）の土が堆積していた（図版16）。

方形周溝墓2　調査区東南隅で「L」字状に溝（西北辺約6.5m、北東辺約2.4m分）を検出した。今回の調査区の南側で行われた第4次－4トレンチ[7]で、この溝の続きが検出されていないことから、最大でも一辺5m前後の墳丘をもつ方形周溝墓に復元できる。西北の溝内からは、口縁を打ち欠いている甕の胴部などが出土している（図版17）。その他は特に原位置で出土したものはなく、小片が多い。溝内から出土した土器は布留0式期頃と思われる。（丹羽）

3．まとめ

今回の調査では、太平洋戦争中のものから古墳時代初頭まで、大きな成果を得る事ができた。その中でも5世紀の埋没古墳である石塚東古墳の発見、纒向石塚古墳の周濠や2基の方形周溝墓をはじめとする古墳時代初頭の遺構などが主な成果としてあげられ、以下それぞれについて述べ、まとめとしたい。

石塚東古墳　石塚東古墳の年代は、出土した埴輪や須恵器の年代観から5世紀後半と考えられる。今回検出できたのは古墳の一部分であるが、石塚東古墳は直径16.5m内外の円丘に幅約8m・長さ約2.4m

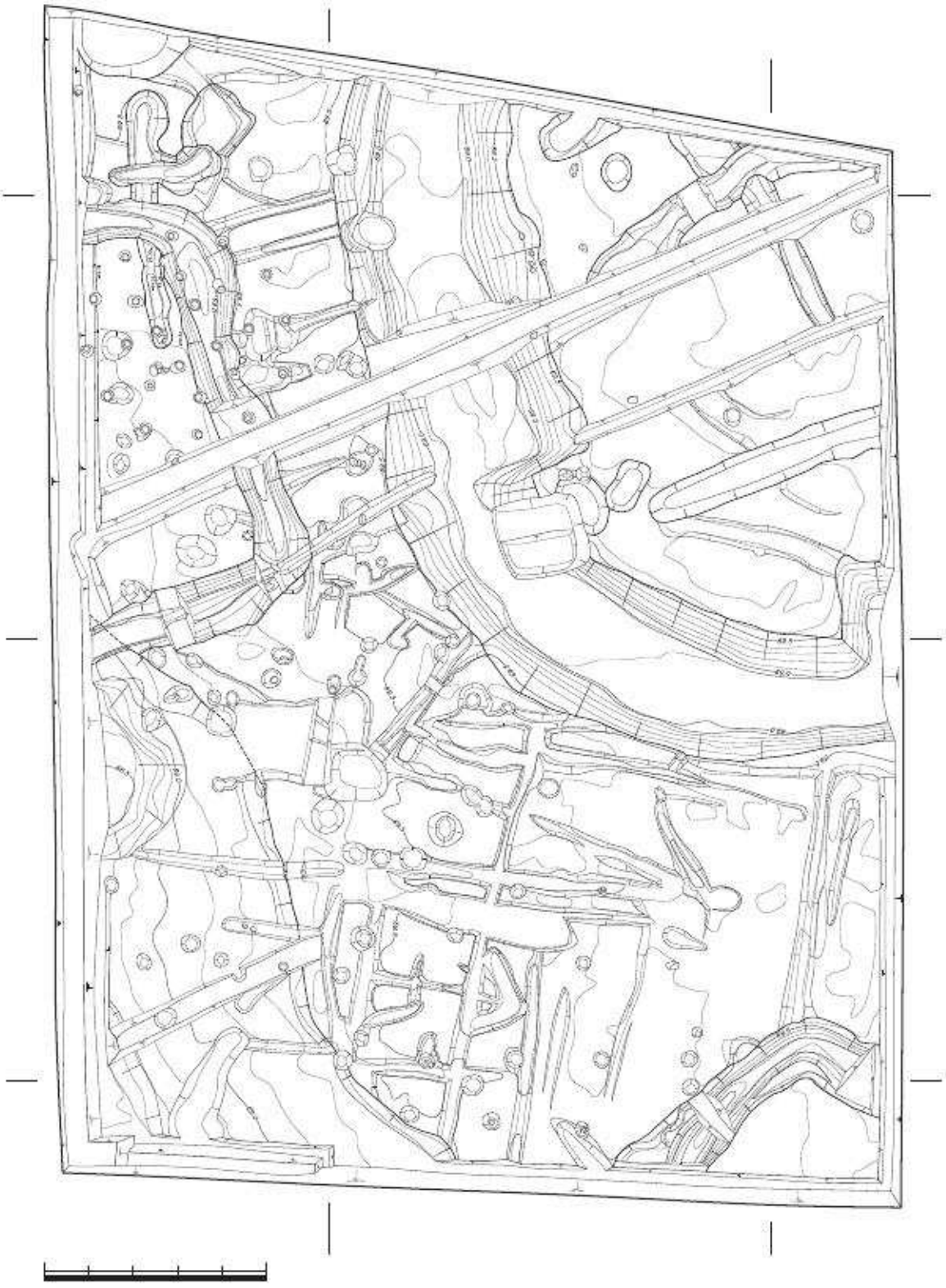


図22　下層遺構平面図（S=1/140）

の突出部がつく、全長約19mの帆立貝形古墳であったことが推測できた。埴輪の据付け掘形などは検出できなかったが、周濠内の遺物出土状況を考えると、周濠外側に埴輪が並べられていたことは明らかである。また、おそらく墳丘側のテラス等にも埴輪が樹立され、葺石は墳丘1段目テラスより上から葺かれていたと思われる。周濠外側の埴輪は比較的早くに短期間で投棄されたようであるが、周濠が完全に埋没した段階にはおそらく墳丘はまだ存在したと思われ、大規模な削平は中世以降にうけたものと考えられる。纒向遺跡内では、近年の発掘調査により5世紀後半以降の古墳の様子が少しずつ明らかになってきたが[8]、今回みつかった石塚東古墳のように帆立貝形の墳丘形態や葺石を備える古墳は今まで確認されておらず、当時この地域でつくられた古墳の一様相を新たに示したといえるだろう。

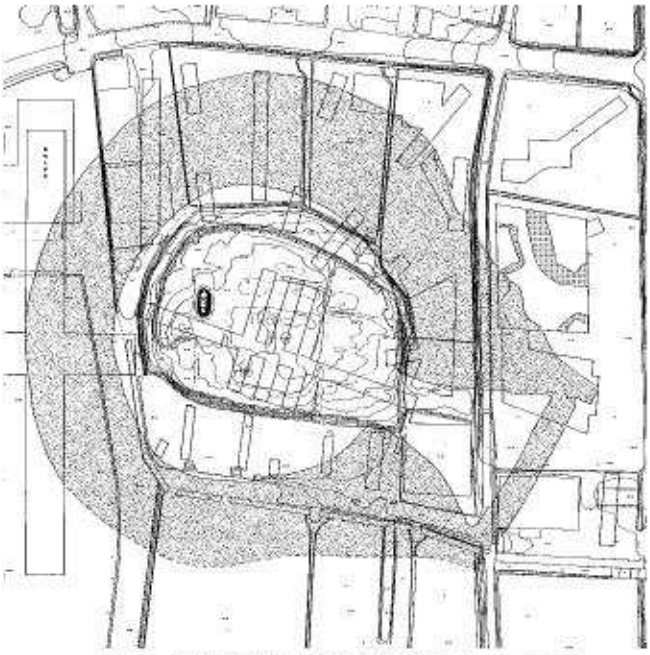


図23　纒向石塚古墳周濠復元図（S=1/1600）

纒向石塚古墳周濠　今回検出した纒向石塚古墳の周濠外肩の平面形と過去の調査成果と合わせて考えると、馬蹄形に近い形に復元できた（図23）。今回検出した周濠の最深部は標高68.7m付近で、第4次調査－4トレンチで検出されているくびれ部付近の周濠底の標高67.3mと、1.2mの比高差がある。今回検出した周濠外肩の傾斜角が約10°前後しかなく非常に緩やかなものであるが、この比高差を考えると墳丘に近づくに従って、傾斜がきついものとなりさらに周濠の落ち込みは明確なものとなると思われる。石塚古墳の周濠は、墳丘盛土のための土取りや墳丘範囲の明確化の要素が強く[9]、箸墓古墳の周堤などにみられるような周濠そのものを整備するといった痕跡は認めることができない[10]。ただ、後円部に大規模な周濠を持ち、前方部を区画溝的な周濠で陸部と切断していることや、馬蹄形に近い形を整えているということは前段階のものより、後の大形前方後円墳がもつ整備された「周濠」に近づくものと位置づけることができよう[10]。各地域の発生期の前方後円墳を比較する場合、これまでどちらかといえば墳丘の形状中心に研究が進んできたわけだが、今後は周濠の形状や構造も含めて再検討する必要がでてきたといえる。

方形周溝墓　纒向石塚古墳に近接した形で、方形周溝墓だと考える遺構が2基検出されている。特に、方形周溝墓1からは庄内3式期だと思われる多量の土器が出土している。纒向石塚古墳の周濠と重複しているため、その先後関係をつかめれば石塚古墳の上限がおさえられる可能性があった。しかしながら、前述したように平安時代頃まで落ち込みとして存在していた事を示す石塚古墳周濠の最上層が、方形周溝墓の溝の上に堆積しているという結果を得ただけで、築造当初の前後関係は土層状況からは判断できなかった[12]。一方、方形周溝墓2に関しては第4次－4トレンチからその溝が検出され

ていないことなどから、周濠とは重複しない。方形周溝墓の主軸の方向を見れば、周濠の外肩のラインと平行しており、周濠を意識して築造されたようにみえる。また、出土土器は布留０式期と思われ、このことからも石塚古墳の築造後に構築された可能性が高い。

これまで方形周溝墓をはじめとした小規模墳墓は、纒向遺跡の居住域である微高地の縁辺部を中心に検出されたものが多く、遺跡そのものの外縁部に築かれている前方後円墳と墓域が異なることが明らかにされている。一方、前方後円墳に近接して築かれた小規模墳墓の例は東田大塚古墳周濠肩部の土器棺墓などで、この二者の立地のあり方の違いは前方後円墳の被葬者との関係の違いを表しているのだと思われる[13]。今回検出した方形周溝墓のうち、方形周溝墓２に関しては纒向石塚古墳よりも後出する可能性が高く、古墳の被葬者に対して従属的な性格を考えることも可能であり、非常に興味深い成果である。一方、方形周溝墓１に関してはその先後関係の結果によっては、石塚古墳の被葬者との関係は、大きく異なる可能性があり、慎重な評価が必要になるであろう。これらの解釈は遺構の状況や出土土器の年代を含めて大きな課題である。（丹羽・橋爪）

【註記】

1）石野博信・関川尚功　1976『纒向』桜井市教育委員会
久野邦雄・寺澤薫　1977「石塚古墳の調査」『奈良県遺跡調査概報1976年度』奈良県橿原考古学研究所
橋本輝彦　1996『纒向石塚古墳第８次調査の概要（纒向遺跡第87次）』桜井市教育委員会
萩原儀征・寺沢薫　1989『纒向石塚古墳　範囲確認調査（第４次概報）』桜井市教育委員会
萩原儀征　1994『纒向遺跡石塚第１期整備事業範囲確認調査（第５～７次）概報』桜井市教育委員会

2）築造時期については、第１次調査などの西側周濠下層の完形土器群を積極的に評価した庄内０式期に築造されたと考えるもの、第８次調査の盛土内出土土器を庄内式変成立段階と評価し、周辺に布留式期の新しい時期の遺構・遺物が存在している状況にあって盛土内に新しい遺物を含まないということを積極的に評価し庄内１式期に築造されたと考えるもの、第４次調査の墳丘盛土内出土の高坏や導水溝出土土器を考慮した庄内３式期の築造を考えるもの、などの３つがあり、遺構や遺物の関係をどう評価するかで解釈が分かれており、決定的なものはない。
橋本輝彦　2006「纒向古墳群の調査成果と出土土器」『東田大塚古墳』

3）以下の文献によれば、調査地周辺に12センチ高角飽が６門あったと記されている。
高野眞幸　2006「太平洋戦争と天理」『山辺の歴史と文化』天理大学文学部編

4）田辺昭三　1981年『須恵器大成』角川書店

5）今回検出した周濠上層は、第４次－３トレンチの（前掲２　萩原・寺沢1989文献）「整地埋設土層（10世紀末）」に該当するものだと思われる。

6）寺沢薫　1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊　奈良県立橿原考古学研究所

7）註１）萩原儀征・寺沢薫　1989年文献

8）周辺の５世紀後半以降の古墳として、本書の第２章第４節のヤナイタ古墳群、トリイノ前古墳、勝山東古墳、高塚古墳群、堀川古墳などがあげられる。
橋本輝彦　2003『纒向へいこう!』桜井市立埋蔵文化財センター

9）これまでの調査において確認されているように、後円部と周濠の前方部の幅や深さの規模が異なっている。これらは、後円部に比べ、前方部は低いため、後円部と前方部では、大きく盛土量が異なるものが原因であろう。周濠掘削する上で、一瀬氏がいうように、後円部と前方部の周濠は、異なった原理で掘られているのかもしれない。おそらく、くびれ部付近で、周濠の規模（深さ）が変化すると思われる。今回の検出した周濠内の北端部で見られた土坑状の遺構が築造当初のものであるなら、そのような表れかもしれないが、確定することができない。
一瀬和夫　1986「前方後円形墳丘の周溝掘削パターンと区画性－前方後円形成立に関する覚え書き－」『古代学研究』112
一瀬和夫　1992「周濠」『古墳時代の研究』第７巻　雄山閣

10) 福辻氏のように今回検出された落ち込みや纒向石塚古墳でこれまで確認された「周濠」は「土取り」の跡であって，一瀬氏（註８）文献）の定義されたような「周濠」が未成立の段階のもので、「周濠」と呼ぶのは適切ではない可能性がある。既往の調査と混乱が生じないように、便宜的に周濠という表現を用いる。今後、定義の問題を含めて検討したい。
福辻淳　2005「纒向遺跡第142次発掘調査報告」『桜井市平成16年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会

11) 註1）寺澤薫　1989文献。

12) 方形周溝墓１の規模（１辺８ｍ前後）を考えると、南西側の墳丘は明らかに纒向石塚古墳の周濠内に復元することになる。方形周溝墓１の築造が古墳より後出するものであるならば、周濠に造り付けるように築造され、その平面形もいびつなものであったと想定しなければならない。

13) 橋本輝彦　2006「纒向遺跡の墳墓について～小規模な埋葬施設の検討から」『東田大塚古墳』財団法人桜井市文化財協会

現地説明会の様子

第４節　纒向遺跡第145次発掘調査報告

１．はじめに

纒向遺跡第145次調査は桜井市大字東田171番地１、171番地２において、農業用温室建築に先立って実施された。調査対象地はJR巻向駅の西南西約600ｍの耕作地で、東西約２km、南北約1.5kmの範囲に及ぶ纒向遺跡の西半部に位置している。付近は纒向川などにより形成される扇状地の扇端部にあたっており、現在調査地の周辺は水田のほか苺や花卉栽培のための温室が存在する農業地帯となっている。

纒向遺跡でこれまでに実施された140次を超える調査では、数多くの重要な成果が報告されてきた。今回の調査地のある大字東田周辺は、広大な遺跡範囲の中でも重要な遺構・遺物が集中する地区として注目されるところである。

今回の調査地のすぐ西側には、全長約96ｍの前方後円墳と考えられる東田大塚古墳が存在する。この古墳の周囲では第70次・第106次・第113次の３次にわたる調査が行なわれ、墳丘盛土下層の遺構と墳丘築造後の遺構が確認された。これにより東田大塚古墳は布留０式期に築造されたことが明らかになっている。[1]今回の調査地の南西約100ｍで実施された第36次調査では、弧文石と呼ばれる特殊な文様が彫刻された石が見つかっている。[2]また調査地の南東約200ｍで行なわれた第51次調査では、古墳の周濠と見られる遺構において、建築物の壁材と思われる木製構造物が検出された。[3]このほか纒向遺跡の西半部では、高塚古墳群[4]や勝山東古墳[5]、堀川古墳[6]、石塚東古墳[7]など、古墳時代中期～後期の小規模古墳の存在が知られるようになっている。

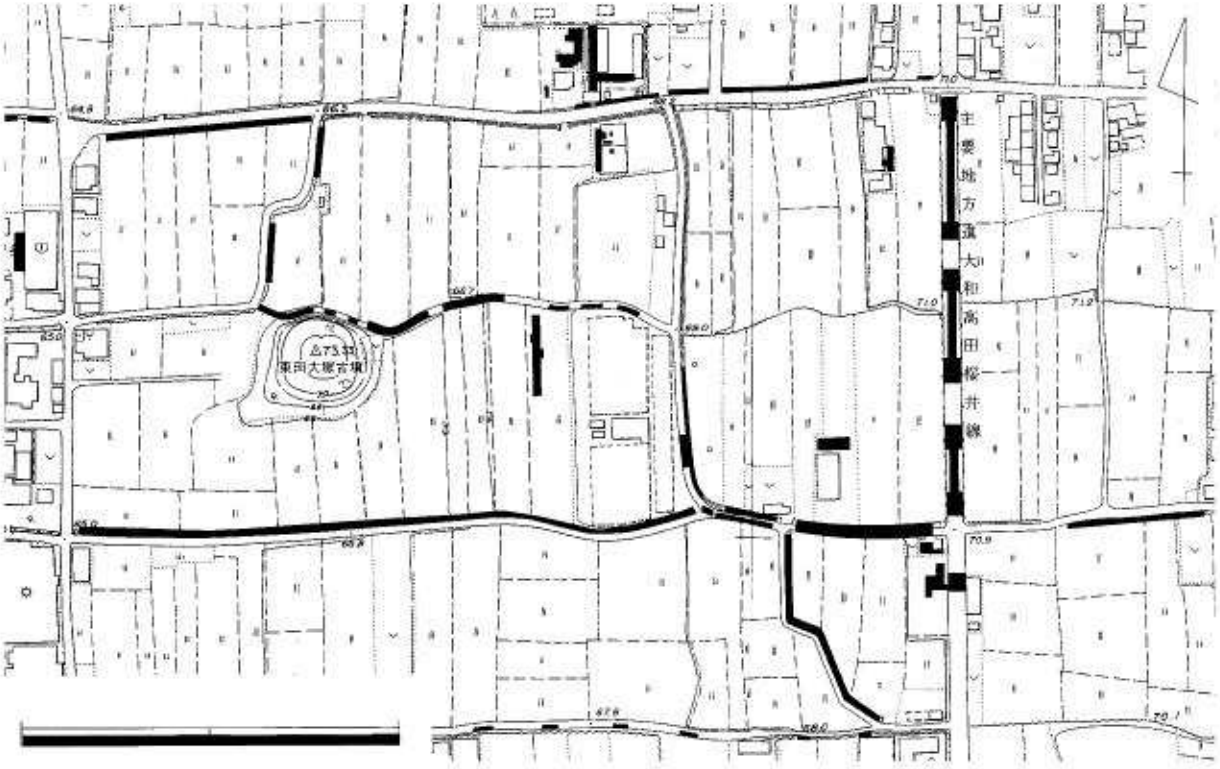


図24　纒向遺跡第145次調査位置図（S＝1/4000）

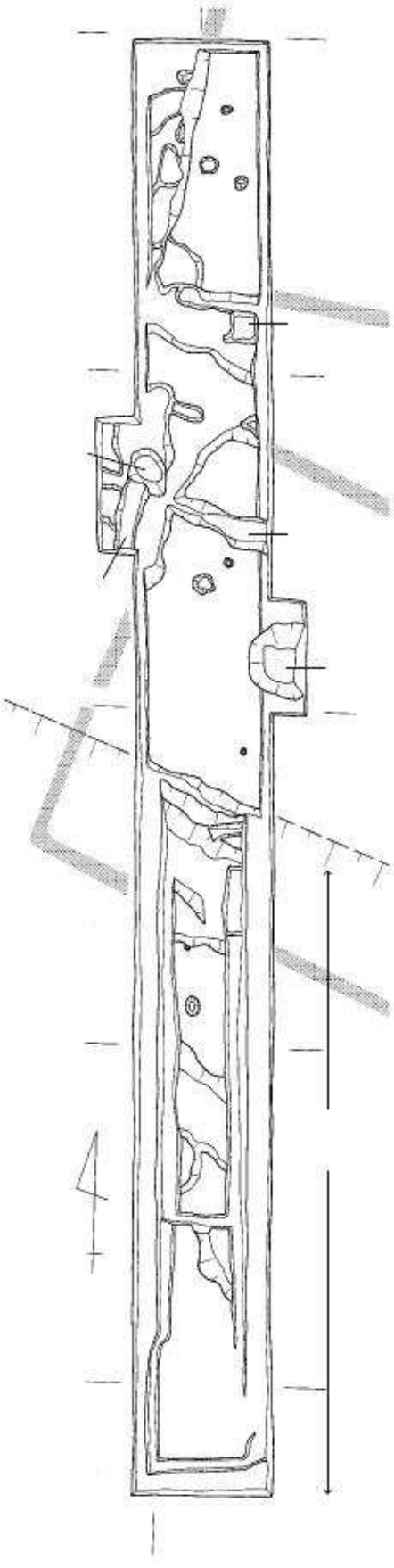


図25　トレンチ平面図（S＝1/200）

このような周辺の状況から、今回の調査においても古墳時代の遺構・遺物が確認されることが予想された。なお調査は平成18年２月７日～３月31日に実施している。調査面積は約180㎡である。

2. 調査の方法と層序

トレンチは当初、調査対象地の西側部分において、南北方向に長さ43m、幅４mの規模で設定している。まず現地表面より50cm程度下まで存在する耕作土（図26－１・２層）を除去したところ、トレンチ北端付近では黒褐色を呈するシルト層（47層）が、トレンチ中央付近では鉄分が沈着する粘質土（53層）が広がる状況を確認している。このシルト層及び粘質土は若干質を変化させながらも１m程度の厚さを持ち、さらに下層には砂礫層が存在していた。この粘質土及び砂礫層は遺物を含んでおらず、付近の基盤をなす古い堆積物と考えることができる（基盤層、47～59層）。

この基盤層の上面で精査を行なった結果、後述するように小規模なピットや土坑が数基見つかったほか、トレンチの北半部では基盤層の高まりが２ヶ所（ヤナイタ１号墳・２号墳）確認され、南半部では南東から北西方向へと走る自然流路が検出された。

これらの遺構の検出状況を受けて、トレンチ北半部分の西壁と東壁の一部をそれぞれ拡張している。拡張部分の面積は東壁側で約3.5㎡（東拡張区）、西壁側で約４㎡（西拡張区）であり、これにより調査面積は約180㎡となった。

3. 検出遺構

基盤層（47層、53層など）の上面において、複数の遺構を確認することができた。このうち中世以降の耕作に伴うと考えられる素掘溝を除くと、確認できた全ての遺構は古墳時代を中心とする時期のものであった。以下では確認された各遺構を種類別に見ていくことにしたい。

図26　トレンチ断面図（S＝1/80）

（1）ヤナイタ古墳群

トレンチの中央から北側部分において、基盤層の大きな高まりが2ヶ所に存在していた。このうち南側のものは周囲に埴輪片が散在する状況が確認され、古墳の墳丘残存部であると判断された（ヤナイタ2号墳）。北側の高まりについては埴輪片が確認されなかったが、後述するように、南側の古墳と周溝部分を共有する古墳として理解することができる（ヤナイタ1号墳）。これにより、調査地付近には2基以上の古墳で構成される古墳群が存在することが明らかとなった。古墳群の名称については付近の地名に基づいてヤナイタ古墳群とし、確認された古墳のうち北側に位置するものをヤナイタ1号墳、南側のものをヤナイタ2号墳としている。

ヤナイタ1号墳　　トレンチ北端付近において確認された。南北方向と東西方向に伸びる側辺とコーナー部分が認識できることから、方形の墳丘を持つ古墳と見ることができるだろう。墳丘部分は基盤層が高まりとなって残存するもので、墳裾からの残存高は30～40cm程度である。後世に大きく削平されているため、盛土が存在したかどうかは不明である。墳丘の全長は、南北方向の側辺が7.4m分、東西方向の側辺が3.4m分残存していることから、少なくとも7.4m以上の規模を持つものであることがわかる。なお、埋葬施設等は確認されなかった。

周溝に相当するものは、墳丘の西側から南側に続く落ち込みとして認識することができる。この落ち込みは南側の2号墳墳丘に至るまで明確な上がりが見られず、墳丘に沿って溝状に巡らされるような形態ではなかった可能性が高い。南側に位置する2号墳と周溝部分を共有するような関係にあったと推定することができる。なお葺石に由来するような石は付近で見つかっておらず、埴輪類も2号墳に近い南側の周溝上層で1点確認されているのみであった。これらからヤナイタ1号墳は葺石・埴輪類を伴わないものと考えられる。

築造時期については、明確に古墳に伴うことがわかる遺物が皆無であるため、確定することは難しい。周溝埋土に含まれる遺物を見ると、上層には須恵器の小片が含まれ、下層では巻き上げによるであろう古式土師器がわずかに見つかっている程度で、これらが古墳の築造時期を示すものと判断することはできない。ここでは周溝部分が2号墳と共有されることを考慮し、2号墳と近接する時期に築造されたものと推定しておきたい。

ヤナイタ2号墳（図27）　　トレンチの中央付近で確認された。1号墳と同様に基盤層が高まりとなって残存しており、埴輪の存在が確認できたことから古墳として認識することができた。

墳丘の平面形態は、確認された遺構から概ね推定することができる。墳丘北西側では上記の1号墳と共有する形態の周溝が存在しており、南西から北東方向にのびた後に南東へと屈曲する墳裾ラインを観察することができる。一方南側では後述する自然流路の影響もあって、墳丘の一部が既に失われているものと当初は推定された。しかし自然流路の上層を除去した段階で、南側の墳端を示す可能性がある溝（溝3）が検出されている。この溝3は自然流路の下層堆積後のもので、上層堆積による削平を受けているため本来の形態は不明であるが、検出段階で幅1.5～2m、深さは20cm程度であった。埋土にシルトブロックや埴輪片が多く含まれており、位置関係から考えても、ヤナイタ2号墳の周溝

である可能性が高いものと考えられる。これらの遺構の状況から、ヤナイタ２号墳は側辺の長さが約13mの方墳であったと推定することができる。

墳丘部分は基盤層の直上まで耕作土が及んでおり、盛土は確認されていない。埋葬施設については、後述する土坑４付近が墳丘の中央部分に推定されるが、トレンチ拡張の際にも検出されておらず、削平により失われている可能性が高い。

墳丘周辺の周溝部分では、埴輪片が多数検出されており、朝顔形埴輪が複数個体確認されている（図32・33）。葺石についてはこれに由来するような石が存在しないことから、当初より伴わないものと判断できる。

なお築造時期は、後述する出土遺物から古墳時代中期末頃に考えることができる。

その他の遺構　上記の２基の古墳以外にも基盤層の高まりが確認されている。２号墳の西側のトレンチ拡張部分で検出されたその高まりは、幅0.6m、長さ３mの範囲が確認されているのみであり、その全体像は不明である。上記の２基と類似するような、小規模古墳の一部である可能性を持つものとして注意される。

（２）土坑・ピット

今回の調査では土坑が４基、ピットが７基確認されている。これらはそれぞれ規模や平面形態、出土遺物などの面で大きな差があり、異なる性格を持

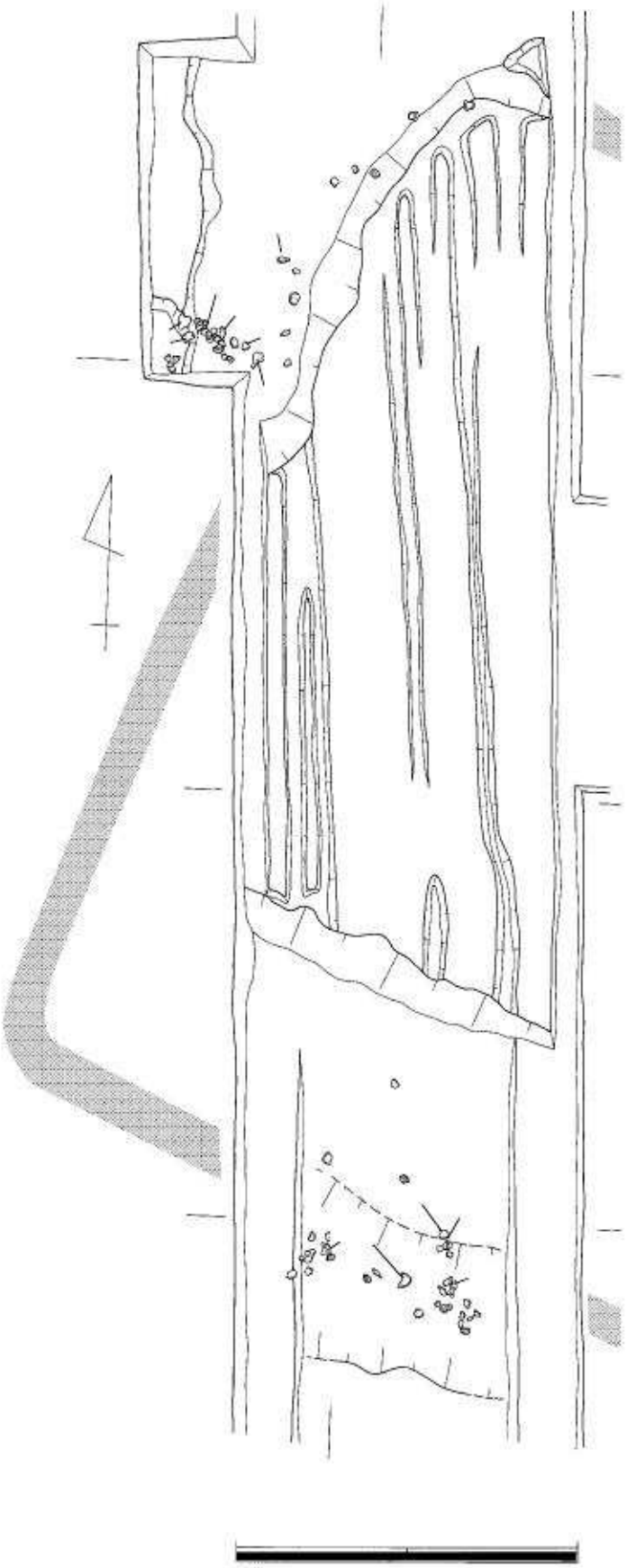


図27　ヤナイタ２号墳平面図（S＝1/80）

つものと考えられる。以下で各遺構について見ていきたい。

土坑２（図28）　ヤナイタ２号墳墳丘の北西側に近接する位置で検出された。土坑（土坑２）に、浅い溝（溝２）が接続する状況を確認することができる。土層の状況から、土坑２の上・下層が埋没したのちに、溝２の埋土が堆積していることが明らかであるが、溝２埋土と土坑２の最上層は同質のものであり、両者の切り合い関係は見られない。すなわち溝２は当初より土坑２に伴うかたちで設けられたものであると理解することができる。

土坑２は、検出面では長径1.4m、短径1.1m程度のやや南北に長い平面形態が確認できた。検出面からの深さは約１mである。壁面は切り立った形態で、底面は径90cm程度の円形を呈しており、比較的平坦であった。埋土は下層（図28－９～12層）がオリーブ黒色粘質土、上層（４～８層）は黒色～オリーブ黒色粘質土で構成され、特に上層には腐植土層（６層）がみとめられた。最上層（１・２層）は黒褐色の粘質土で、溝２埋土と共通するものである。遺物は特に下層で多く、底面付近で土師器甕・高坏や砥石（図35－25～31）が検出されたほか、11層には籠状製品（図36）や台付甕（図34－24）などが含まれていた。上層では６層で完形の甕（図34－19）や木片が検出されている。最上層からはわずかな土器片が出土するのみであるが、土製支脚の破片と見られる土製品片（図34－13）が出土している点が注意される。このほか、底面付近の埋土中より貝殻の小片が検出されている。

土坑２がどのような目的で掘削されたかについては、出土遺物などから推定することは難しい。掘削が湧水層まで達していることを評価するなら、井戸のような機能を考えることができるだろう。

溝２は南北方向にのびるもので、検出時の規模は幅60～80cm、深さ20cm程度である。上面がヤナイタ２号墳の周溝により削平されているため、本来はもう少し大きなものであったと考えられる。この溝は土坑２の南肩に接続しており、そこから南へ長さ２m分が確認されているが、さらに南へと続くようである。土坑２よりも北側の部分については、ヤナイタ２号墳周溝による削平のため不明である。しかし土坑２の北肩部分にも同様の埋土が確認できることから、北側へも続いていた可能性が考えられる。溝底面のレベルは土坑より離れるに従って高くなっており、土坑２南肩付近とそこから約２m南側では約10cmのレベル差がある。また溝幅は、土坑に近い部分が広くなっている。これらの構造から、溝２は土坑２に水を引き込む機能を有していたと推定される。

なお土坑２の掘削時期は、出土遺物から庄内式期の新相（３世紀前半～中頃）のうちに考えられる。

土坑４（図29）　ヤナイタ２号墳の墳丘部分に相当する基盤層上面で確認された。径約2.1mの円形の平面形態を持つもので、検出面からの深さは1.2mを測る。断面形状は半円形に近い形態であり、底面付近は中央が深くなる擂鉢状であるが、検出面に近い部分では壁面がほぼ垂直に切り立っている。

埋土は上下２層に大別することができる。上層（図29－１～15層）は、土坑壁面に沿う部分に基盤層起源のブロックを多く含む層が堆積し（11層、13層など）、その後中央部分の凹みに粘質土（７・８層）が堆積していく状況が観察できる。一方下層（16～19層）にはオリーブ黒色粘質土が堆積しており、上層とは埋土の状況が全く異なっている。このうち最下層にあたる19層にはシルトブロックや砂粒が特に多く含まれており、人頭大と拳大程度の塊石がそれぞれ１つずつ確認されている。

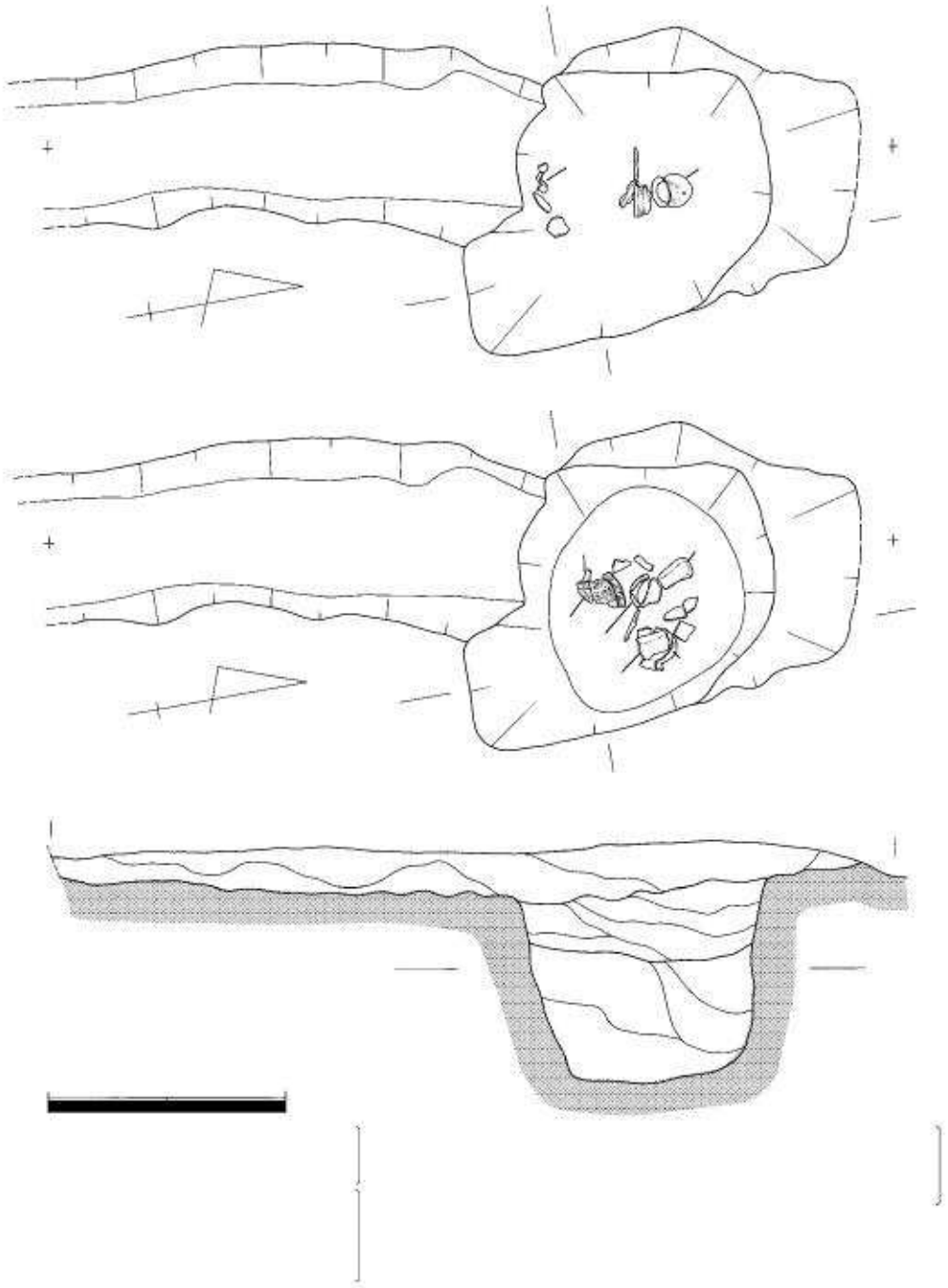


図28　土坑２・溝２ 平面・断面図（S＝1/30）

遺物は下層から多く出土している。特に底面の直上では残存率の高い遺物が集中してみとめられ、甕や壷などの土師器類のほか、６個体以上の土製支脚が検出された（図39）。このほか少量ではあるが、一部が炭化した木片が出土している。また底面付近では巻貝の貝殻（図版26）が検出されている。

これらの遺物のうち、土師器類や土製支脚は土坑底に密集した状態で検出されており、完形に近いものも複数含まれていた。こうした状況から、これらの遺物は偶然に混入したものではなく、意図的

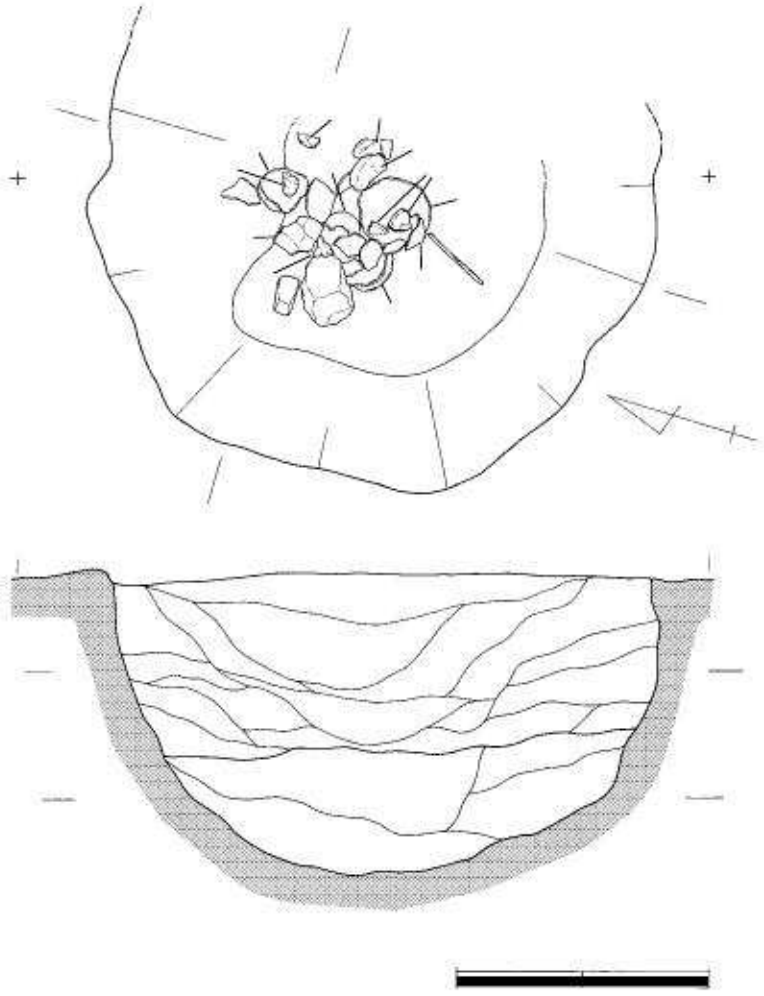


図29　土坑４ 平面・断面図（S=1/30）

に入れられたものと考えることができる。土坑の用途については、土坑２と同様に推定することが難しいが、これらの遺物の存在は土坑の性格を示すものとして注意する必要があるだろう。なお、土坑２と土坑４は、規模や形態などの点で若干異なっているが、掘削が湧水点まで達することや、多くの遺物が出土したことなどの共通性が見られる。いずれにせよ水に関連する遺構であると推定することができる。

土坑４の掘削時期については、出土遺物から土坑２よりもやや新しい布留式期の古相段階（３世紀後半）に考えられる。

その他の土坑（図30）　上記の２基の土坑以外にも、小規模な土坑が確認されている。

ヤナイタ１号墳南側の周溝底で確認された土坑１は、一辺約１ｍの方形の平面形態が推定される。検出面からの深さは20～30㎝であり、上層には黒褐色粘質土、下層には黄灰色の粘質土が堆積していた。上層埋土には小型丸底鉢（図43－97）のほか土師器小片が含まれており、これらから古墳時代前期前半の時期が考えられる。遺構の性格については不明である。

トレンチ南半部で検出された土坑３は、長径１ｍ弱の長円形の平面形態を持つ。検出面からの深さは20㎝程度であるが、後述する自然流路により削平を受けているため、本来の深さは不明である。底面は中央よりも北側部分が深くなる形態であり、柱穴である可能性も考えられたが、埋土の状況からは判断できなかった。埋土中には土師器の小片が含まれており、これらから古墳時代前期頃のものと推定される。

ピット４（図30）　ヤナイタ２号墳墳丘部分にあたる基盤層の上面において検出された。平面形態は径60㎝程度の円形に近いもので、検出面からの深さは15㎝程度であった。埋土中には拳大以下の礫

のほか土師器片が比較的多く含まれており（図43－98、99）、これらから古墳時代前期のものと考えることができる。

その他のピット（図30）　上記のピット4以外にも、トレンチ北半を中心に計6基のピットが検出されている。平面形態はいずれも円形に近いもので、規模は径20cmから50cm程度と様々である。このうちピット2はやや大きなもので、検出面からの深さも30cmと他よりも深く、柱穴と考えられる。その他のものについても柱穴の可能性があるが、これらがどのような構造物に関連するものであるのかは不明である。なおこれらの遺構はほとんど遺物を伴うものではなかったが、わずかに含まれていた土師器小片を参考にするなら、古墳時代前期のものと推定することができる。

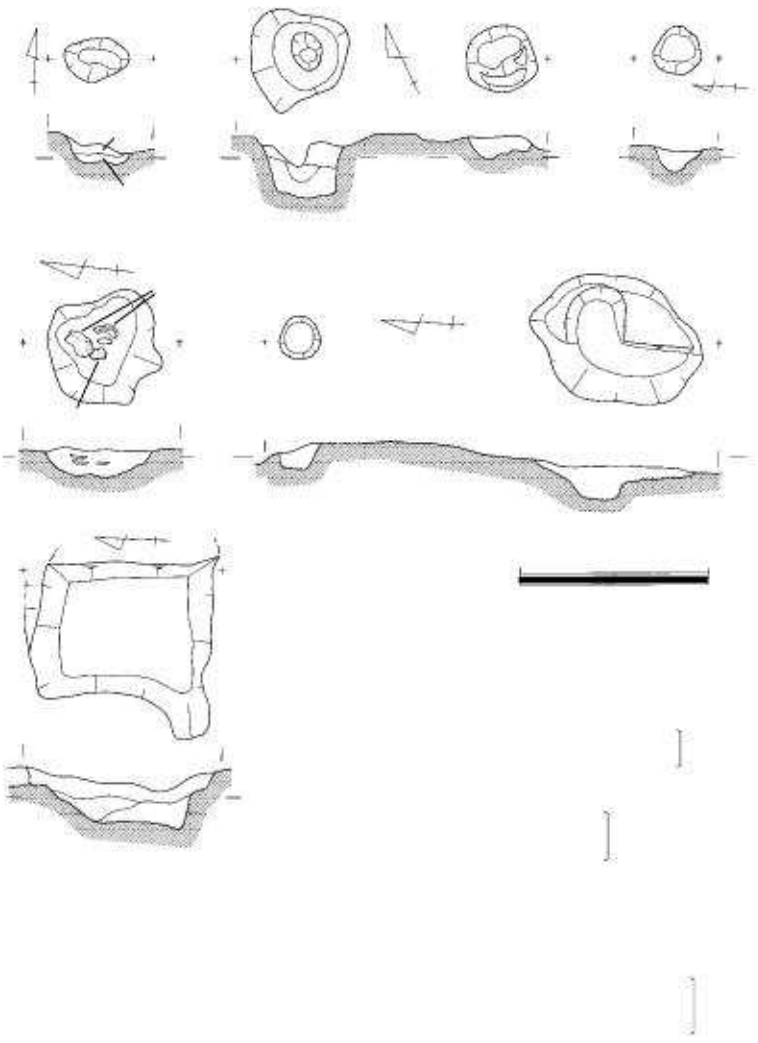


図30　ピット・土坑 平面・断面図（S＝1/40）

（3）溝

計3条の溝状遺構が確認された。このうち溝2は土坑2に伴うものであり、溝3はヤナイタ2号墳の周溝と考えられるものであった。これらについてはそれぞれ土坑2・ヤナイタ2号墳とあわせて既に記したので、ここでは溝1について触れることにする。

溝1（図25）　トレンチの中央からやや北寄りの位置で検出された。東南東から西北西にのびるもので、ヤナイタ2号墳の墳丘部分に相当する基盤層の上面から、西拡張区の基盤層高まりの上面へと続いている。一部はヤナイタ2号墳の周溝により失われているものの、長さ約5m分が確認されている。幅は0.5～1m、深さは20cm～30cmと一様ではなく、底面には凹凸が見られるが、概ね東側が高くなっている。埋土はシルト混じりの細粒砂を基本としており、全体に砂礫が多い印象を受けるものであった。

周辺の遺構との関係を見ると、ヤナイタ2号墳周溝により切り込まれることから、これに先行する時期のものであることがわかる。土坑2との直接的な関係は、ヤナイタ2号墳周溝の影響により不明

であるが、位置的に近接する点が注意される。しかし溝２と同様に土坑２に接続する溝と考えた場合、溝底のレベルが溝２よりも30㎝以上高いことや、埋土の状況が著しく異なっていることが問題となる。このことから、溝１は土坑２に伴うものとは考えられないだろう。埋土に砂礫が顕著に見られることから、一時的な流水により形成されたものと考えておきたい。詳細な時期については不明である。

（４）自然流路

調査区の中央付近において、基盤層の粘質土を切り込む大きな落ち込みの肩が検出されている。落ち込み内の堆積は流水によるものが大半を占めるため、人工的に掘削されたものではなく、自然流路であると判断することができた。確認できた落ち込みの肩は、この自然流路の北肩に相当するものであり、南側の上がりについてはトレンチ内で確認されていない。従ってこの流路は幅が20m以上の大規模なものであったと推定することができる。付近の地形が西側に向かって低くなることや、後述する流芯の向きなどから、南東から北西方向へという流水方向が考えられる。

流路内の堆積の状況を見ると、最上層（図26－５・６層）には暗褐色～極暗褐色シルトが堆積し、その下層では粘質土や砂層を確認することができる（７～13層）。これらの層には土師器や埴輪・須恵器の小片が含まれており、概ね７世紀頃までに堆積したと推定することができる。一連の流水堆積の最終段階において、緩やかな流れの中で形成されたものであろう。

これら上層の堆積を除去した段階で、ヤナイタ２号墳の周溝と思われる溝３が検出されている（14・15層）。この溝３より北側の部分には、黒褐色シルトが堆積しており（38層）、多くの土器が含まれていた。また特に流路の北肩に沿う位置で土器が集中する状況が確認できる（39・40層、図31上段）。これらの土器はいずれも完形に復元できるものではなく、器表面の摩滅が激しいことから流水によって運ばれたものと推定される。しかし個々の破片が比較的大きいことを考慮すると、それほど遠くない上流側より流されたものと理解することができるだろう。含まれる遺物の時期は概ね布留式期の古相に位置付けられる。

またこれらの層位の下層では、砂礫を多く含んだオリーブ黒色シルト（図26－42層）が帯状に検出され、その下層で砂礫層（43層）が確認されている。この２層は比較的速い流れの中で形成されたと考えられ、大きな流路の中の一つの流芯に相当するものと理解できる（北側流芯下層）。なおこれらの層からも多くの土器が検出されており（図31下段）、北側流芯上層と同じく上流側から流されてきたものと考えられる。

これ以外の箇所でも流芯となる堆積が確認されている。それは流路北肩から約10m南側で検出されたもので、砂礫を多く含んだオリーブ黒色シルトで構成されている（図26－44・45層、南側流芯）。出土した遺物から、北側の流芯よりもやや新しい時期の堆積と考えることができる。

これらの堆積より下層でも流水堆積の存在が確認されているが（56～59層）、部分的な断割りの結果、１点の遺物も検出されていない。これらの層は、纒向遺跡で集落が形成される以前の堆積と考えるべきであろう。

このような状況を基に、確認された自然流路の堆積過程をまとめると、以下のように大きく３段階

図31　自然流路 北側流芯 遺物出土状況（S＝1/30）

に分けることができる。第１段階は、纒向遺跡で集落域が形成される以前であり、この頃には幅20m以上の大きな自然流路が存在していた。第２段階は古墳時代初頭から中期以前で、幅２～３ｍ程度の小さな流路（北側流芯、南側流芯）が複数形成され、その後流水が弱まったと推定される。古墳時代

中期末頃には、流路の北肩付近がヤナイタ２号墳の墳丘となり、流路の範囲内にも周溝が設けられるようになった（溝３）。しかしその後再び流水があり、溝３やヤナイタ２号墳の埴輪を押し流している（図26－７～13層）。その後流水は次第に弱まり、７世紀頃までに流路が埋没していったと考えられる（５・６層）。ヤナイタ２号墳以降の流水を第３段階として捉えることができる。

4．出土遺物

今回の調査では、コンテナケースで25箱分程度の遺物が出土した。耕作土中より出土した遺物も多いが、複数の遺構においてまとまった量の遺物が検出されている。以下で遺構ごとに出土遺物を見ていきたい。

（１）ヤナイタ２号墳関連遺物

ヤナイタ２号墳に伴う遺物としては、周溝出土の埴輪類をまず挙げることができる。これ以外では南側周溝（溝３）を押し流した自然流路の上層堆積（図26－５～13層）にも埴輪片が含まれているが、これもヤナイタ２号墳に伴うものと考えてよいであろう。このほか周溝埋土中で検出された須恵器片がある。これについてはヤナイタ２号墳との同時期性が明らかではないが、その可能性を有するものとして示した。

須恵器（図32）　図化することができたのは１個体のみである。須恵器器台（１）は墳丘北西側の周溝内より出土したもので、受部と脚部の接続部付近の約１／８が残存する。脚部は「ハ」字状に広がる形態で、外面には波状文が施され、少なくとも２ヶ所に三角形透孔を確認することができる。

埴輪（図32・33）　（２）～（12）は周溝あるいは自然流路上層より出土した埴輪である。各個体の法量・形態的特徴・調整・色調・残存状況などについては、埴輪観察表（表５）に記しているのでここでは省略したい。

出土した埴輪の総量はコンテナケース２／３箱分程度であるが、黒斑が観察されるものはなく、須恵質の個体は確認されなかった。形象埴輪と考えられるものは１点も見られない。検出された全ての破片のうち、底部が残存するものは３点存在している（図32－８～10）が、口縁端部が残存する破片は、朝顔形埴輪と考えられる（４）の１点のみであり、円筒埴輪の口縁部分は確認されていない。

朝顔形埴輪は（６）・(11)・(12) などもあわせて複数個体が存在したことが明らかとなったが、円筒埴輪の存在は、上記のような状況からすると、厳密には不明であると言わなければならない。すなわち（２）・（５）や（７）～（10）についても、朝顔形埴輪の一部である可能性が否定できないのである。しかし通有の古墳では朝顔形埴輪よりも円筒埴輪の方が多く使用されることを考えると、これらは円筒埴輪である可能性の方が高いと言うべきである。従って表５及び以下の文中では、明確に朝顔形埴輪であると判断できる個体以外は「円筒埴輪」と記すことにしている。

確認された埴輪の特徴に目を向けると、円筒埴輪・朝顔形埴輪ともに外面の二次調整が省略されており、一次調整のタテハケを観察することができる。突帯は突出度の高いものではないが、断面形状が台形に近いものが多く、比較的しっかりと作られている。押圧技法や断続ナデ技法の採用は確認で

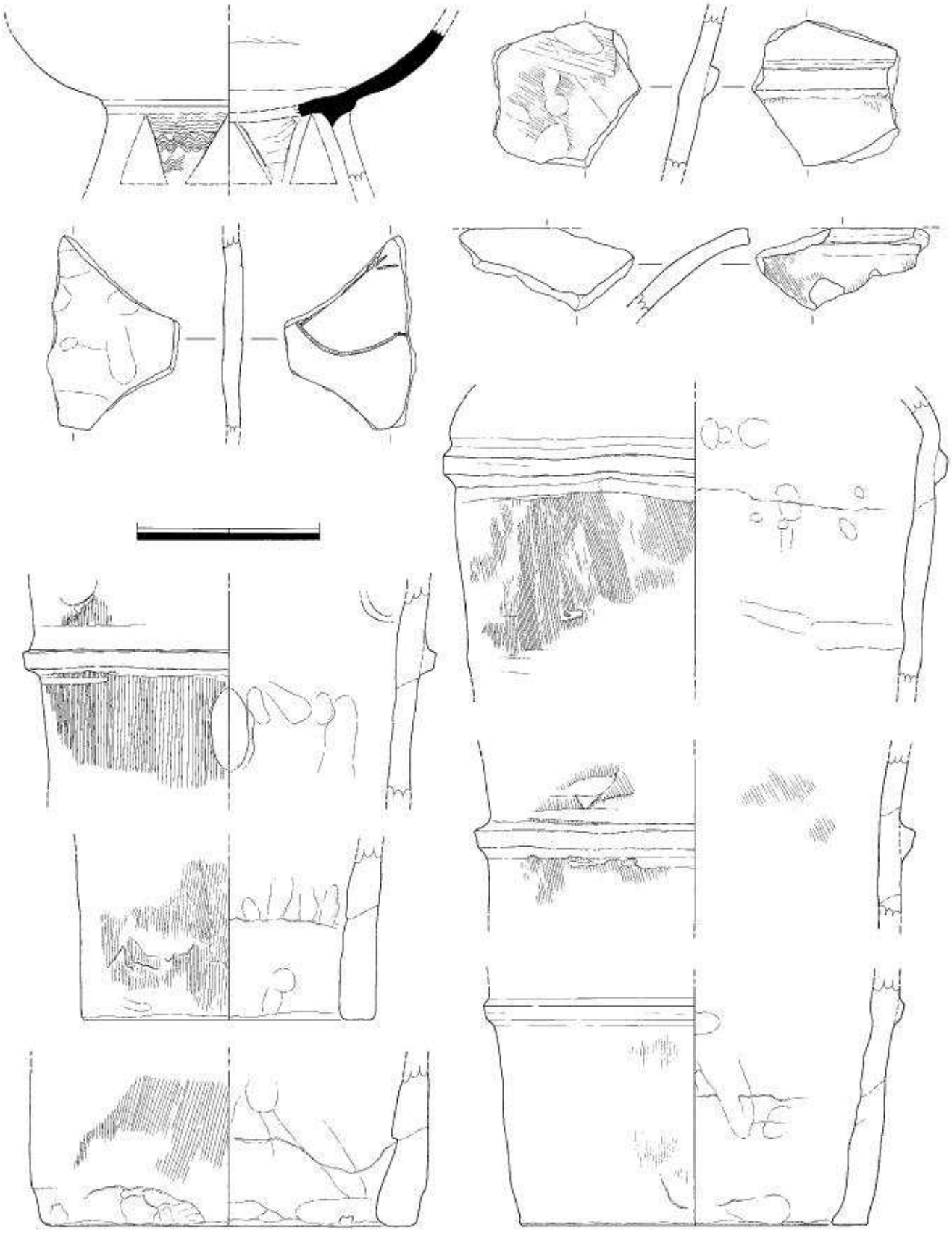


図32　ヤナイタ２号墳関連遺物①　（S＝1/３）

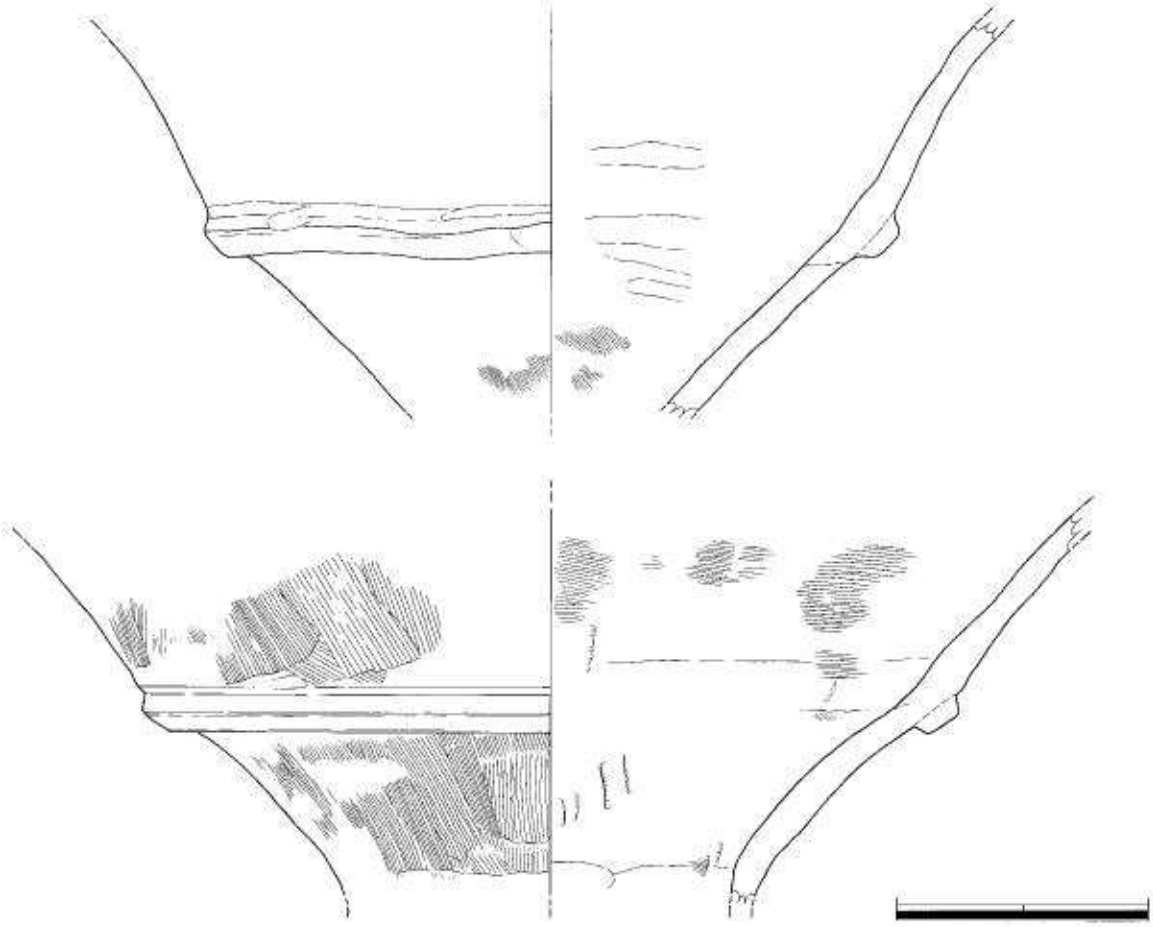


図33　ヤナイタ２号墳関連遺物②（S=1/3）

きず、底部調整を施す個体も見られない。なお透孔については、（５）において円形のものが観察される。

これらの諸特徴は、出土した埴輪が川西編年のⅣ期ないしⅤ期に相当するものであることを示している。※しかし残念ながら各個体の残存状況が悪く、埴輪のみからヤナイタ２号墳の時期を検討することは困難である。周溝出土の須恵器器台（１）の存在を参考にするなら、概ね古墳時代中期末葉（５世紀末頃）を前後する時期の築造と考えることができるだろう。

（２）土坑２出土遺物

土師器類をはじめとして、土製品や籠状製品、砥石など、多様な出土遺物が確認されている。以下で種類別に見ていくことにする。

土製品（図34－13）　溝２埋土と一連のものである土坑２最上層より出土した。残存長7.2㎝の土製品破片である。表面は被熱により赤変しており、煤が付着する状況が観察されることから、土製支脚の一部である可能性が考えられる。

土器（図34・35）　最上層から下層までの各層位より土師器が出土しており、計17個体を図化する

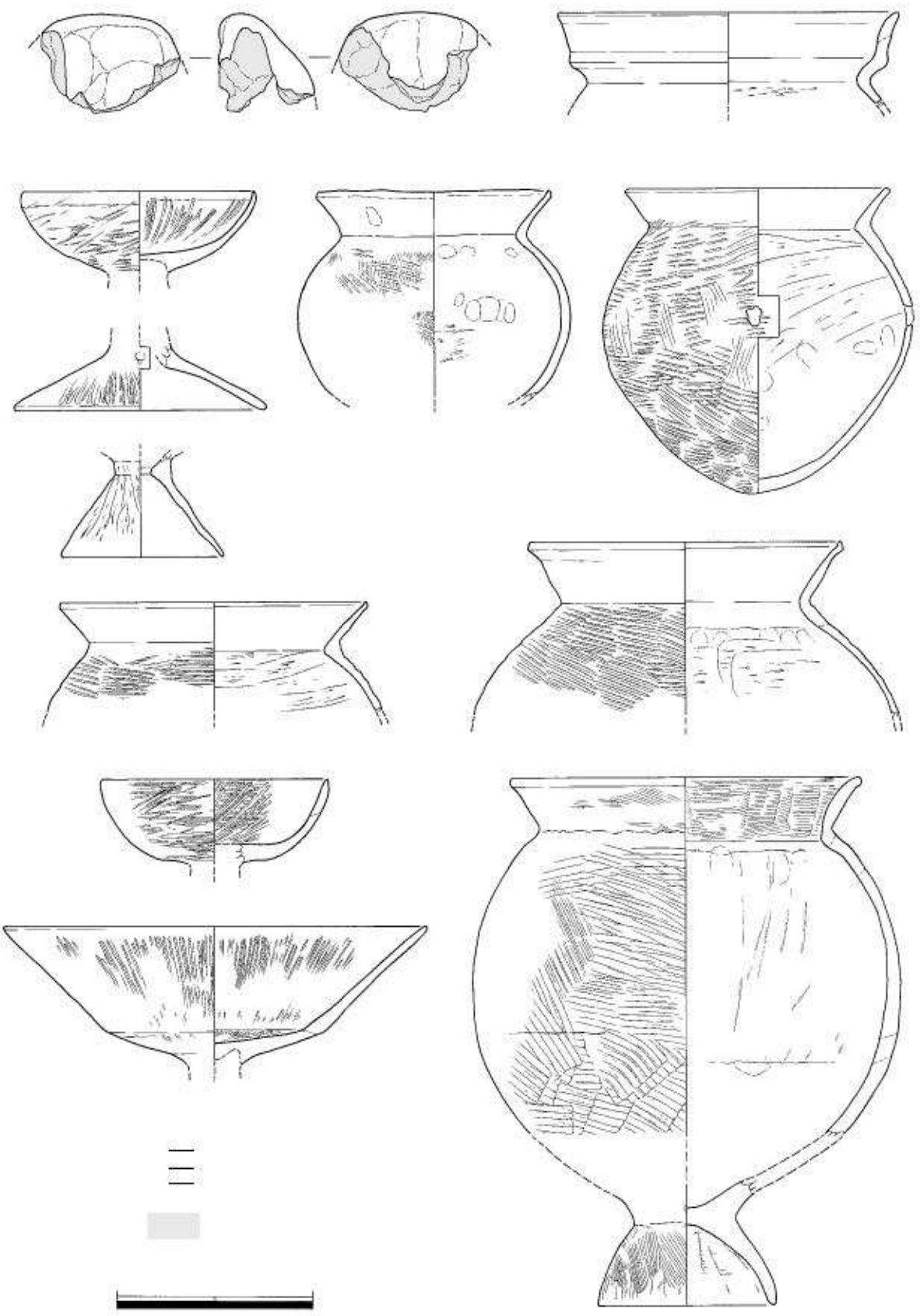


図34　土坑 2 出土遺物①（S＝1/3）

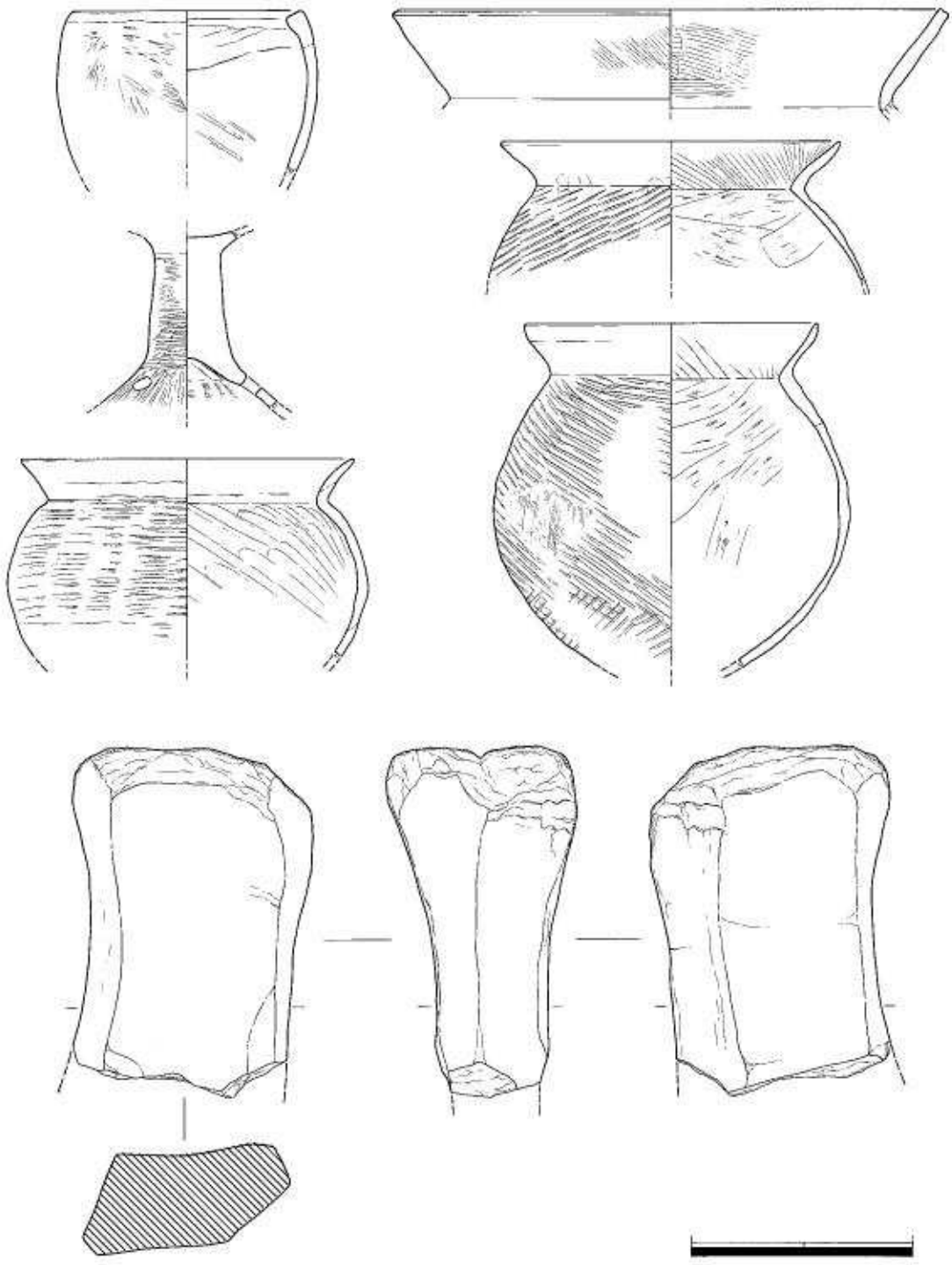


図35　土坑２出土遺物②（S＝1/３）

ことができた。これらは層位や出土状況に基づいて、最上層埋土出土土器（14）、上層埋土出土土器（15～21）、下層埋土出土土器（22～24）、底面出土土器（25～30）に分けられるもので、器種構成は、甕、高坏、小型器台、鉢など多岐にわたっている。確認された土器のうち、ほぼ完形の状態を保っていたのは甕（19）のみであり、それ以外は破片の状態で検出されている。この甕（19）には胴部中程に穿孔が見られるが、その他の個体については穿孔・破砕などの行為はみとめられなかった。なお、

図36　土坑２出土遺物③（S＝1/2）

甕（19）では煤の付着は見られなかったが、その他の甕では顕著にみとめることができる。多くの個体が煮炊きに使用されたものであることがわかる。

出土土器の所属時期については、それらの形態的特徴が参考となる。各個体の法量・形態的特徴・調整・色調・残存状況などの詳細については土師器観察表（表６）を参照するが、以下で各器種の傾向を見ておきたい。まず甕の形態に注目すると、尖り底を有する（19）は、外面のタタキ調整の後、一部にタテハケを施していることがわかる。（20）や（21）は口縁端部をつまみ上げるもので、（28）では口縁端部に弱い沈線を巡らせる。高坏では塊形の坏部を持つもの（15・22）のほか、直線的で長い口縁部を持つ個体（23）が見られる。

このような土器の形態的特徴から、これらは庄内式期の新しい段階に位置づけることができるだろう。その他の個体についても時期的に大きな矛盾は見られず、土坑の埋没が比較的短い時間の中で進行したと考えられる。

砥石（図35－31）　土坑２の底面付近で出土した。砂岩系の石材を使用するもので、一部分を欠失している。検出された破片は残存長が15.7㎝、重量は1627.0ｇであり、完形の状態であれば30㎝前後の大型品であったと考えられる。

籠状製品（図36－32）　土坑２下層埋土中より１個体が出土した。概ね全体の1/2程度が残存するもので、きわめて軟弱な状態にあったことから３つの破片に分けて取り上げている（図版25）。図36ではこのうち２つの破片を図示することができた。

（32－１）は最も大きな破片であり、全体の1/3程度が残存する。外面に土を伴った状態で取り上げ・保存処理をおこなったため、図では内面側のみが示されている。口縁部は長さ約15cmにわたって残存しており、正方形に近い底部も観察できる。破損と歪みのため正確な形状や法量は復元できないが、口径20cm前後、底部が一辺６cm程度の鉢形の形態が推定される。もう一つの破片（32－２）は、（32－１）に接続する部品である（図36では32－１の左側に接続）。二つ折れの状態で検出されており、図では外面側の一方のみが示されている。両方の破片ともに各部の編み方が詳細に観察できる状態である。

この個体の編み方・形状は、第140次調査で確認された３点の籠状製品ときわめて類似している[10]。第140次調査例は弥生時代後期末頃の土坑より出土したものであり、本例とは若干の時期差がある。しかしながら形態的な類似性や土坑出土という共通性を考慮すると、同様の用途を持つものと考えることができるだろう。なお今回出土例と第140次調査例で異なる点としては、一本のタテ材が三叉に分かれることが挙げられる。第140次調査出土個体の中にも二叉に分かれる個体が存在しており、細部ではこのような個体差を有していたことがわかる。

（３）土坑４出土遺物

底面付近を中心として、複数個体の土器類や土製支脚などが検出されている。

土器（図37・38－33～45）　底面付近で検出された計13個体の土師器を図示することができた。確認された器種は小型丸底鉢、高坏、甕、壷などで、完形に近い個体（33、36）のほか、比較的残存率が高いものが多くなっている。各個体の法量・形態的特徴・調整・色調・残存状況などについては、表６を参照することとし、以下ではその概要と注意される点について見ていきたい。

確認された土器を概観すると、甕や壷などの存在が目立っている。甕の外面には煤が顕著に付着しており、（36）や（41）の内面底部付近には炭化物が残存していた。これらは実際に煮炊きに使用されたともと考えられる。また（36）の胴部中程には穿孔が見られ、（40）の胴部にも穿孔の可能性のある小孔が観察できる。

壷は二重口縁壷と思われる（42）のほか、口頸部を欠く３個体が確認されている。（43）や（44）の外面には煤の付着が見られ、これらが火を受けていることは明らかである。一方（45）では、内面で炭化物や煤の付着がみとめられた。炭化物は底部付近で２㎜程度の厚さが残存しており、他の個体で確認されたものよりも多い。注意されるのは、外面で煤の付着が見られない点である。内面の炭化物の状況から火の使用は明らかであるが、こうした状況は、土器自体が火にかけられたのではないことを示している。すなわち、土器の中で何らかの物質が燃焼されたと推定することができる。また破断面の一部でも煤の付着が見られたことから、燃焼は完形の土器の中で行なわれたとは考えられない。検出された状態に近い、胴部下半以下の破片の中で燃焼されたと見ることができる。なお底部に近い胴部下半には、径4.5cmほどの穿孔が見られるが、これは上記の燃焼の後に開けられたものである。こうした穿孔行為が土坑に土器を入れる際になされたとすれば、（45）内面での燃焼は土坑の外で行なわれたことになる。

これらの土器は、その出土状況から一括性の高いものとして捉えられる資料である。その所属時期

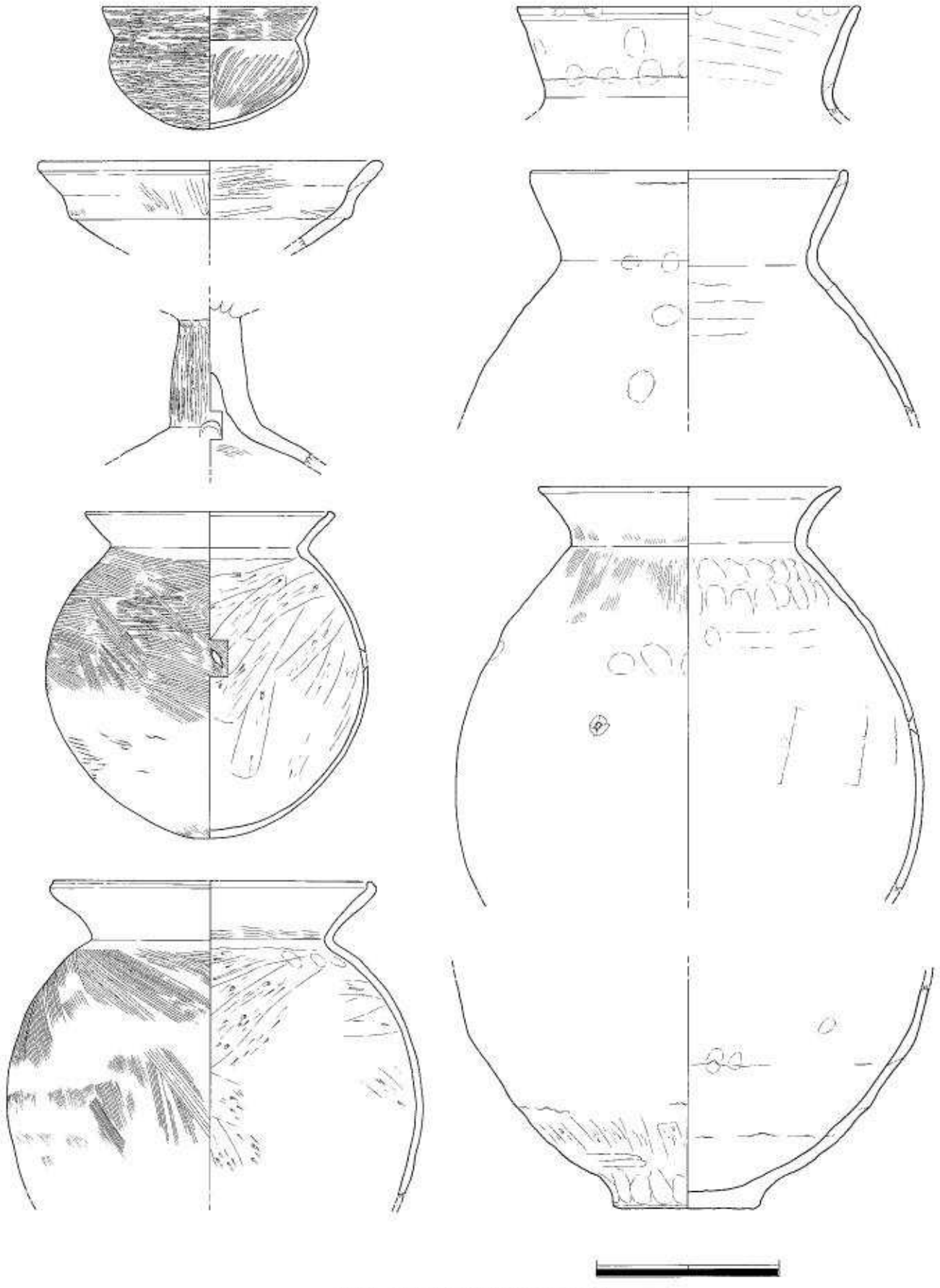


図37　土坑 4 出土遺物①（S＝1/3）

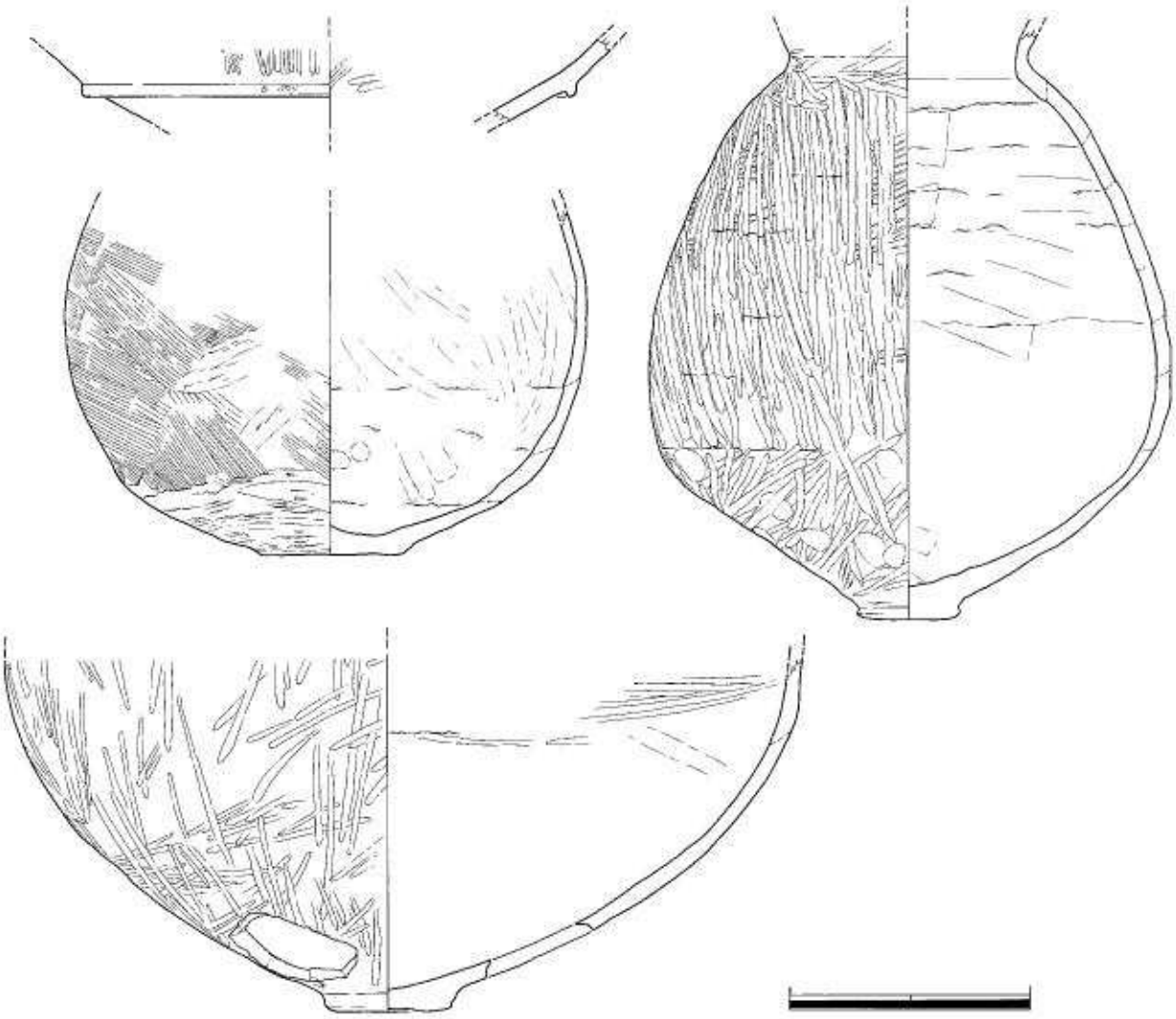


図38　土坑４出土遺物②（S=1/3）

は、小型丸底壷（33）や甕（36）の形態的特徴から、布留式期の古相段階、概ね寺澤編年[11]の布留０式期の範疇に位置付けることができるだろう。

土製支脚（図39－46～54）　上記の土器類とともに、土坑４の底面付近より検出された。基部から先端部まで残存するものが４点（46～49）、先端部周辺のみが残存するものが２点（50・51）、基部周辺のみが残存する破片が３点（52～54）確認されている。（50・51）と（52～54）、あるいは（53）と（54）の間では、直接の接合関係は見られなかったものの、同一個体の破片である可能性が残されている。これにより、土坑４には最少で６個体、最も多い場合で９個体の土製支脚が存在したことがわかる。各破片ともに被熱の痕跡が明瞭にみとめられることから、実際に使用されたものであると推定できる。なお、各破片の法量、色調、残存状況などについては表４に示した。

残存率の高い４個体（46～49）はいずれも烏帽子形を呈するものであり、その他の破片についても同様の形態を推定することができる。全体に砂粒を多く含んだ粘土を手捏ねにより整形しており、表面には指オサエ痕や指ナデ痕が顕著にみとめられる。基部は平面形態が円形に近いもので、（49）を除

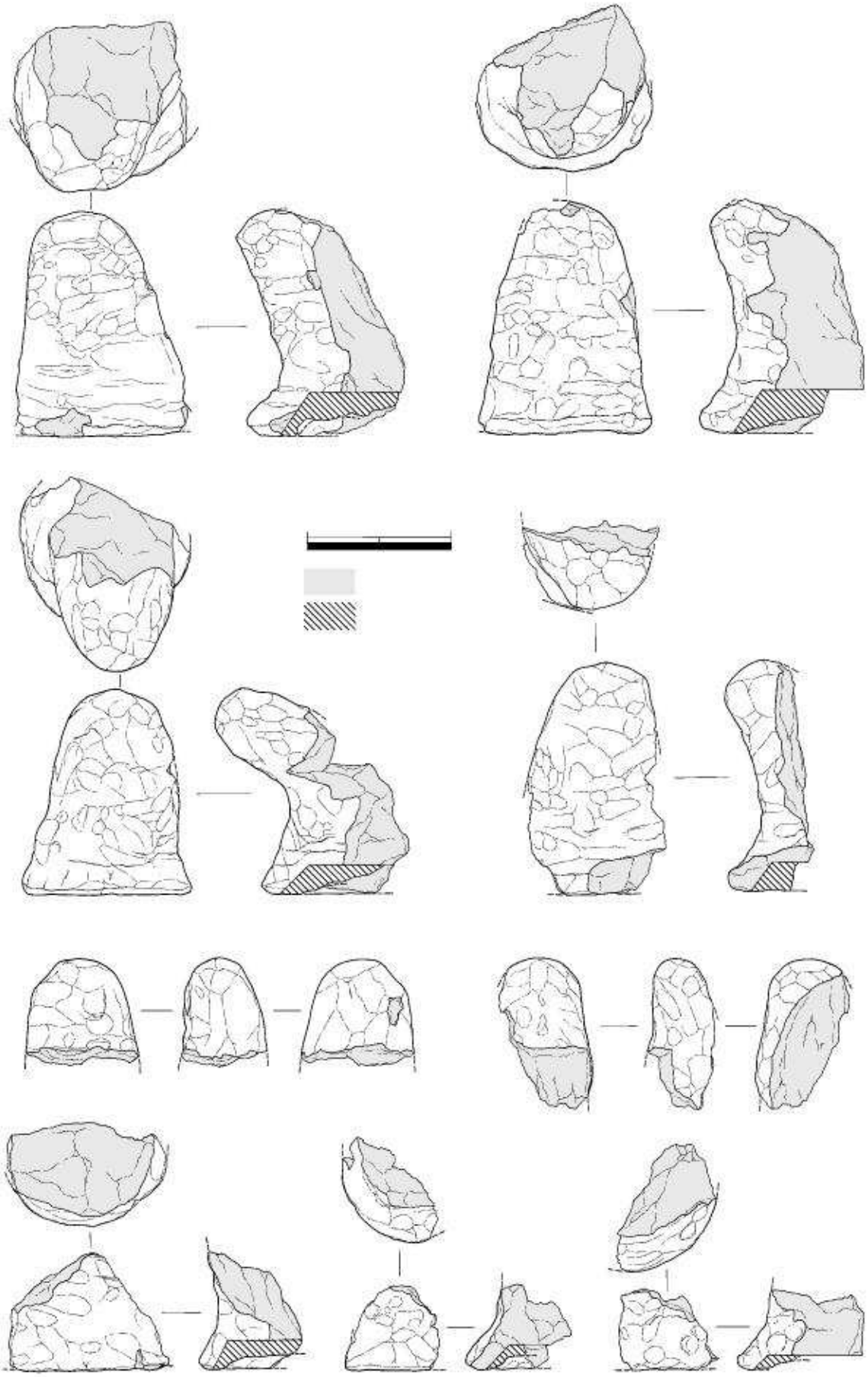


図39　土坑 4 出土遺物③（S=1/4）

表４　土製支脚一覧表

図番号	写真図版	法量（cm）	保存処理後の重量（g）	色調	残存	その他
図39－46	図版27－46	高さ 15.7 基部径 11.9以上	1417.8	前面 灰褐色（7.5YR5/2） 側面 黒色（N1.5/0） 底面 灰色（7.5Y4/1）	背面側の一部を欠く	
図39－47	図版27－47	高さ 16.2 基部径 12.2以上	1346.9	前面 にぶい黄褐色（10YR5/3） 側面 黒色（N1.5/0） 底面 灰色（5Y4/1）	背面側の一部を欠く	
図39－48	図版27－48	高さ 14.4 基部径 11.8以上	937.4	前面 にぶい褐色（7.5YR5/3） 側面 黒色（N1.5/0） 底面 灰オリーブ色（5 Y6/2）	背面側を欠く	
図39－49	図版27－49	高さ 16.1	489.1	前面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 側面 黒色（N1.5/0） 底面 灰色（5Y5/1）	背面側を大きく欠く	基部底面の凹みなし
図39－50	図版27－50	（残存長 7.4）	267.9	前面 灰褐色（7.5YR5/2） 側面 黒色（N1.5/0）	先端部周辺	基部底面の形態不明
図39－51	図版27－51	（残存長 10.4）	210.9	前面 灰褐色（7.5YR4/2） 側面 黒色（N1.5/0）	先端部周辺	基部底面の形態不明
図39－52	図版27－52	（残存高 8.2） 基部径 11.0以上	353.9	前面 にぶい褐色（7.5YR5/3） 側面 黒色（5Y2/1） 底面 灰オリーブ色（5Y6/2）	基部周辺	
図39－53	図版27－53	（残存高 5.9）	116.0	前面 灰褐色（7.5Y5/2） 側面 黒色（N1.5/0） 底面 灰黄色（2.5Y6/2）	基部周辺	
図39－54	図版27－54	（残存高 5.6）	162.3	前面 にぶい褐色（7.5YR5/3） 底面 灰オリーブ色（5 Y6/2）	基部周辺	

く各個体では底面の中央を１cm程度凹ませている。体部は、使用時に火を受ける側である前面に向かって湾曲しており、先端部は丸く整形されていた。特に前面において指オサエ痕が顕著に残存する状況が観察できる。

背面側は各個体において表面の剥離が著しく、前面側の良好な残存状況とは対照的なあり方を示す。これは使用時における被熱量の差に起因するものと推定できる。すなわち、これらの土製支脚は製作段階での焼成が不十分なものであって、前面側は使用時の被熱によりそれが補われたのに対し、背面側はそれが無かったために表面が脆くなったと考えられる。

（４）自然流路出土遺物

トレンチ南半部に広がる自然流路は、既述のように大きく３つの段階の堆積がみとめられる。このうち第１段階の堆積は、一部断割りの結果遺物を含まないことが確認されている。また第３段階の堆積からはヤナイタ２号墳の埴輪などが検出されているが、これについてはヤナイタ２号墳関連遺物として既に触れた。従ってここでは第２段階の堆積に相当する各部からの出土遺物を見ていくことにしたい。なお土器の法量・形態的特徴・調整・色調・残存状況などの詳細については、表６において示している。

北側流芯上層遺物（図40・41－55～82）　多くの土師器片が確認されている。図40・41では、外来系土器などの特徴的な遺物のほか、時期的な特徴が表れやすい甕の口縁部付近の破片や小型器台を中心に計28点を示している。

出土土器の中で最も点数が多かったのは甕で、法量や口縁部形態の多様さが目にとまる。特に、外反する口縁の端部をつまみ上げる個体（60、70、75など）や、内湾する口縁の端部が内側に肥厚する個体（61、62など）の存在が目立っている。小型器台は外傾して短く立ち上がる口縁部を持つもので

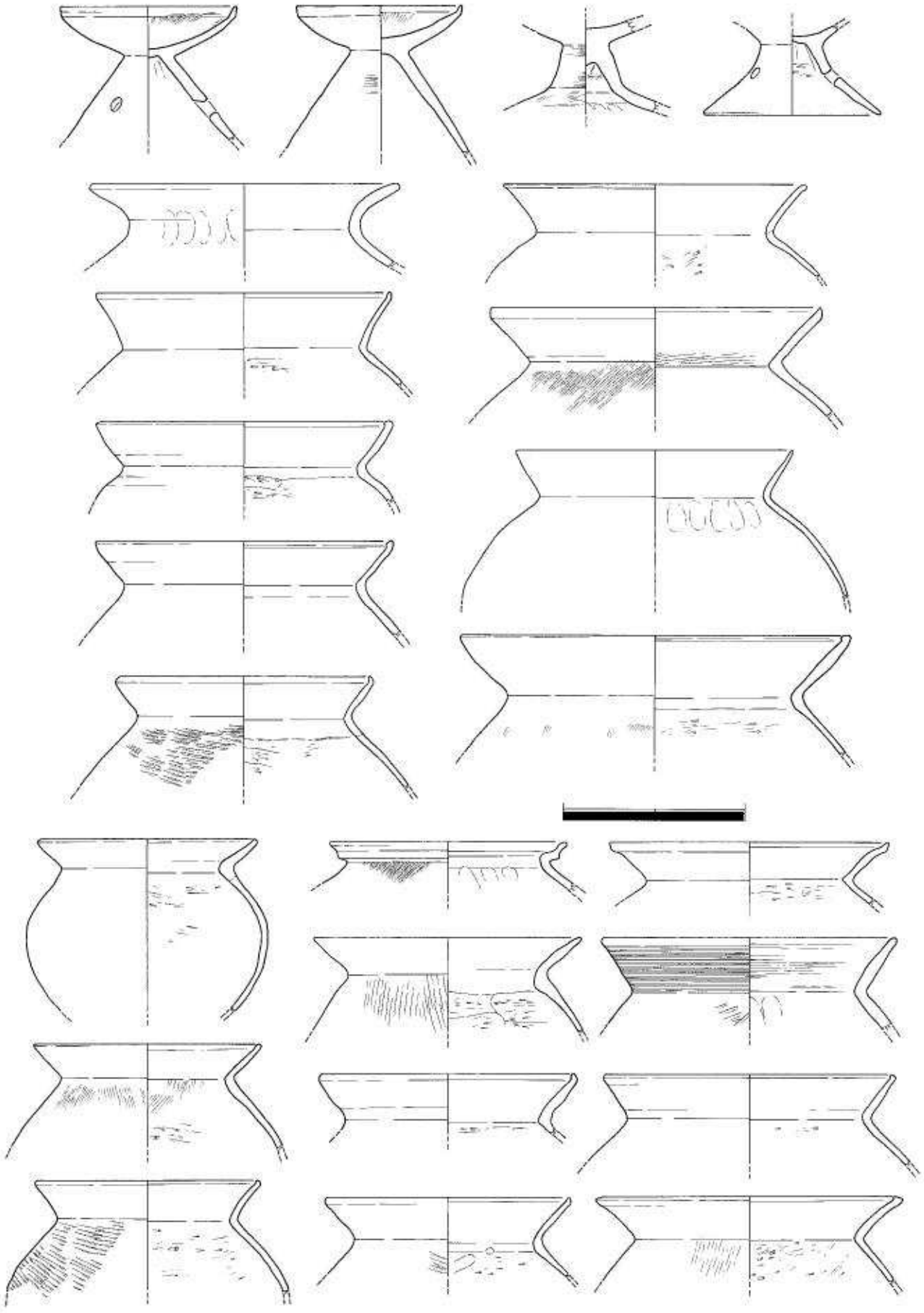


図40　自然流路 出土遺物①［北側流芯 上層］（S=1/3）

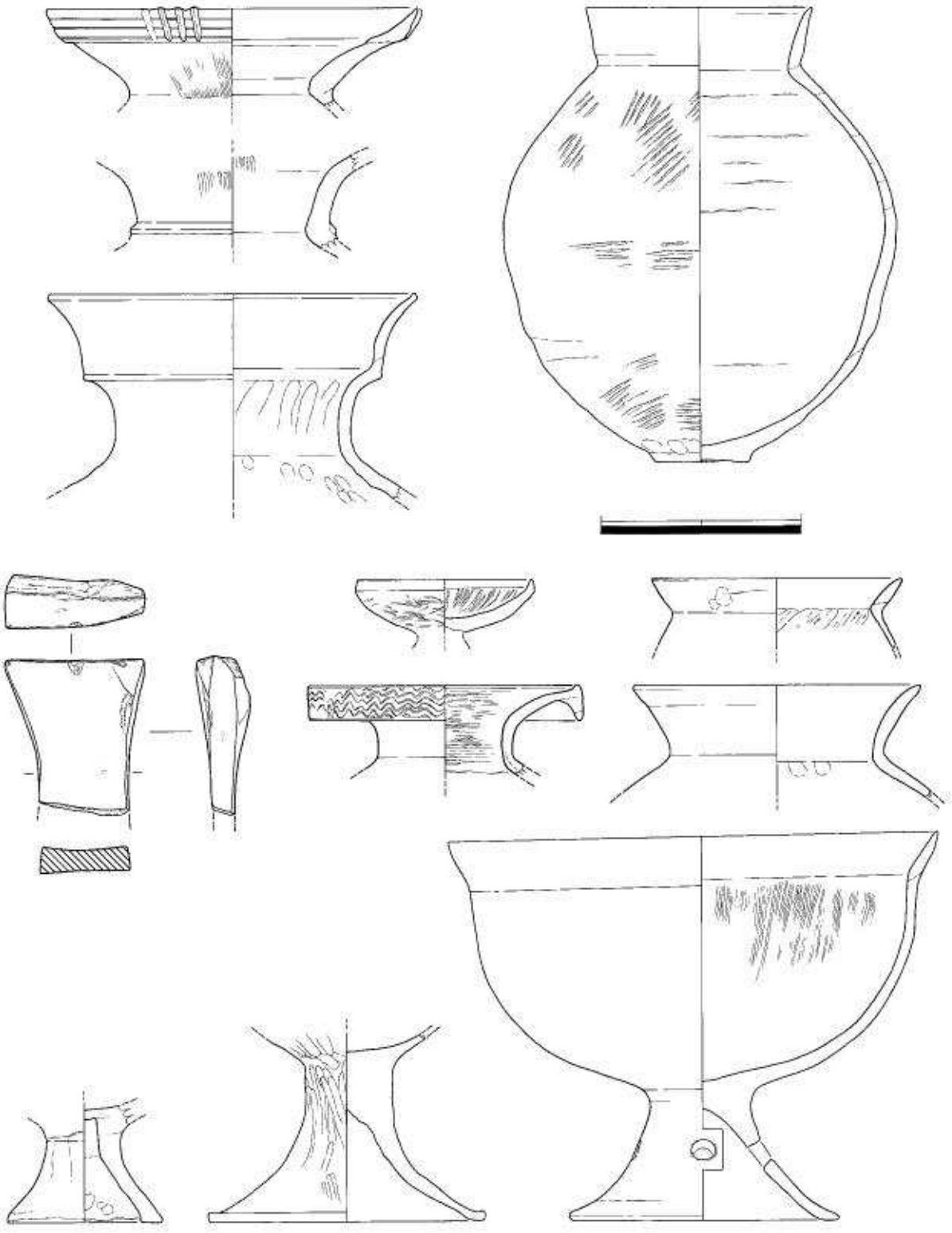


図41　自然流路出土遺物②　［北側流芯 上層・下層］（S＝1/3）

あった。こうした土器の特徴は庄内式期の新相から布留式期の古相に見られるものであり、これらの土器は布留式古相段階に流されてきたものと推定できる。なお外来系土器としては、S字状口縁台付甕（71）やパレス式壺（79）など東海系のものが確認されている。

北側流芯下層遺物（図41－83～90）　多数の土師器片と砥石1点が確認されている。完形に近く復元できた台付鉢（90）のほか計8点の遺物を図示することができた。

砥石（83）は砂岩系の石材を使用するもので、一部分を欠失した状態で検出された。残存長は7.8cmで、重さは151.4gを測る。土師器は総じて北側流芯上層のものよりも古い印象を受ける。小型器台（84）の存在から庄内式期の新相以降のものと考えられるだろう。

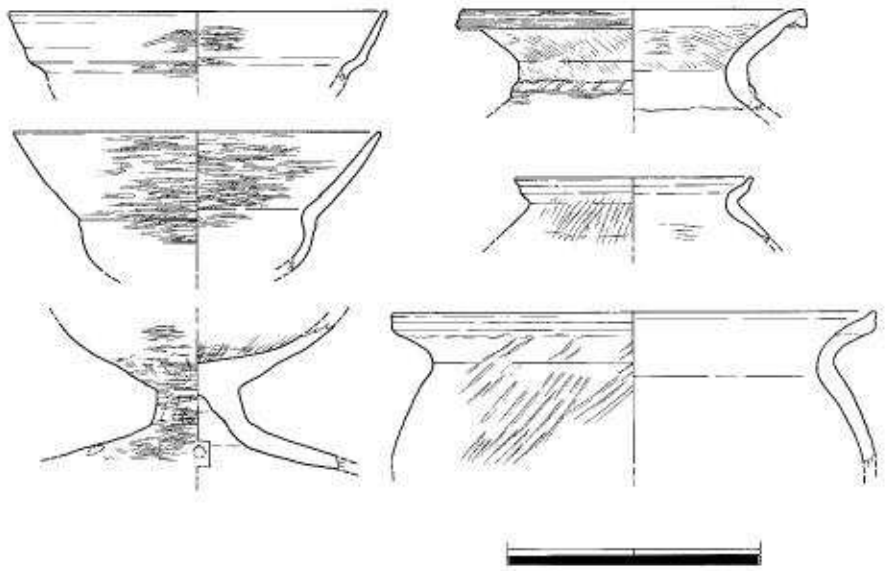


図42　自然流路出土遺物③［南側流芯］（S＝1/3）

南側流芯出土遺物（図42）　ここでも土師器の出土が見られたが、全体に北側流芯部分と比べると破片が小さく、総量も少ない。図示することができたのは6点のみであった。

時期的な点に注目すると、甕（96）など古い様相を示す個体が見られる一方で、有段鉢（91）や小型丸底鉢（92）など布留1式期の範疇で考えられる個体が存在していることがわかる。これらから、南側流芯部の堆積は布留式期の古相段階に形成されたものと考えることができる。

（5）その他の遺構出土遺物

図30で示したような小規模な遺構からも、遺物の出土が確認されている。しかし大半は器種を推定することも困難な小片であり、図化することができたのは3点のみであった。なおこれらの個体の法量・形態的特徴・調整・色調・残存状況についても、表6において示している。

図43の（97）は土坑1出土の小型丸底鉢である。口縁部が明瞭に内湾し、頸の締まりも比較的強いことから布留式古相段階の資料と考えられる。

（98）・（99）はピット4出土の甕である。前者は外反する口縁部、後者は内湾する口縁部を持つもので、これらについても布留式古相段階の範疇のものと考えられる。

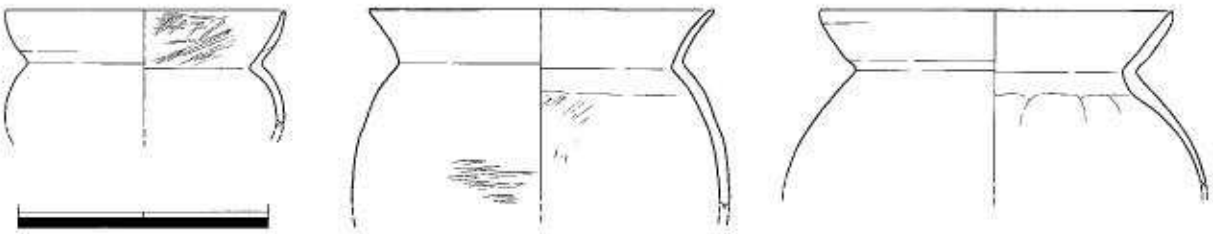


図43　土坑1［97］・ピット4［98・99］出土遺物（S＝1/3）

5. まとめ

今回の調査では古墳時代中期末頃の古墳2基と、土坑をはじめとする古墳時代前期の遺構が複数確認された。以下でこれらの遺構の意義について考えておきたい。

ヤナイタ古墳群　纒向遺跡のある桜井市北部は、箸墓古墳や東田大塚古墳など、古墳出現期の大型墳墓が複数存在する地域である。しかし前期中葉以降には古墳の数が減少し、前期後半の箸中イヅカ古墳[12]、中期初頭頃の茅原大墓古墳の後には、首長墳の築造が断絶している。再びこの地で首長墳が築かれるのは毘沙門塚古墳[13]など後期初頭頃のことであり、ヤナイタ古墳群はこれに前後する時期に築造されたと考えられる。

纒向遺跡ではこれまでにも複数の小規模古墳の存在が知られている。特に遺跡西半の平地部では、ヤナイタ古墳群と同様に墳丘が削平された古墳が複数確認されている。これらの中には前期に遡るものもあるが、大半は中期末～後期頃の時期が考えられる[14]。これまで中期前半～中頃の古墳が知られていないことを考えると、纒向遺跡では中期末以降にこうした小規模古墳の築造が活発化しているということができるだろう。纒向遺跡におけるこうした変化が、上記の首長墳の変動と連動する時期に見られる点は興味深い。

纒向遺跡の西半部に存在する小規模古墳の多くは墳丘の大半が失われており、現状でその分布状況を把握することはできない。しかし近年の調査において確認例が増加しつつあり、かなり多くの小規模古墳が存在したと推定できる。また遺跡の東側部分では、時期は不明であるものの現状で墳丘が確認できる中小規模古墳が多数存在している。これらの中小規模古墳は、纒向遺跡における大規模集落衰退後の状況を解明する上で重要な存在であり、今後注目していく必要があるだろう。

土坑2・土坑4　纒向遺跡ではこれまでにも多くの土坑が確認されている。それらは纒向遺跡で大規模集落が盛行する時期を通じて見られ、特に現在県営住宅がある辻地区の旧河道周辺で多数検出されている。こうした土坑は掘削が湧水点に達していることから、井戸としての機能が推定されることが多い。しかし一方で、多くの土器とともに舟形や水鳥形などの木製品、あるいは一部が炭化した木片などの特殊な遺物が検出される例が存在している。このような土坑は祭祀との関係性が指摘されており、そこから出土する遺物は、火や食物に関連する祭事に使用された後に廃棄されたものと推定されている[15]。

今回確認された土坑でも、そうした「祭祀」との関係をうかがわせる遺物が出土している。壷（45）では、破片の内面側で火が使用された痕跡が見られた。また6個体以上の土製支脚や、内面に炭化物が付着する甕の存在は、指摘されるような祭事形態との関連性を想起させるものと言える。

こうした土坑は近年の調査でも確認されており、今後も類例の増加が期待される。集落内での分布状況や出土遺物を検討することにより、これらの土坑やそれに関連する「祭祀」が、当時の纒向遺跡でどのような位置付けにあったかを明らかにしていくことが今後の課題であろう。

纒向遺跡での発掘調査は今回で145次を数えることとなった。近年は小規模な調査が多いが、確実に新たな資料が蓄積されている。古墳時代前期の大規模集落に注目するとともに、それを含めた大きな

時間幅の中での纒向遺跡の変遷を考えていくことも重要であろう。　（福辻）

【註記】

1）清水眞一　1993「第70次調査の成果」『桜井市纒向遺跡第69・70次発掘調査報告書』　桜井市教育委員会
　橋本輝彦　1998『纒向遺跡第106次調査現地説明会資料―東田大塚古墳の発掘調査―』（財）桜井市文化財協会
　橋本輝彦（編）　2006『東田大塚古墳―奈良盆地東南部における纒向型前方後円墳の調査―』（財）桜井市文化財協会

2）萩原儀征　1984「纒向遺跡（桜井市纒向）」『大和を掘る　1983年度発掘調査速報展』4　橿原考古学研究所附属博物館

3）橋詰清孝　1987『1987－12桜井市大字太田農業基盤整備事業に伴う発掘調査概報（纒向遺跡南飛塚地区）』桜井市教育委員会

4）清水眞一　1993「第69次の調査の成果」『桜井市纒向遺跡第69・70次発掘調査報告書』　桜井市教育委員会
　橋本輝彦　2002「纒向遺跡第124次発掘調査報告」『桜井市平成13年度国庫補助による発掘調査報告書』　桜井市教育委員会

5）橋本輝彦　1995「纒向遺跡第79次発掘調査報告」『桜井市平成６年度国庫補助による発掘調査報告書２』　桜井市教育委員会

6）松宮昌樹　2001「纒向遺跡第120次調査報告」『桜井市平成12年度国庫補助による発掘調査報告書』　桜井市教育委員会

7）本書第２章第３節参照

8）埴輪の編年観や製作技法に関わる用語については、主に以下の文献を参考とした。
　川西宏幸　1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64－2　日本考古学会

9）本節における古式土師器の編年観は、主に以下の文献を参考としている。
　寺澤薫　1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県文化財調査報告書34　奈良県立橿原考古学研究所

10）福辻淳　2005「纒向遺跡第140次発掘調査報告」『桜井市平成16年度国庫補助による発掘調査報告書』　桜井市教育委員会

11）註９）文献に同じ

12）米川仁一　2001「纒向遺跡第119次・121次調査概報」『奈良県遺跡調査概報　2000年度』　奈良県立橿原考古学研究所

13）清水眞一　1994「茅原遺跡第４次調査」『桜井市内埋蔵文化財1993年度発掘調査報告書』（財）桜井市文化財協会

14）古墳時代前期に遡るものとしては、前期後半頃のヒバクビ古墳などがある。これ以外にも前期前半以前の方形周溝墓が複数確認されている。ヤナイタ古墳群に近い時期のものとしては、辻地区の弧状溝、勝山東古墳、高塚古墳群、堀川古墳、箸中イヅカ古墳南側の方形周溝墓のほか、本書の第２章第３節で報告した石塚東古墳などが挙げられる。

15）石野博信・関川尚功　1976『纒向』橿原考古学研究所編　桜井市教育委員会

表5　ヤナイタ2号墳 埴輪観察表

図番号	写真図版	出土遺構・層位	遺物の種類	法量（cm）	形態的特徴	調整など	色調（外面）	残存	その他
図32－2	図版23－2	溝3	円筒埴輪		外面に幅2cm程度、断面形態が台形の突帯を有する。	(外) タテハケ、突帯とその周辺はナデ (内) ナナメハケ	浅黄橙色 (10YR8/3)	突帯付近 1/10以下	
図32－3	図版23－3	溝3	円筒埴輪		円筒状の形態が推定され、円筒埴輪と推定される。	(外) (内) とも摩滅のため調整不詳	灰白色 (10YR8/2)		外面にヘラ記号
図32－4	図版23－4	自然流路 上層	朝顔形埴輪		大きく外反する口縁部、端部には明瞭な端面を有する。	(外) タテハケ (内) 摩滅のため調整不詳	灰黄色 (25Y7/2)	口縁付近 1/10以下	
図32－5	図版23－5	墳丘北西側 周溝	円筒埴輪		体部は直線的で、わずかに外傾する。外面に幅1.5cm程度の突帯が巡らされる。2ヶ所に円形透孔が確認できる。	(外) タテハケ、突帯とその周辺はナデ (内) 主にタテ方向のナデ	浅黄橙色 (10YR8/3)	突帯付近 1/5	
図32－6	図版23－6	墳丘北西側 周溝	朝顔形埴輪		体部はわずかに外傾して上方にのびたのち、内側に屈曲して内湾する。屈曲部直下の外面には、幅2cm程度で断面形態が台形の突帯が巡らされる。	(外) タテハケ、突帯とその周辺はナデ (内) ナデ、指オサエ	浅黄色 (25Y7/3)	円筒部上端 1/4	
図32－7	図版23－7	溝3	円筒埴輪		体部はわずかに外反するもので、幅2cmほどで断面形態が三角形に近い突帯が外面に巡らされる。	(外) タテハケ、突帯とその周辺はナデ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	突帯付近 1/6	
図32－8	図版23－8	自然流路 上層	円筒埴輪	底径 (15.8)	厚みのある体部で、ほぼ垂直方向に立ち上がる。	(外) タテハケ (内) ナデ、指オサエ	灰黄色 (25Y7/2)	底部付近 1/5	
図32－9	図版23－9	墳丘北西側 周溝	円筒埴輪	底径 (20.6)	底部付近は厚みがあり、わずかに外傾して直線的に立ち上がる。	(外) タテハケ、底部付近は指オサエなど (内) ナデ、指オサエ	淡黄色 (25Y8/3)	底部付近 1/6	
図32－10	図版23－10	墳丘北西側 周溝	円筒埴輪	底径 (19.0)	体部はやや外傾して直線的に立ち上がる。外面に幅1.5cm程度の突帯が巡らされる。	(外) タテハケ、突帯とその周辺はナデ (内) ナデ、指オサエ	灰白色 (25Y8/2)	底部付近 1/7	
図33－11	図版23－11	墳丘北西側 周溝	朝顔形埴輪		直線的に広がったのち、わずかに上方へと屈曲し、そこから外反して広がる口縁部。外面には幅2cm程の幅平な突帯が巡らされる。	(外) タテハケ、突帯周辺はナデ (内) ヨコ方向のナデ、一部にナナメハケあり	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	口縁中ほど 1/5	
図33－12	図版23－12	溝3	朝顔形埴輪		外反して大きく広がる口縁部。外面に幅2cm程度の突帯が巡らされる。	(外) タテハケ、突帯周辺はナデ (内) ヨコハケの痕跡あり	灰黄色 (25Y7/2)	口縁中ほど 1/4	

表6　經向遺跡第145次調査 土師器観察表

図番号	写真図版	出土遺構・層位	遺物の種類	法量（cm）	形態的特徴	調整など	色調（外面）	残存	その他
図34－14	図版24－14	土坑2 最上層	土師器 甕	口径 (17.2)	口縁部はいわゆる複合口縁の形態を呈し、その端部付近はやや外反して丸くおさめられている。	(外) ナデ (内) 口頸部はナデ、胴部はケズリ	灰褐色 (7.5YR5/2)	口縁部付近 1/4	外面の煤付着顕著
図34－15	図版24－15	土坑2 上層	土師器 高坏	口径 11.7	塊形の坏部を持つ。口縁端部は丸くおさめられる。	(外) 主にヨコ方向のミガキ (内) タテ方向のミガキ	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	坏部 70%	
図34－16	図版24－16	〃	土師器 高坏	脚径 (12.6)	大きく広がる脚裾部は、わずかに内湾する。脚端部は丸くおさめられている。円形透孔が1ヶ所で確認できる。	(外) タテ方向のミガキ (内) ナデ	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	脚裾部 1/4	煤付着 (2次焼成か)
図34－17	図版24－17	〃	土師器 小型器台	脚径 8.1	体部に円孔を貫通させる形態で、脚部はほぼ直線的に広がり、端部を丸くおさめる。	(外) タテ方向のケズリ (内) ナデ	褐灰色 (7.5YR5/1)	脚部 90%	

図番号	写真図版	出土遺構・層位	遺物の種類	法量（cm）	形態的特徴	調整など	色調（外面）	残存	その他
図34－18	図版24－18	＊	土師器 甕	口径　(11.8)	口縁はやや外反して広がり、端部はわずかに上方へとつまみ上げられる。胴部は丸みのある形態である。	(外) タタキ調整ののちタテハケ (内) 口縁部はナデ、胴部下半はケズリが明瞭	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	口縁～胴部 1/3	
図34－19	図版24－19	＊	土師器 甕	器高　15.5 口径　13.1 胴径　15.7	口縁はやや外反するもので、端部はわずかに外側へとつまみ出される。胴部は球形に近く、底部は尖り底の形状を示す。	(外) 口縁部はナデ、胴部はタタキ調整 (内) 口縁部はナデ、胴部はケズリ	黄橙色 (10YR6/4)	ほぼ完形	胴部中程に穿孔
図34－20	図版24－20	＊	土師器 甕	口径　(15.4)	口縁はわずかに外反し、端部は上方へつまみ上げられる。胴部上半は丸みを持つ。	(外) 口縁部はナデ、胴部はタタキ (内) 口縁部はナデ、胴部はケズリ	灰黄色 (2.5Y6/2)	口縁部付近 1/6	外面に煤付着顕著
図34－21	図版24－21	＊	土師器 甕	口径　(15.6)	口縁はわずかに外反し、端部は上方へつまみ上げられる。胴部上半は丸みを持つ。	(外) 口縁部はナデ、胴部はタタキ (内) 口縁部はナデ、胴部はケズリ	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	口縁～胴上半 1/4	外面に煤付着顕著
図34－22	図版24－22	土坑2 下層	土師器 高坏	口径　(11.4)	塊形の坏部を持つ。口縁端部は丸くおさめられる。	(外) ヨコ方向～ナナメ方向のミガキ (内) ヨコミガキののちタテ方向の放射状ミガキ	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	坏部 1/6	
図34－23	図版24－23	＊	土師器 高坏	口径　(21.4)	口縁部は直線的で大きく広がり、端部は丸くおさめられる。体部との境界部分に見られる稜は、それほど明瞭ではない。	(外) タテ方向のミガキ調整 (内) タテ方向のミガキ調整	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	坏部 1/3	
図34－24	図版24－24	＊	土師器 台付甕	口径　(17.6) 胴径　(21.7) 脚径　(8.8)	口縁はやや外反し、端部は外側に肥厚する。体部は球形に近い形態で、脚台部は内湾するものである。脚端部は丸くおさめられている。	(外) 口縁は細かいハケ、胴部以下は粗いハケを施し、脚台部はさらに細かいハケ調整がなされる (内) 口縁部はヨコハケ、胴部・脚部はナデ	褐灰色 (10YR4/1)	全体 40%	外面に煤付着
図35－25	図版25－25	土坑2 底面	土師器 鉢？	口径　(10.2)	体部は内湾するもので、口縁端部には明瞭な端面を有し、内側に肥厚する。	(外) 細かい擦痕状のものと、ハケメが観察される (内) ナデにより整形される	にぶい橙色 (5YR6/4)	口縁付近 1/3	
図35－26	図版24－26	＊	土師器 高坏		脚柱部は中実で、脚裾は直線的に広がる。円形透孔が3ヶ所にみとめられる。	(外) 脚柱部はヨコミガキ、脚裾部はタテミガキ (内) ハケ状の痕跡あり	褐灰色 (10YR6/1)	脚柱部付近 全周	
図35－27	図版25－27	＊	土師器 甕	口径　(14.8) 胴径　(16.2)	口縁は外反する形態で、端部は丸くおさめられる。胴部は張りのある形態である。	(外) 口縁部はナデ、胴部はタタキ調整 (内) 口縁部はヨコナデ、胴部はナナメ方向のナデ	灰黄褐色 (10YR6/2)	口縁～胴部 1/3	
図35－28	図版25－28	＊	土師器 甕	口径　(24.2)	口縁部は直線的に広がる形態で、端部には弱い沈線を有する。	(外) ナナメハケののちナデ (内) ヨコハケののちナデ	灰黄褐色 (10YR5/2)	口縁 1/10以下	外面の煤付着顕著
図35－29	図版25－29	＊	土師器 甕	口径　(15.0)	口縁は外反するもので、端部は丸くおさめる。口縁部と胴部の境界の内面には、鋭い稜が形成される。	(外) 口縁部はナデ、胴部はタタキ (内) 口縁部はナナメハケ、胴部はケズリ	にぶい橙色 (5YR6/4)	口縁～胴上半 全周	外面の煤付着顕著
図35－30	図版25－30	＊	土師器 甕	口径　(13.0) 胴径　(16.0)	口縁はやや内湾する形態で、端部を丸くおさめる。胴部は球形に近いものであるが、肩部の張りは強いものではない。	(外) 口縁部はナデ、胴部はタタキののち一部にタテハケ (内) 口縁部はナデ、胴部はケズリ	灰褐色 (7.5YR6/2)	口縁～胴部 1/2	外面の煤付着顕著
図37－33	図版25－33	土坑4 底面	土師器 小型丸底鉢	器高　6.7 口径　11.6 胴径　10.9	わずかに内湾する口縁、端部は丸くおさめる。胴部はやや扁平な球形で、底部付近がやや尖り気味である。	(外) 胴部にタテハケののち、全体にヨコミガキ (内) 口縁はヨコハケ、胴部はタテ方向のミガキ	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	全体 90%	
図37－34	図版26－34	＊	土師器 高坏	口径　(18.2)	外反する口縁部を有し、端部は丸くおさめられる。	(外) タテ～ナナメ方向のミガキ (内) ヨコ方向のミガキ	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	坏上半 1/6	
図37－35	図版26－35	＊	土師器 高坏		脚柱部は下半が中空となり、脚裾部は直線的に広がる。2方向に透孔あり。	(外) タテ方向のミガキ (内) ハケ痕跡あり	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	脚柱部付近 全周	
図37－36	図版26－36	＊	土師器 甕	器高　17.9 口径　13.2 胴径　17.7	口縁はほぼ直線的な形態で、端部は内面を肥厚させる。胴部は球形を呈する。	(外) 口縁はナデ、胴部はタタキののちハケ・ナデ (内) 口縁はナデ、胴部はケズリ	橙色 (7.5YR6/4)	全体 90%	胴部中程に穿孔 外面の煤付着顕著 内面に炭化物付着

図番号	写真図版	出土遺構・層位	遺物の種類	法量（cm）	形態的特徴	調整など	色調（外面）	残存	その他
図37－38	図版26－38	〃	土師器 甕	口径　(18.4)	直線的で外傾する口縁、端部付近の外側に弱い沈線が巡らされる。	(外) 指オサエ、ナデ (内) ナデ	灰黄褐色 (10YR6/2)	口縁部 1/4	
図37－39	図版26－39	〃	土師器 甕	口径　(17.0)	外傾して直線的にのびる口縁、端部付近はやや内側に屈曲する。胴部の張りは弱い。	(外) ナデ (内) ナデ	灰白色 (2.5Y8/1)	口縁～胴上半 1/5	
図37－40	図版26－40	〃	土師器 甕	口径　(16.3)	外反する短い口縁、端部は丸くおさめる。胴部はやや下膨れの形態。	(外) ナデ、口縁から胴部上半にはハケメ残る (内) ナデ、工具痕と思われる圧痕あり	浅黄色 (2.5Y7/3)	口縁～胴部 1/3	外面の煤付着顕著 穿孔？
図37－41	図版26－41	〃	土師器 甕	底径　7.8	丸みのある胴部下半に、突出する平底を有す。	(外) ナデ、一部にケズリ痕残る (内) ナデ	灰黄褐色 (10YR6/2)	胴下半 60%	外面の煤付着顕著 内面に炭化物付着
図38－42	図版26－42	〃	土師器 壺？		わずかに内湾する壺の口縁部と思われる。外面に突帯が巡る。	(外) タテ方向のミガキ (内) ヨコ方向のミガキ	黒褐色 (10YR3/2)	口縁の一部 1/10以下	
図38－43	図版26－43	〃	土師器 壺	胴径　(21.6) 底径　5.6	下膨れの胴部形態が推定され、わずかに突出する平底を持つ。	(外) ケズリののちハケ調整 (内) ナデ	灰白色 (2.5Y8/2)	胴下半 60%	
図38－44	図版26－44	〃	土師器 壺	胴径　21.6 底径　4.2	下膨れの胴部形態で、わずかに突出する平底を持つ。	(外) タタキののちミガキ調整 (内) ナデ	灰色 (5Y5/1)	胴部以下 60%	
図38－45	図版26－45	〃	土師器 壺	底径　4.9	丸みのある胴部下半で、突出して中央が凹む底部を持つ。	(外) 不定方向のミガキ調整 (内) ナデ、一部にハケメ状痕跡	灰褐色 (7.5YR6/2)	胴部下半 全周	胴部下端付近に穿孔 内面に炭化物付着
図40－55	図版27－55	自然流路北側 流芯 上層	土師器 小型器台	口径　(9.5)	皿状の体部に、短く外反する口縁部が伴う。脚部は直線的に広がる形態で、円形透孔が1ヶ所のみ確認できる。	(外) 摩滅のため調整不詳 (内) 口縁部はナデ、体部は放射状のミガキ	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	全体 40%	
図40－56	図版27－56	〃	土師器 小型器台	口径　(8.8)	受部は、皿状の体部に短く垂直方向に立ち上がる口縁部が付く形態。脚部は直線的に広がる。	(外) 摩滅により不詳 (内) 受部はタテ方向ミガキ、脚部は不詳	橙色 (7.5YR7/6)	体部付近 全周	
図40－57	図版27－57	〃	土師器 高坏		脚柱部が短く、脚裾部が大きく広がる低脚の高坏。	(外) ミガキ (内) 指オサエ痕あり	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	脚柱部 全周	
図40－58	図版27－58	〃	土師器 台付器種	脚径　(9.4)	外反して「八」字形に開く脚部には、円形透孔が3方向に配されている。	(外) (内) とも摩滅のため調整不詳	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	脚部 30%	
図40－59	図版28－59	〃	土師器 甕	口径　(16.6)	大きく外反する口縁部を持つ。口縁端部には不明瞭な端面が形成される。	(外) (内) とも摩滅のため調整不詳	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	口縁付近 1/5	
図40－60	図版28－60	〃	土師器 甕	口径　(15.9)	外反する口縁部を持つ。口縁端部は内側に肥厚する。	(外) 摩滅により不詳 (内) 口縁部はナデか　胴部はケズリ	橙色 (7.5YR6/6)	口縁付近 1/4	
図40－61	図版28－61	自然流路北側 流芯 上層	土師器 甕	口径　(15.4)	内湾する口縁部は、端部が内側に肥厚する形態である。胴部上端は丸みを帯びている。	(外) ナデか (内) 口縁部はナデ、胴部はケズリ	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	口縁付近 1/5	
図40－62	図版28－62	〃	土師器 甕	口径　(16.2)	直線的な口縁部を持つ。口縁端部は、内側に明瞭に肥厚させている。	(外) (内) とも摩滅のため調整不詳	橙色 (7.5YR6/4)	口縁付近 1/6	
図40－63	図版28－63	〃	土師器 甕	口径　(13.4)	口縁部は直線的で、端部を明瞭に上方へつまみ上げる。胴部上半は、直線的に大きく広がる形態である。	(外) 口縁はヨコナデ、胴部はタタキ (内) 口縁はナデ、胴部は上端がナデで他はケズリ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	口縁～胴上半 1/5	
図40－64	図版28－64	〃	土師器 甕	口径　(16.0)	わずかに外反する口縁部を持ち、端部が外側へとつまみ出されている。	(外) 摩滅のため調整不詳 (内) 口縁部はナデか　胴部はケズリ	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	口縁付近 1/7	
図40－65	図版28－65	〃	土師器 甕	口径　(17.8)	直線的に広がる口縁部を持ち、その端部は上方につまみ上げられる。	(外) 口縁部はナデ、胴部はナナメハケ (内) ナデ、口縁の一部にハケメ残る	灰黄褐色 (10YR4/2)	口縁周辺 1/6	

図番号	写真図版	出土遺構・層位	遺物の種類	法量（cm）	形態的特徴	調整など	色調（外面）	残存	その他
図40－66	図版28－66	〃	土師器 甕	口径　(14.8)	わずかに内湾する口縁は、端部が上方につまみ上げられる。胴部は丸みのある形態。	(外)（内）とも摩滅のため調整不詳	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	口縁～胴上半 1/4	
図40－67	図版28－67	〃	土師器 甕	口径　(21.0)	わずかに内湾する口縁部は、端部が内側に肥厚する形態。	(外) 口縁部はナデ、胴部はハケメが残る (内) 口縁部はナデ、胴部はケズリ	淡橙色 (5YR8/4)	口縁付近 1/5	
図40－68	図版28－68	〃	土師器 甕	口径　(11.6) 胴径　(13.2)	わずかに内湾する口縁は、端部が丸くおさめられる。胴部は丸みを帯びるが、肩の張りは弱い。	(外) 摩滅のため調整不詳 (内) 口縁部はナデか　胴部はケズリ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	口縁～胴部 1/4	
図40－69	図版28－69	〃	土師器 甕	口径　(12.2)	直線的に広がる口縁は、端部が内側に肥厚する形態。胴部はなで肩の形状	(外) 口縁部はナデ、胴部はタテハケ (内) 口縁部はナデ、胴部はケズリでハケメもあり	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	口縁～胴上半 1/4	
図40－70	図版28－70	〃	土師器 甕	口径　(12.0)	外反する口縁、端部は上方へつまみ上げられている	(外) 口縁部はナデか　胴部はタタキ (内) 口縁部はナデ、胴部はケズリ	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	口縁～胴上半 1/4	
図40－71	図版28－71	〃	土師器 台付甕	口径　(12.7)	口縁部の断面が「S」字形を呈するS字状口縁台付甕。	(外) 口縁部はナデ、胴部タテハケ (内) ナデ、指オサエ	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	口縁付近 1/7	
図40－72	図版28－72	〃	土師器 甕	口径　(14.3)	直線的な口縁は、端部が丸くおさめられる。胴部は肩の張りが弱い形態。	(外) 口縁部はナデ、胴部はタテ方向のハケ (内) 口縁部はナデ、胴部はケズリ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	口縁～胴上半 1/4	
図40－73	図版28－73	〃	土師器 甕	口径　(13.7)	直線的な口縁は、端部が上方へとつまみ上げられる形態である。	(外) ナデ (内) 口縁部はナデ、胴部はケズリ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	口縁部 1/2	
図40－74	図版28－74	〃	土師器 甕	口径　(13.2)	直線的な口縁部を持ち、その端部を上方につまみ上げる。	(外) 口縁部はナデ、胴部はタタキ (内) 口縁部はナデ、胴部はケズリ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	口縁付近 1/4	
図40－75	図版28－75	〃	土師器 甕	口径　(15.0)	口縁部は外反するもので、端部は外側上方へとつまみ上げられる。内面では口縁と胴部の境界の稜が明瞭である。	(外) 口縁部はナデ、それ以外は不詳 (内) 口縁部はナデ、胴部はケズリ	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	口縁付近 1/6	
図40－76	図版28－76	〃	土師器 甕	口径　(15.8)	ほぼ直線的な口縁部、端部はやや外側に肥厚する。胴部はやや厚みがある。	(外) 口縁部はヨコハケ、胴部はタタキ (内) 口縁部にヨコハケが残る	灰黄褐色 (10YR5/2)	口縁付近 1/3	
図40－77	図版28－77	〃	土師器 甕	口径　(15.2)	直線的な口縁、端部は内側上方へと肥厚する。	(外)（内）とも摩滅のため調整不詳	橙色 (7.5YR6/6)	口縁付近 1/5	
図40－78	図版28－78	〃	土師器 甕	口径　(15.8)	外反する口縁部は、端部を内側上方へと肥厚させる形態である。	(外) 口縁部はナデ、胴部はタテハケのちナデ (内) 口縁部はナデ、胴部はケズリ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	口縁付近 1/7	
図41－79	図版28－79	〃	土師器 壺	口径　18.2	パレス壺。口縁は外反したのち外側上方へとすぼまる形態である。端部付近の外面には3条の沈線が巡り、4条の粘土紐をタテ方向に貼り付けて装飾する。口縁内面の中ほどには稜が見られる。	(外) タテハケの痕跡　摩滅のため不詳 (内) 摩滅のため調整不詳	灰白色 (7.5YR8/2)	口頸部 1/2	
図41－80	図版28－80	〃	土師器 壺		頸部は短いもので、わずかに外反する形態である。口縁部はその上方より大きく広がる。外面の胴部と頸部の境界には突帯が巡らされる。	(外) 口頸部はタテ方向のミガキ (内) 口縁部にわずかにミガキ残る	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	頸部周辺 全周	
図41－81	図版28－81	〃	土師器 二重口縁壺	口径　(18.0)	外反する頸部の上方に、さらに外反して広がる口縁部を有する。口縁端部は上方につまみ上げられる。口縁部と頸部の境界には稜が見られる。	(外) ナデか　摩滅により不詳 (内) ナデ、指オサエ	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	口頸部 1/5	
図41－82	図版28－82	〃	土師器 壺	器高　22.5 口径　(11.1) 胴径　(19.4) 底径　4.6	短く直線的な口縁は大きく広がるものではなく、端部はほぼ丸くおさめる。胴部はやや縦長の形態で、肩の張りは弱いものである。底部は突出して中央をやや凹ませる。	(外) 口縁部はヨコナデ、胴部はタタキ (内) ナデ	灰白色 (10YR8/2)	全体 40%	製塩土器？

図番号	写真図版	出土遺構・層位	遺物の種類	法量（cm）	形態的特徴	調整など	色調（外面）	残存	その他
図41－84	図版29－84	〃	土師器 小型器台	口径　8.6	体部は丸みのある皿状の形態で、短く立ち上がる口縁部が付く。	(外) 口縁部はナデ、体部は不定方向のミガキ (内) 口縁部はナデ、体部はタテ方向のミガキ	灰黄色 (2.5Y7/2)	受部 全周	
図41－85	図版29－85	〃	土師器 壺	口径　13.2	頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口縁端部は上下に粘土を貼り付け、幅1.8cm程に整形している。	(外) ナデ調整、口縁端外側に波状文を施す。 (内) ヨコ方向ミガキ	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	口頸部 全周	
図41－86	図版29－86	〃	土師器 甕	口径　(12.4)	やや厚手の口縁部は、短く直線的なものである。口縁端部は丸くおさめる。	(外) ナデ (内) 口縁部はナデ、胴部はケズリ	灰白色 (2.5Y8/2)	口縁付近 1/3	
図41－87	図版29－87	自然流路北側流芯上層	土師器 壺	口径　(14.0)	口縁部は外反する形態で、端部は丸くおさめている。	(外) ヨコ方向のナデ (内) 口縁部はナデ、胴部は不詳	橙色 (5YR7/6)	口頸部付近 1/4	
図41－88	図版29－88	〃	土師器 高坏？	脚径　7.6	脚柱部は中空で短い。脚裾部は直線的なもので、それほど大きく広がるものではない。脚端部の接地面は比較的大きい。	(外) ナデか (内) ナデ、指オサエなど	灰色 (5Y4/1)	脚部 80%	
図41－89	図版29－89	〃	土師器 高坏	脚径　(13.6)	脚柱部は中実で、脚裾部は外反して広がる形態。	(外) 主にタテ方向のミガキ (内) 不詳	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	脚柱部 全周	
図41－90	図版29－90	〃	土師器 台付鉢	器高　19.3 口径　(24.1) 脚径　13.2	鉢部は半球形の体部に直線的に広がる口縁部が付く形態。脚台部は外反して広がるもので、中程に円形透孔が4方向に配されている。	(外) 口縁部と脚裾部はナデ、それ以外は不詳 (内) 鉢部はタテ方向のミガキ、脚台部はナデ	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	全体 70%	
図42－91	図版29－91	自然流路南側流芯	土師器 有段鉢	口縁　(14.8)	体部と口縁部の間に屈曲部を持つ有段鉢。口縁部は直線的な形態で、端部を丸くおさめる。	(外) ヨコ方向のミガキ (内) ヨコ方向のミガキ	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	口縁付近 1/10	
図42－92	図版29－92	〃	土師器 小型丸底鉢	口径　(14.4)	口縁部はわずかに内湾して大きく広がる形態で、端部を丸くおさめている。	(外) ヨコ方向のミガキ、口縁部にはケズリ痕残る (内) ヨコ方向のミガキ、一部にハケメ残る	にぶい橙色 (10YR7/3)	口縁～胴部 1/5	
図42－93	図版29－93	〃	土師器 高坏		脚柱部の短い低脚の高坏。脚裾部は直線的に大きく広がり、円形透孔が4方向に配されていたようである。坏部は欠損のものと推定される。	(外) ヨコ方向のミガキ、坏部にはケズリ痕残る (内) 坏部は放射状のミガキ、脚部はナデ	灰黄褐色 (10YR5/2)	脚柱部周辺 全周	
図42－94	図版29－94	〃	土師器 壺	口径　13.4	頸部は短いもので、口縁部は直線的に広がる。口縁端部は粘土貼り付けにより、幅0.8cm程に整形する。外面の胴部と頸部の境界には刻み目を施す突帯が巡る。	(外) 口縁端部にヨコハケ、口頸部はナナメハケ (内) 口縁部はハケ調整、頸部はナデ	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	口頸部 1/2	
図42－95	図版29－95	〃	土師器 台付甕	口径　(9.2)	口縁部の断面が「S」字形を呈するS字状口縁台付甕。小型の個体である。	(外) 口縁部はナデ、胴部は粗いナナメハケ (内) 口縁部はナデ、胴部にはハケメが残る	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	口縁付近 1/7	
図42－96	図版29－96	〃	土師器 甕	口径　(19.0)	外反する口縁部、端部はつまみ上げる形態で、端面には沈線が巡る。胴部の張りは弱い。	(外) 口縁部はナデ、胴部はタタキ (内) ナデ調整	灰黄褐色 (10YR5/2)	口縁～胴上半 1/5	
図43－97	図版29－97	土坑1	土師器 小型丸底鉢	口径　(11.0) 胴径　(11.1)	口縁部は内湾するもので、端部は丸くおさめている。胴部は丸みを帯びるが、やや扁平な形態が推定される。	(外) ナデ (内) 口縁部はミガキ、胴部はナデ	橙色 (2.5YR6/6)	口縁～胴上半 1/4	
図43－98	図版29－98	ピット4	土師器 甕	口径　(13.5)	口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。胴部は丸みのある形態であるが、張りは弱いものである。	(外) ナデで仕上げるが、タタキの痕跡あり (内) 口縁はナデ、胴部は上端がナデで他はケズリ	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	口縁～胴上半 1/5	
図43－99	図版29－99	〃	土師器 甕	口径　(13.8)	口縁部は直線的であるが、わずかに内湾させている。口縁端部は丸くおさめられている。	(外)（内）とも摩滅のため調整不詳	橙色 (7.5YR7/6)	口縁～胴上半 ほぼ全周	

※法量のうち（ ）付のものは復元値を示している。

北区南北溝（北より）

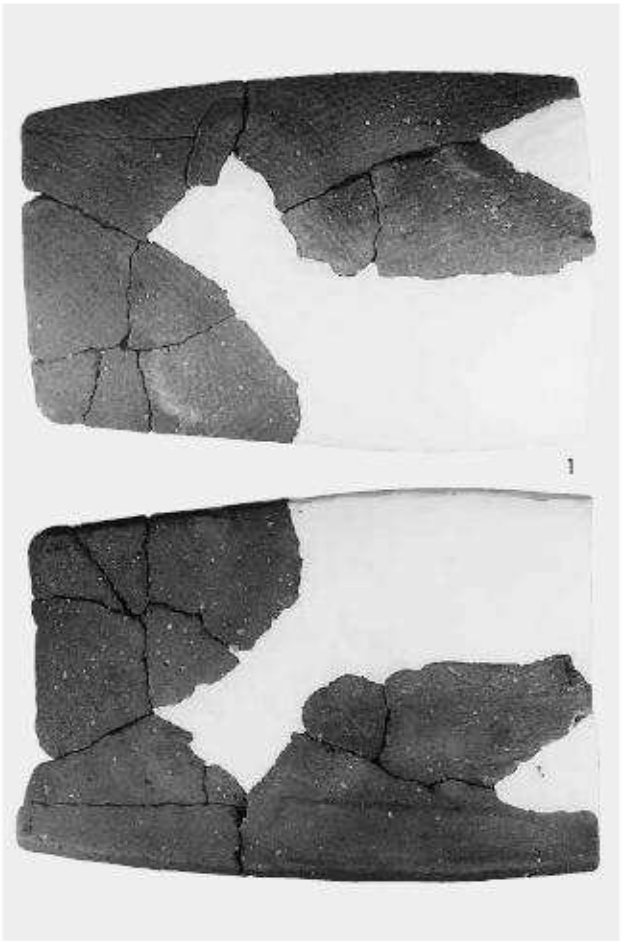
北区全景（西より）

北区全景（東より）

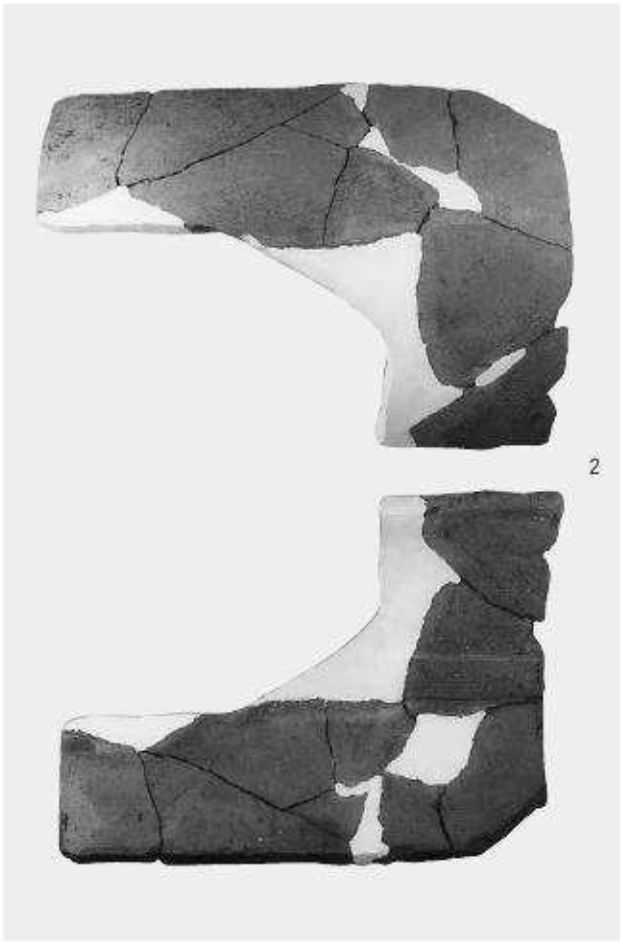
南区瓦出土状況
（南西より）

南区北半部全景
（南東より）

南区全景（南より）

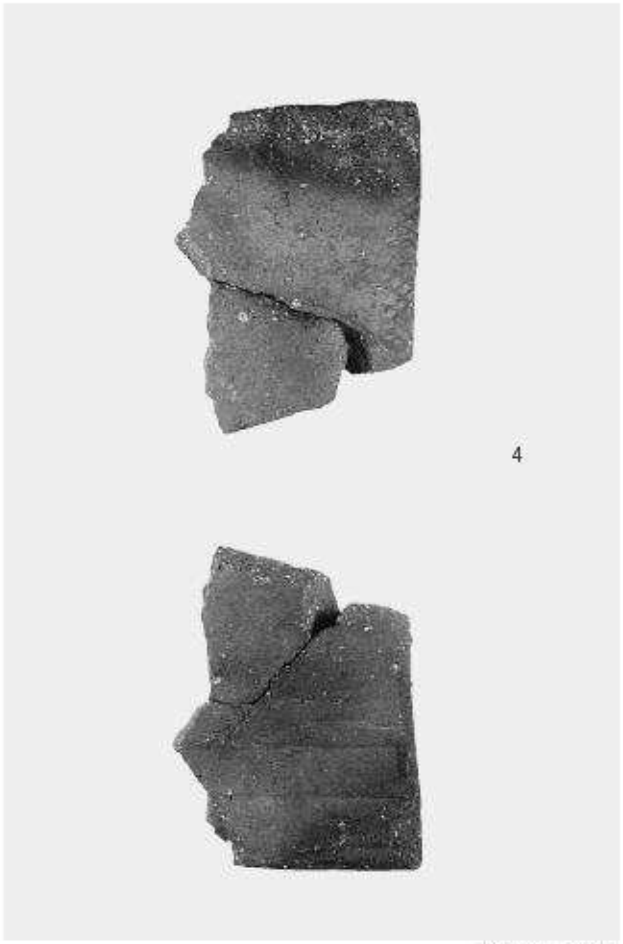


1



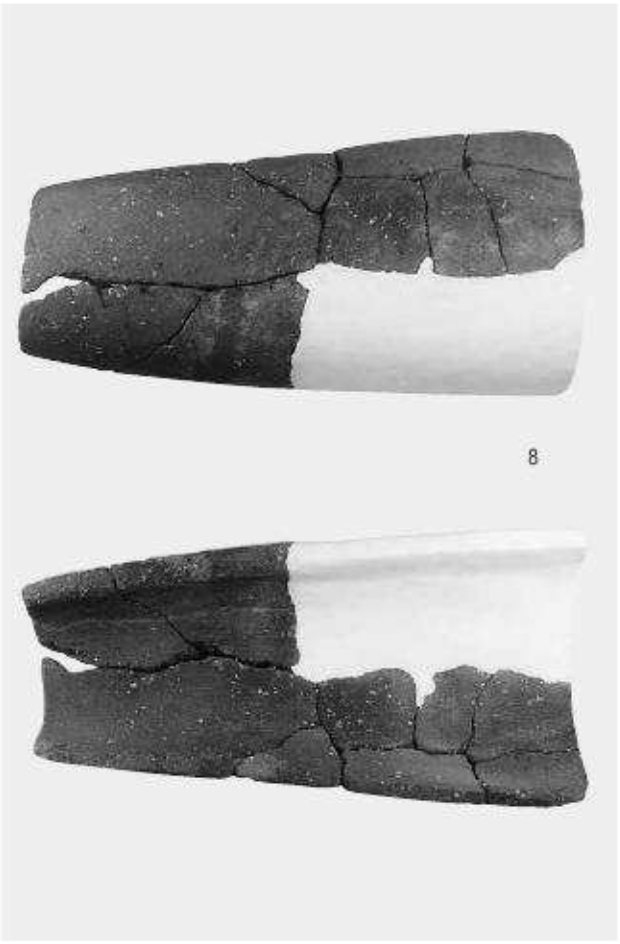
2

3

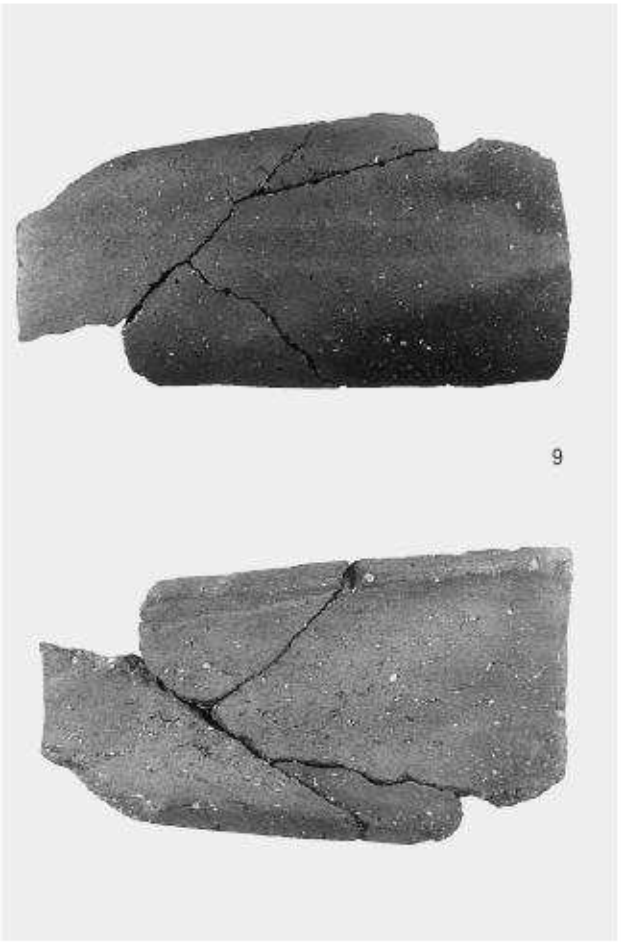


4

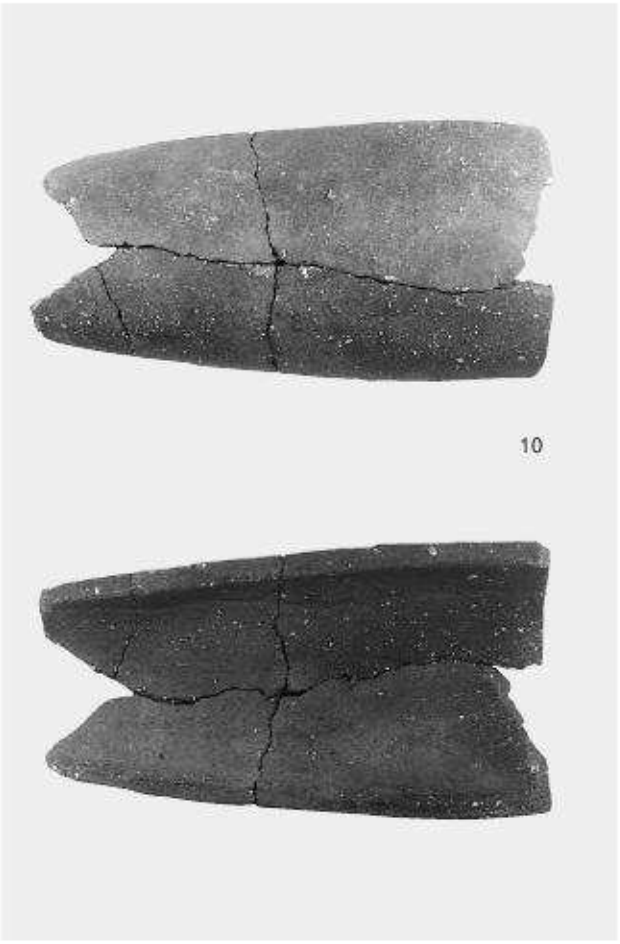
北区出土平瓦



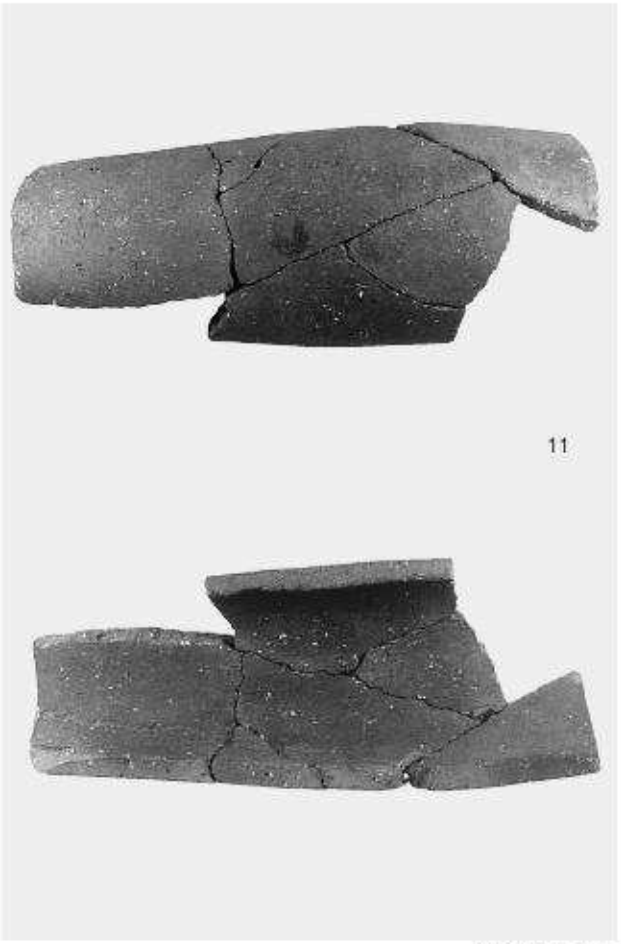
8



9

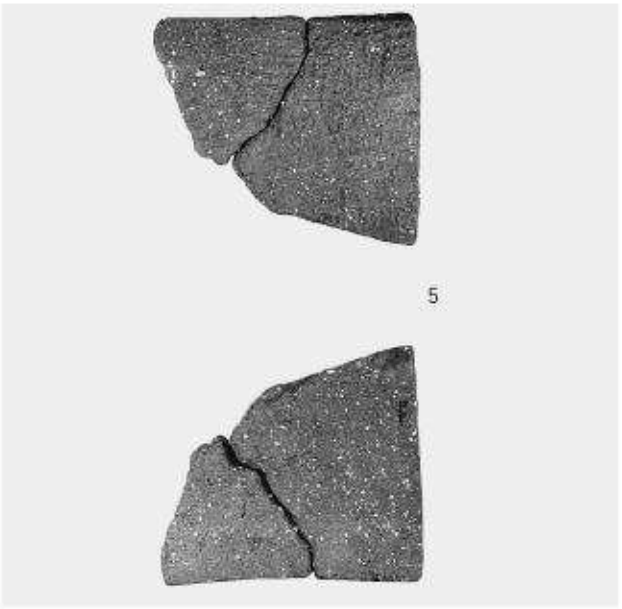


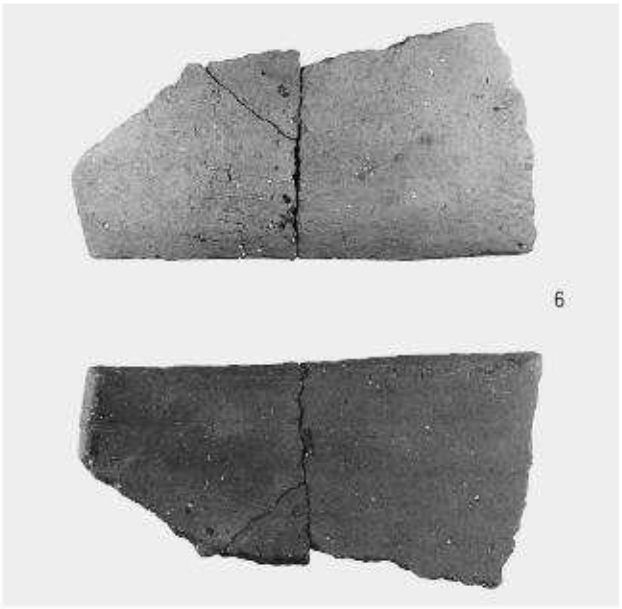
10

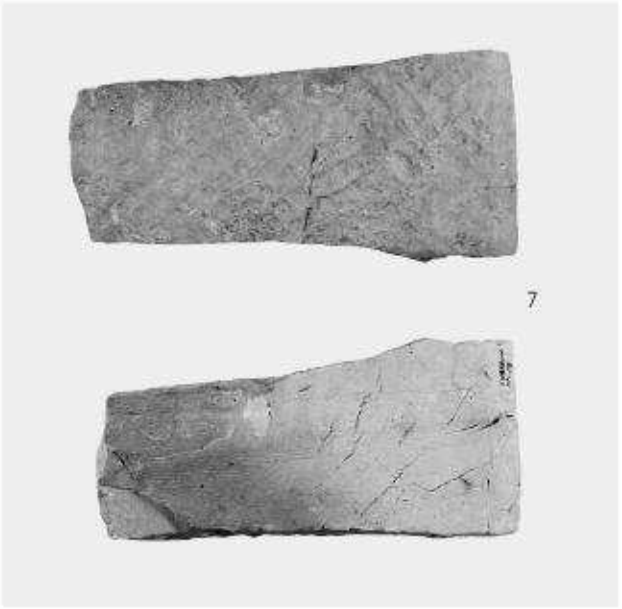


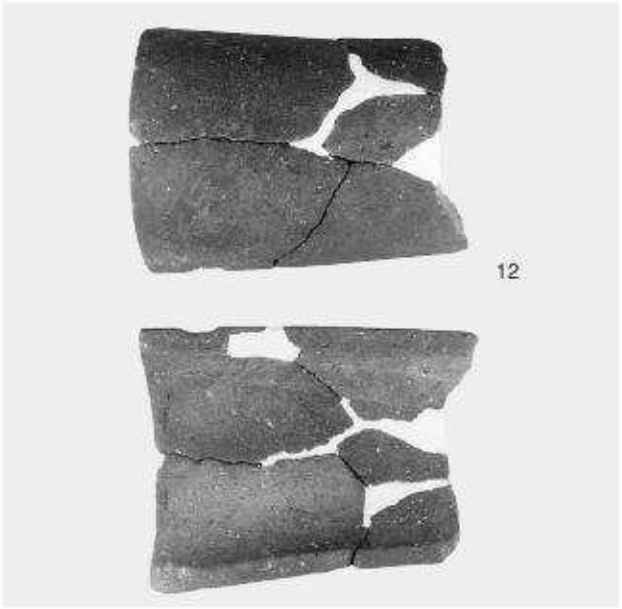
11

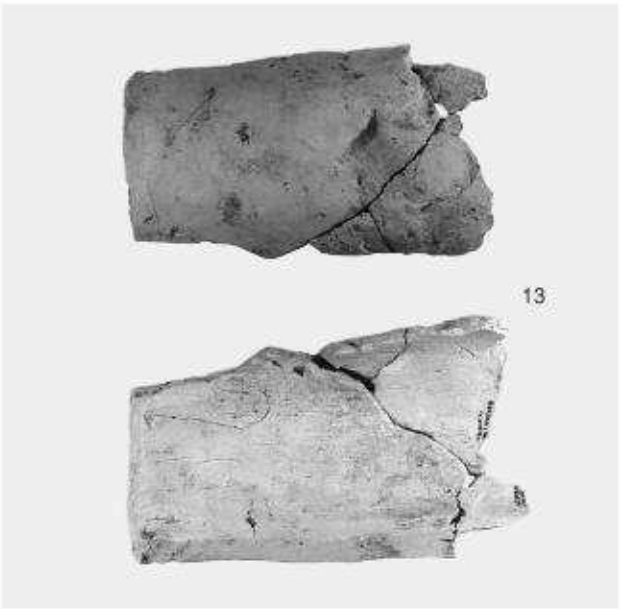
北区出土丸瓦

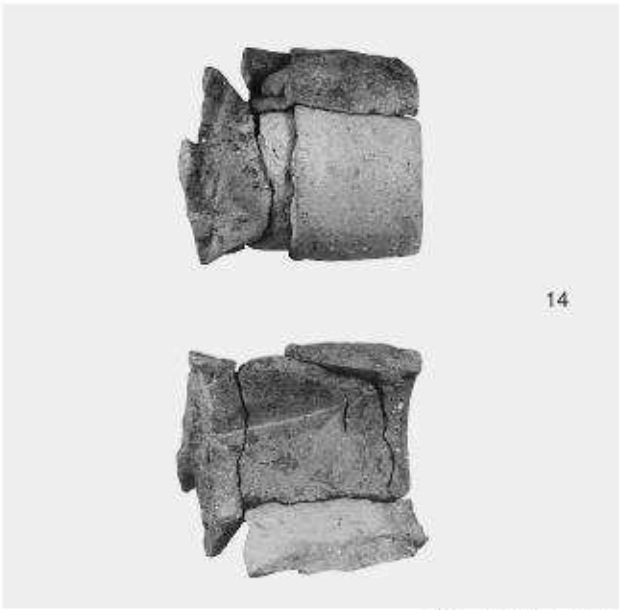




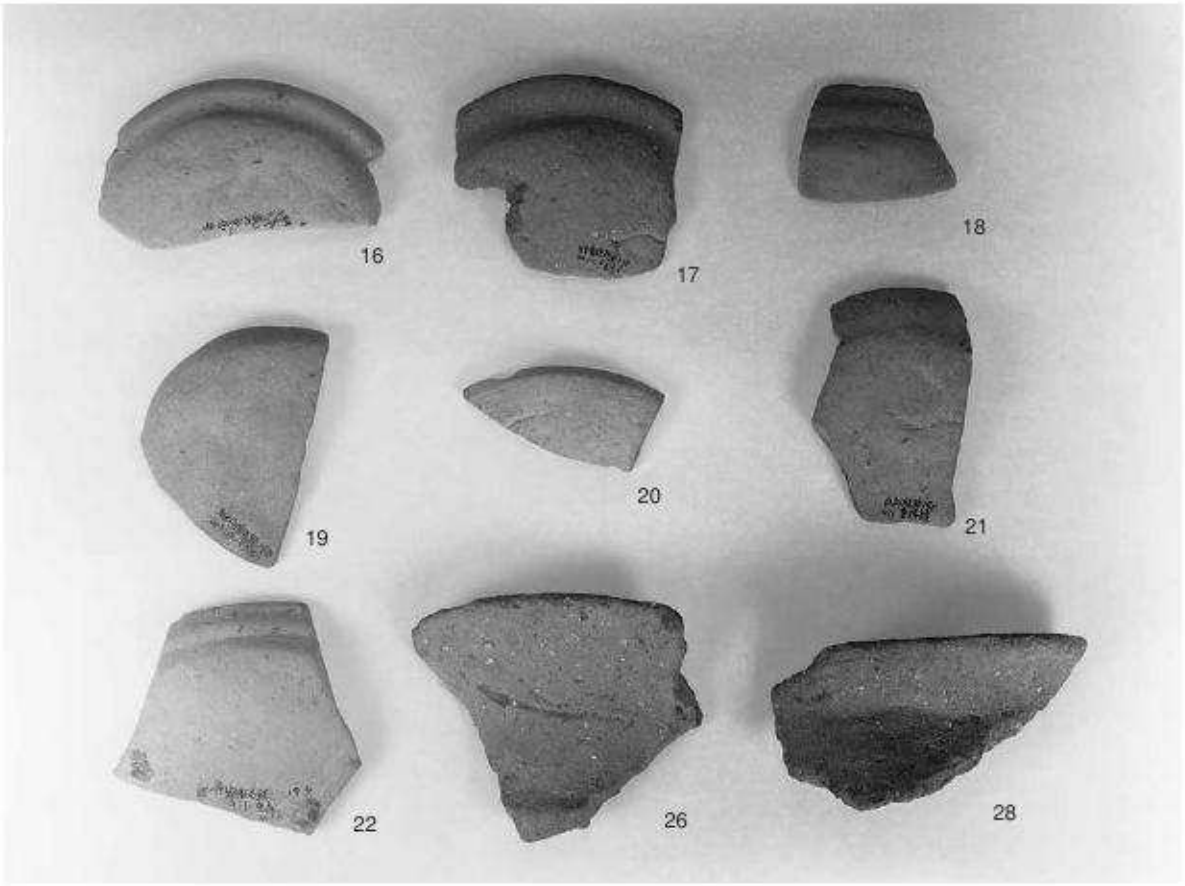


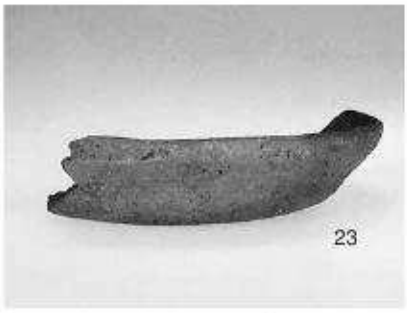


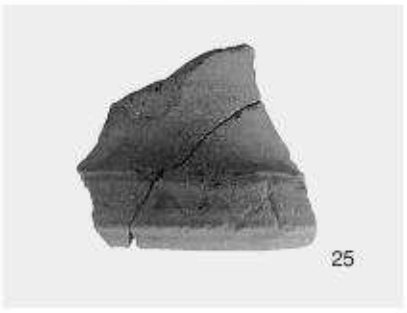


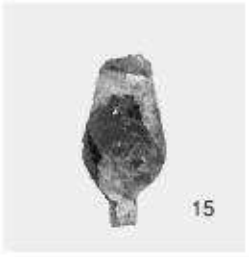


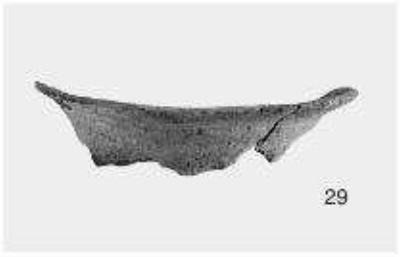
北区出土平・丸瓦

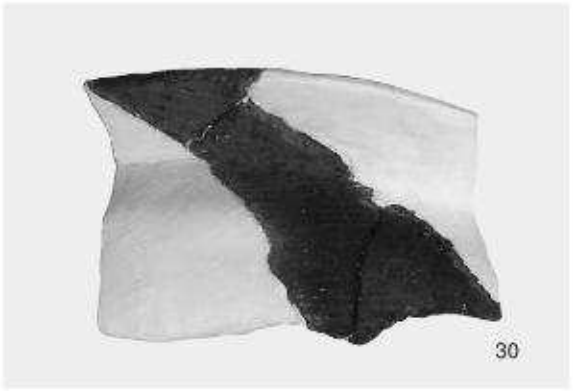


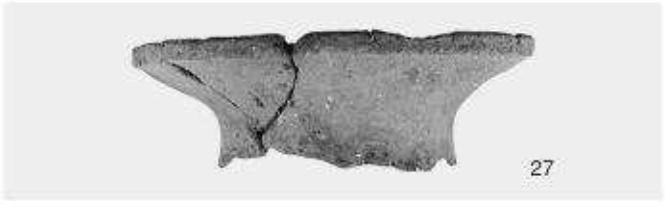


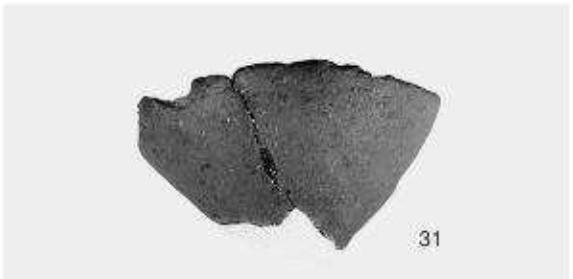








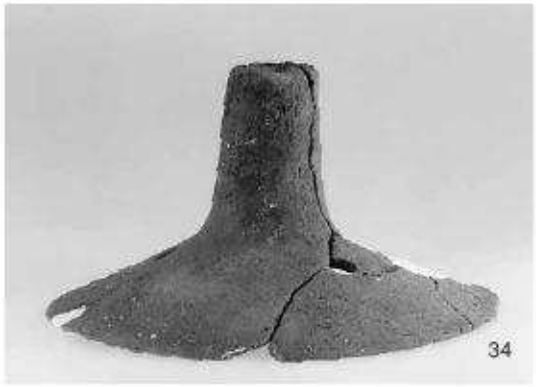




北区出土土器①

32

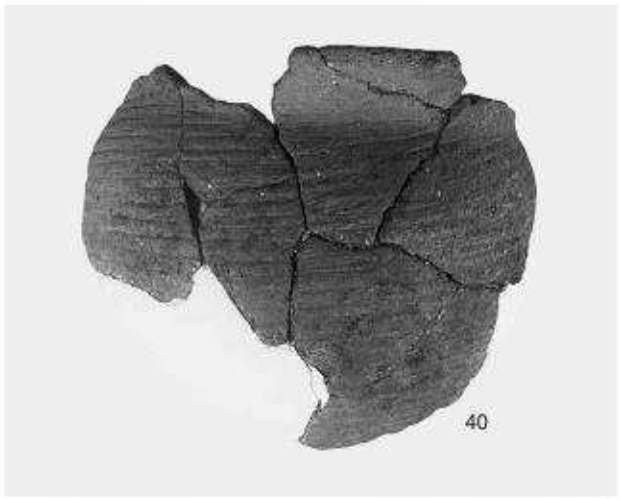
33


34

36

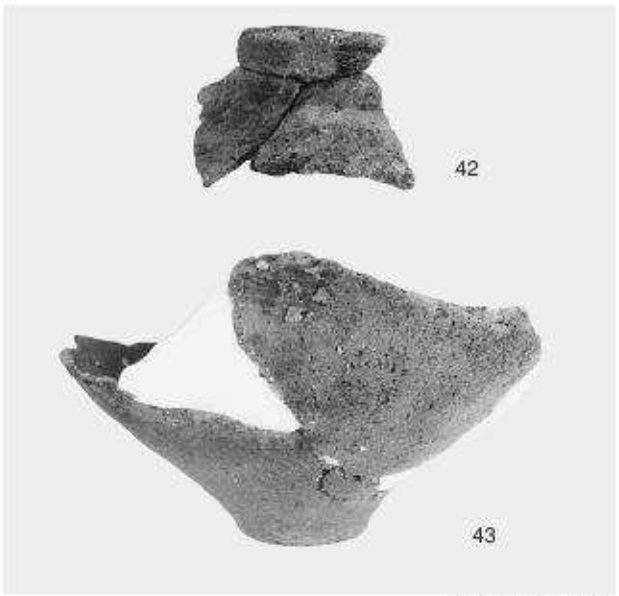
37

38


40

41

44

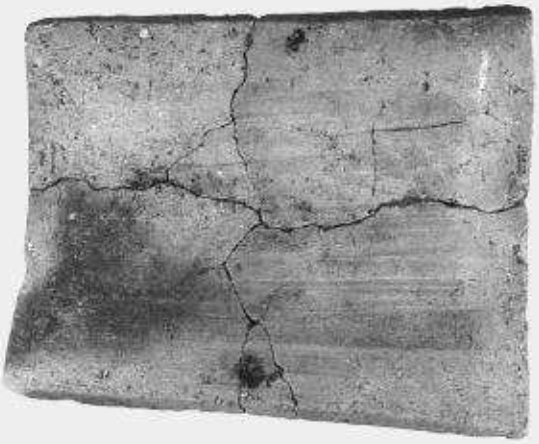

42

43

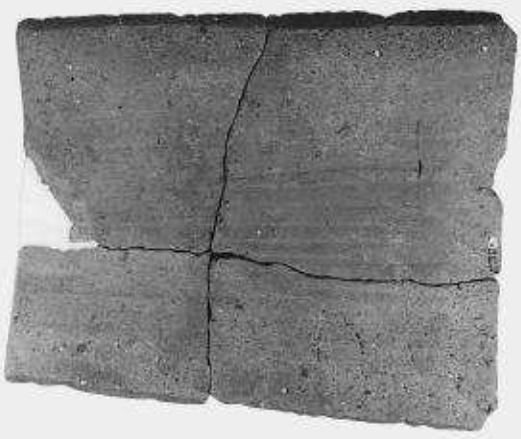
北区出土土器②

46

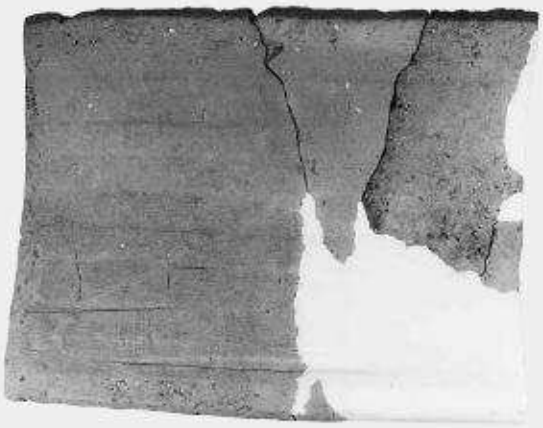
47



48

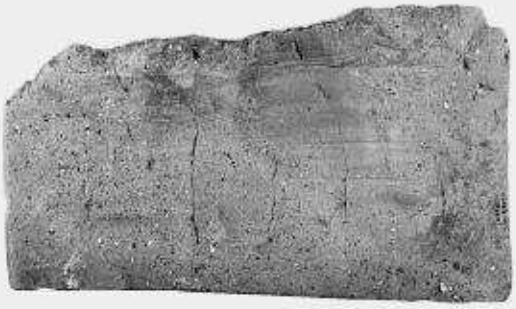


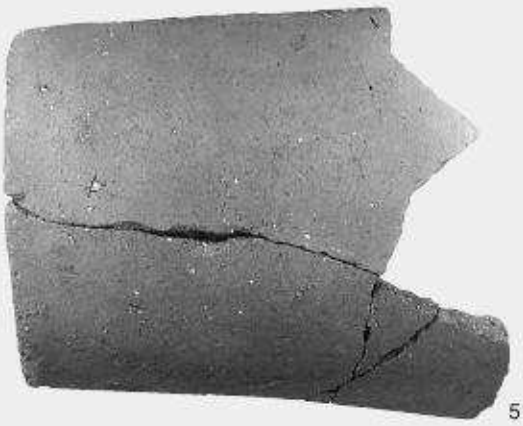
49



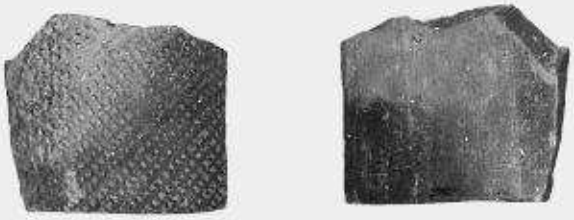
南区出土平瓦

50

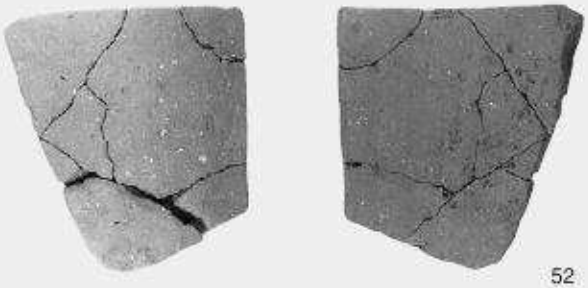




51



53

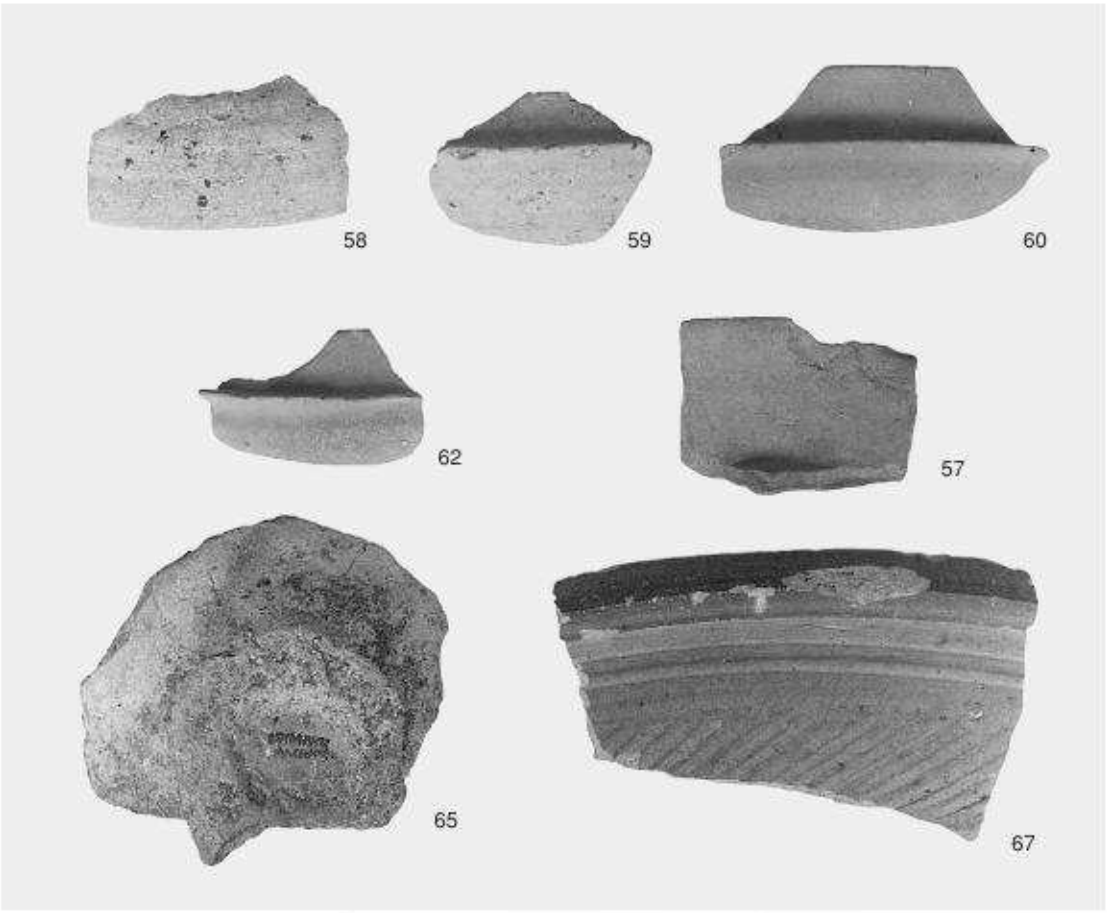


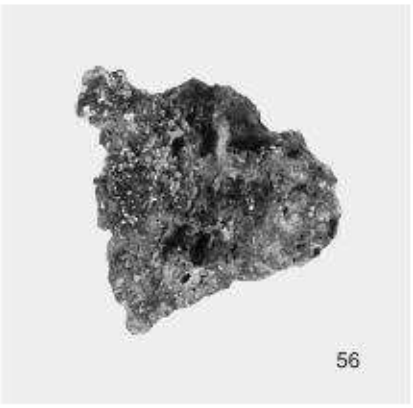
52

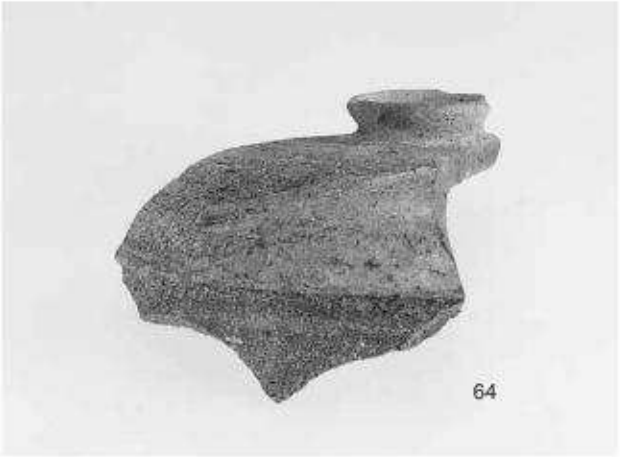
54

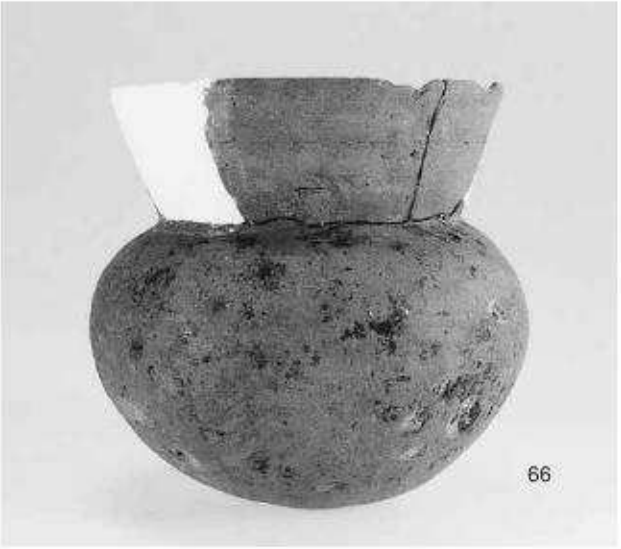
55

南区出土平・丸瓦

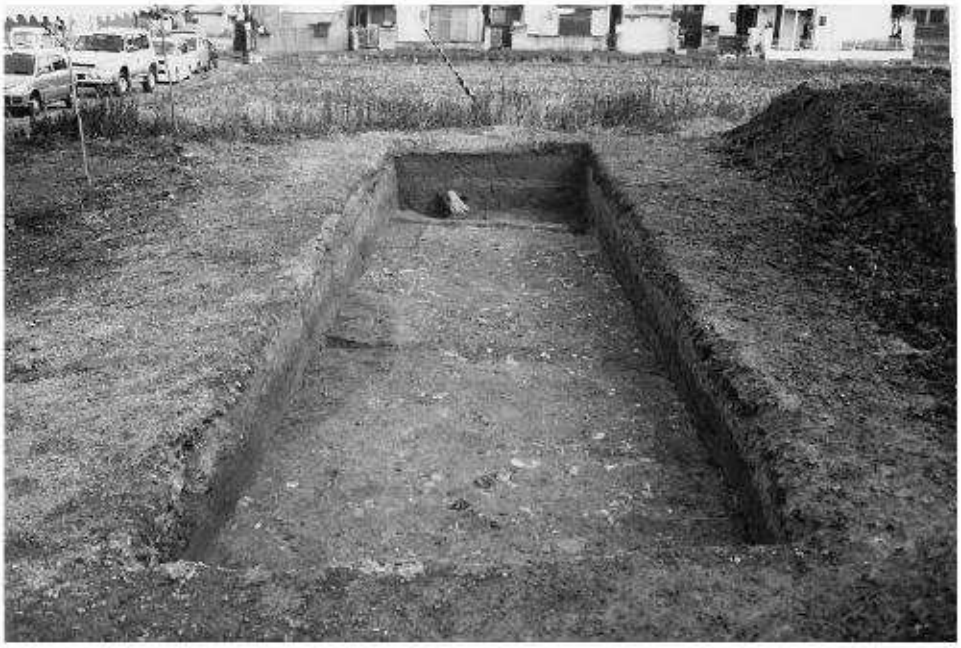








南区出土遺物

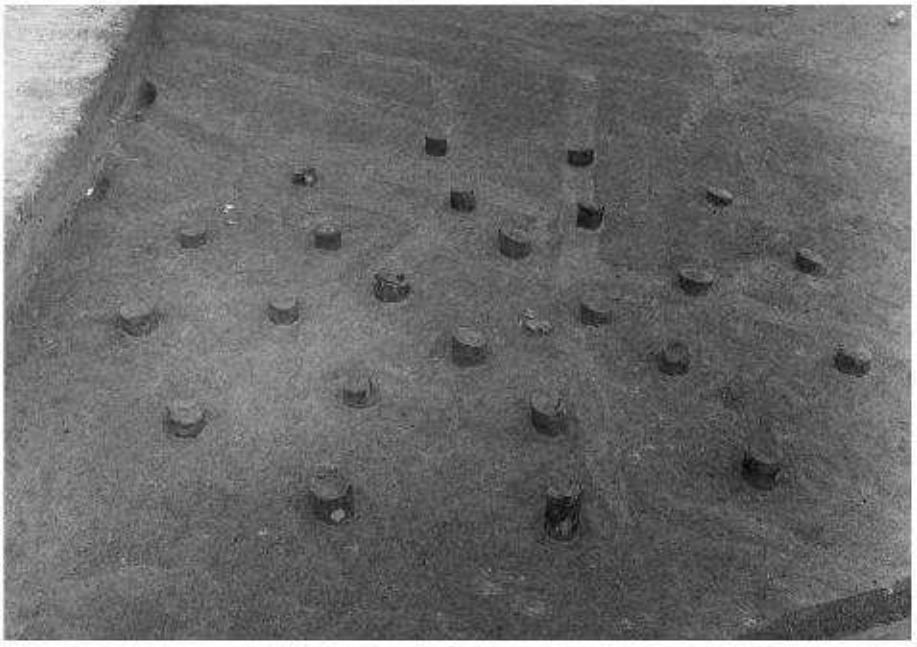


トレンチ全景（西より）

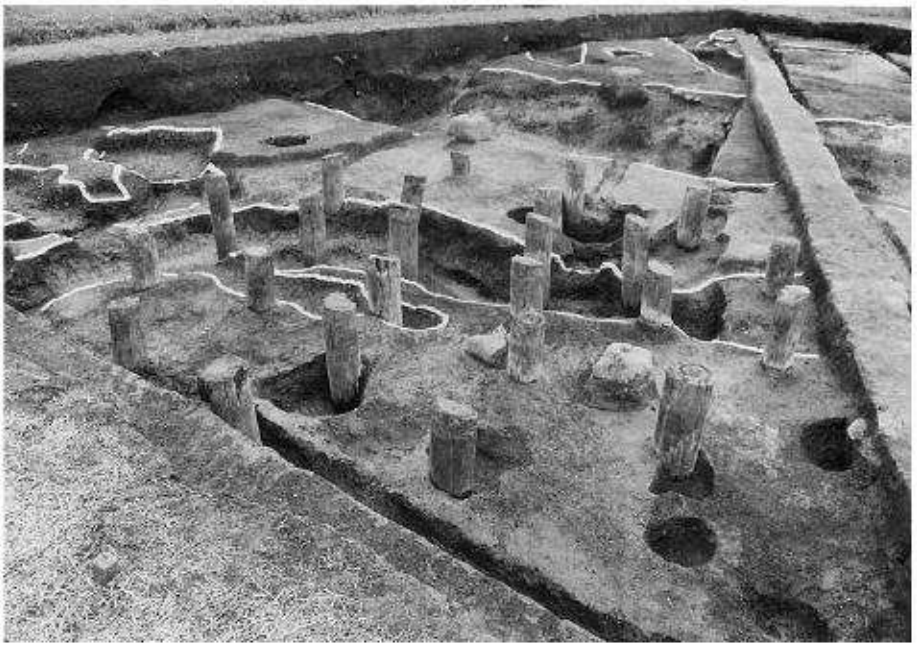
東端落ち込み断面
（北東より）

トレンチ南壁
（北東より）

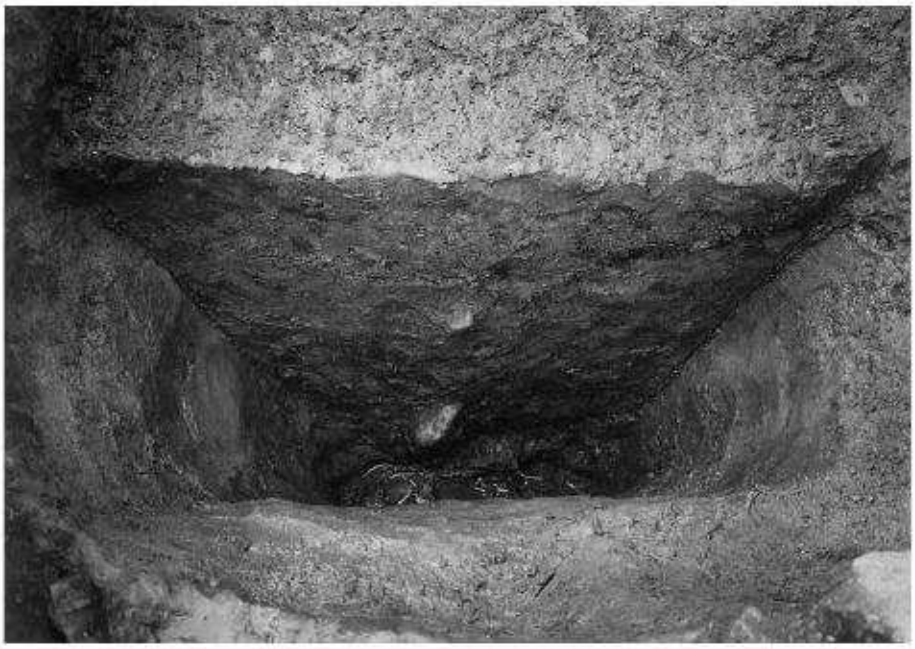
調査地遠景
（纒向石塚古墳と纒向古墳群）



杭（南より）



完掘時の杭（南西より）



井戸１土層断面

井戸２遺物出土状況

井戸２完掘状況（西より）

石塚東古墳全景（南より）

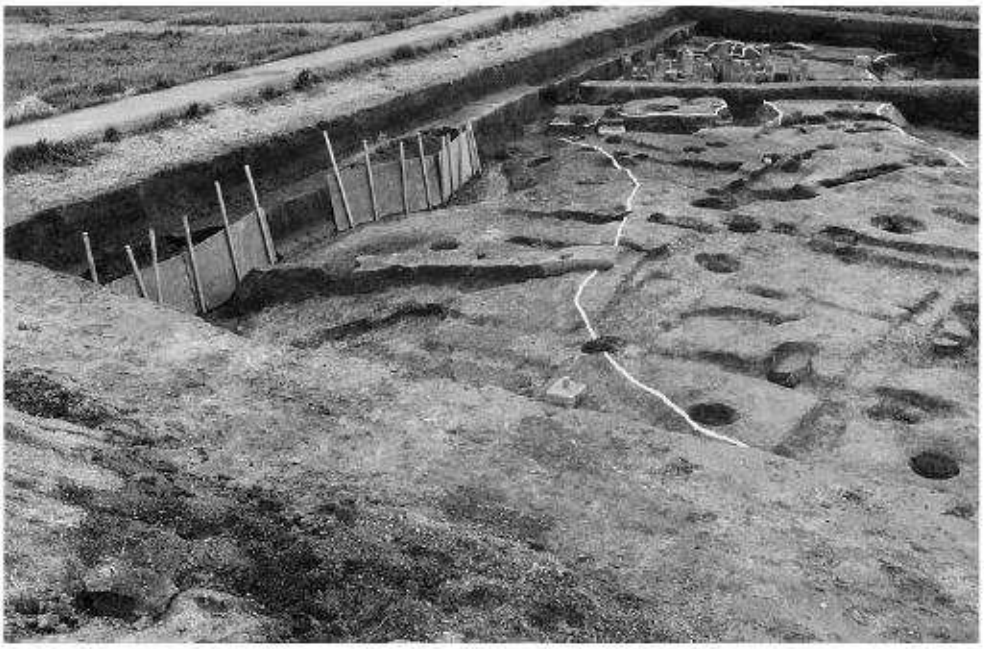
竪杵

円筒埴輪

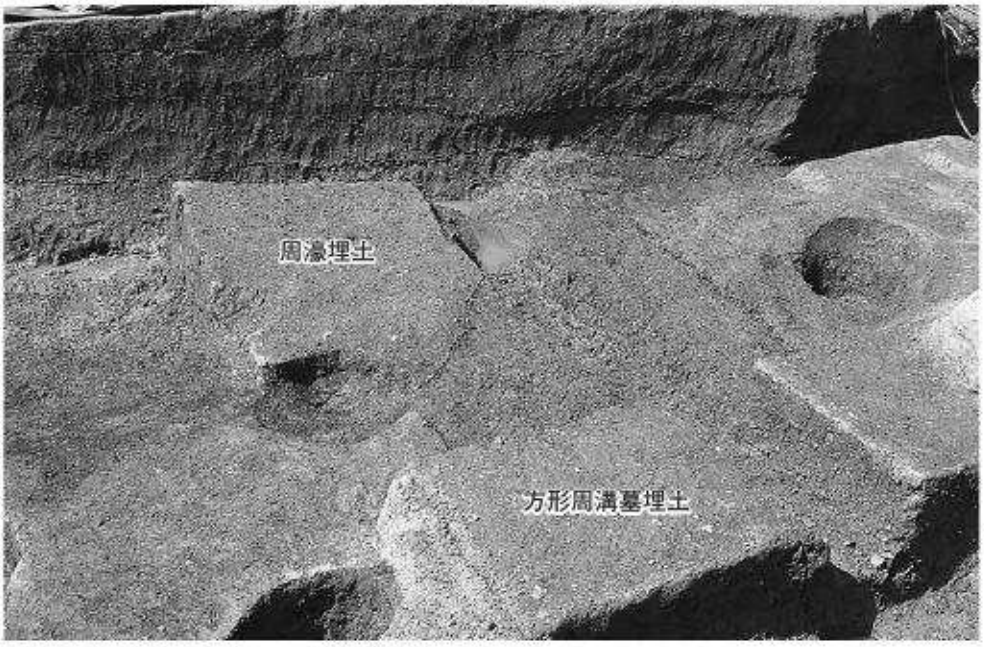
臼・用途不明木製品

上空からみた纒向石塚古墳と調査地（上が北）

上空からみた調査地（上が北）



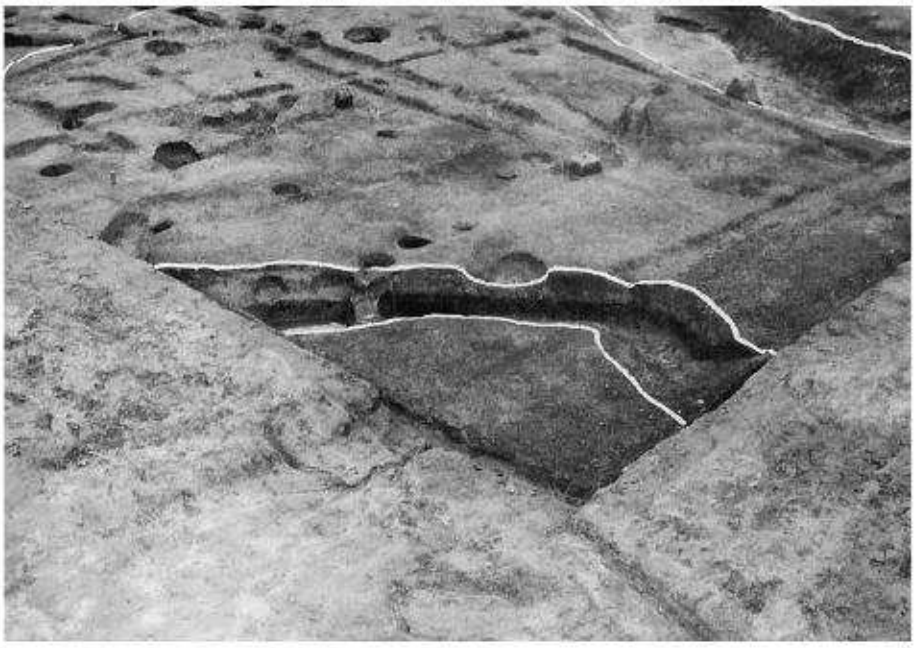
纒向石塚古墳周濠
（南より）



纒向石塚古墳周濠と
方形周溝墓１の関係
（南東より）

方形周溝墓１の全景
（北西より）

方形周溝墓1土器出土状況
（東より）



方形周溝墓2全景
（南東より）

方形周溝墓2土器出土状況
（南西より）

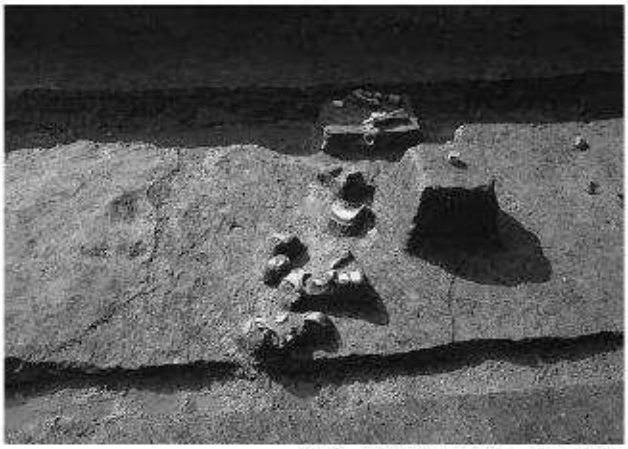
調査地遠景（南より）

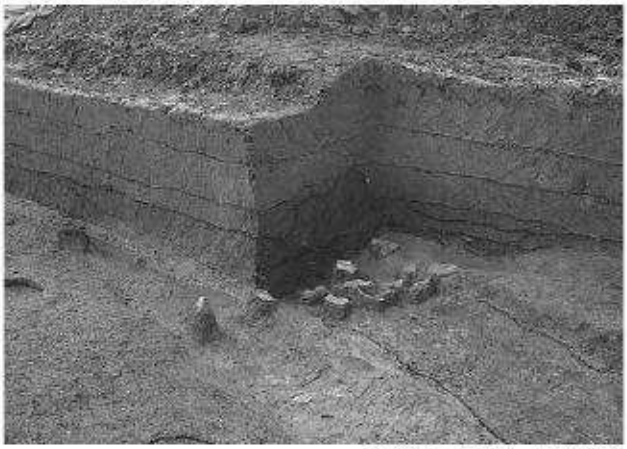
トレンチ全景（右側が北）

トレンチ全景（北より）

ヤナイタ古墳群上面検出状況（北より）

ヤナイタ２号墳埴輪出土状況（北西より）


溝３　埴輪出土状況（東より）

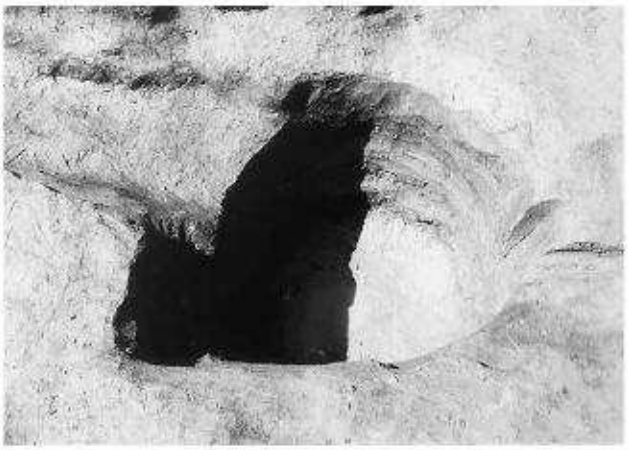

埴輪出土状況（上が北）

埴輪・溝２上面　検出状況（上が北）

ヤナイタ１号墳・２号墳（南西より）

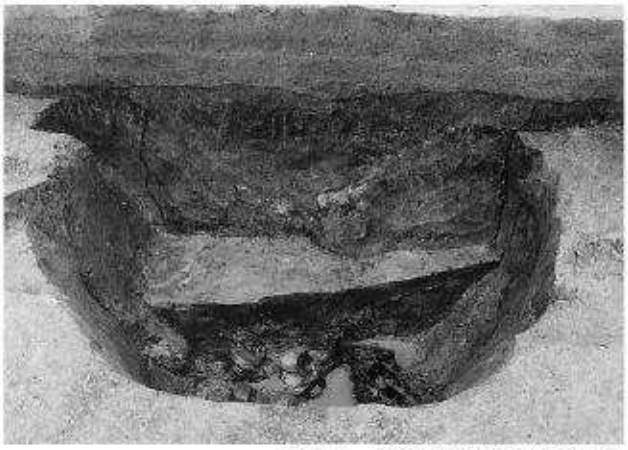
溝２・土坑２埋土断面（北東より）

土坑２　上層遺物出土状況（東より）



土坑２　完掘状況（東より）

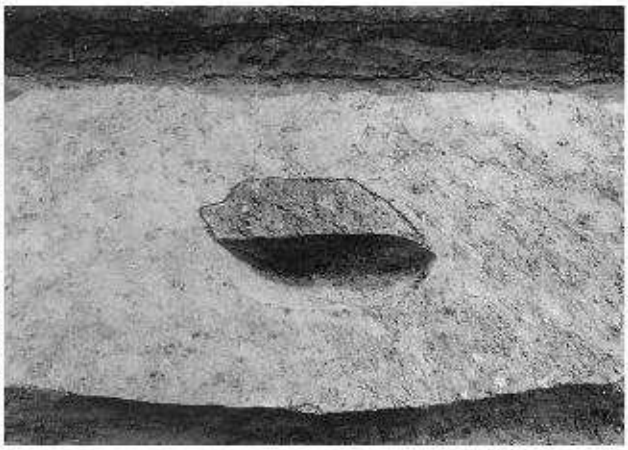
溝２付近トレンチ壁面（北東より）



土坑４　下層埋土断面（西より）

土坑４　底面遺物出土状況

土坑１　埋土断面（西より）



土坑３　埋土断面（西より）

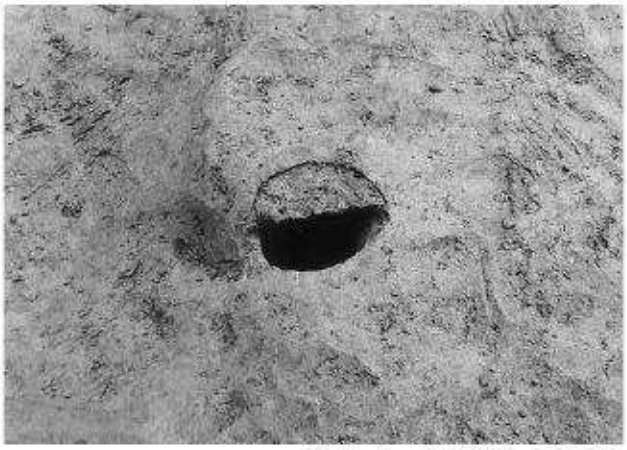
ピット１　埋土断面（南より）

ピット２・３　埋土断面（南より）

ピット4　埋土断面（西より）

ピット4　遺物出土状況（西より）

ピット5　埋土断面（西より）



ピット6　埋土断面（西より）

溝1　完掘状況（東より）

トレンチ北壁（南西より）

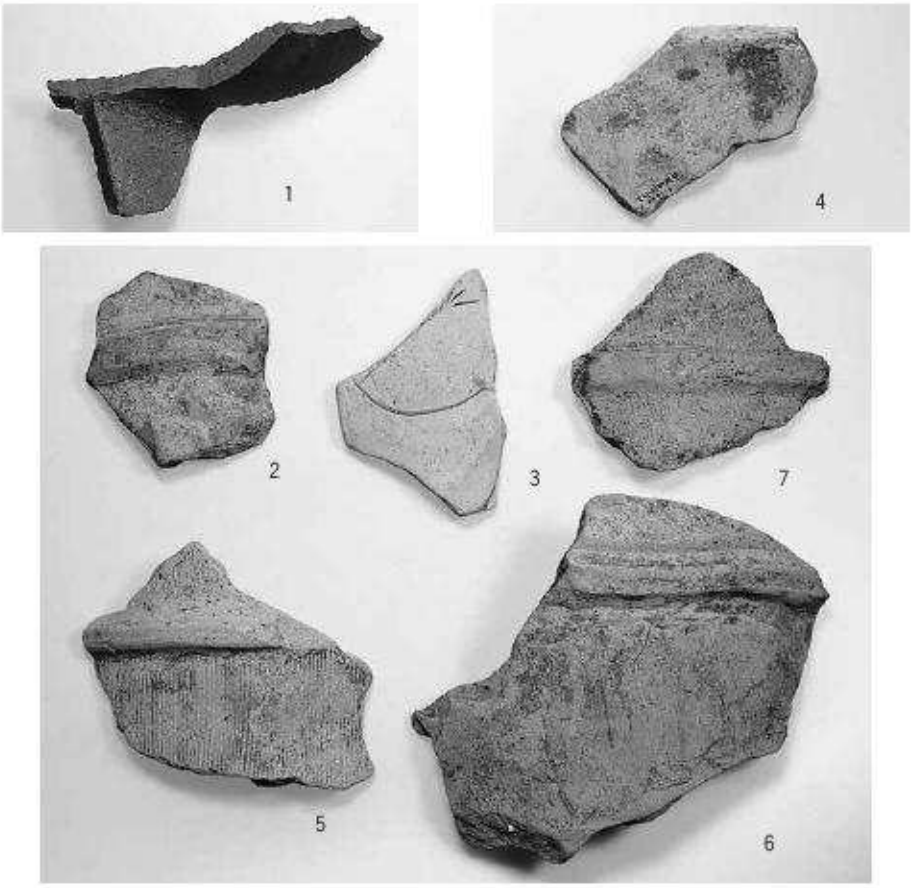
トレンチ北半西壁（南東より）

トレンチ南半西壁（南東より）

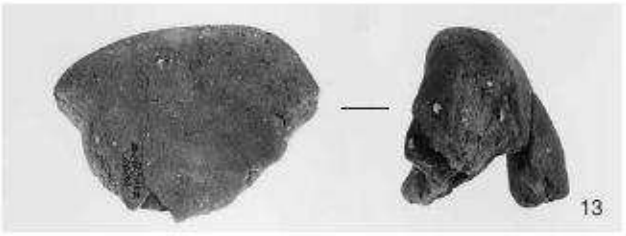
自然流路
遺物出土状況①（南東より）

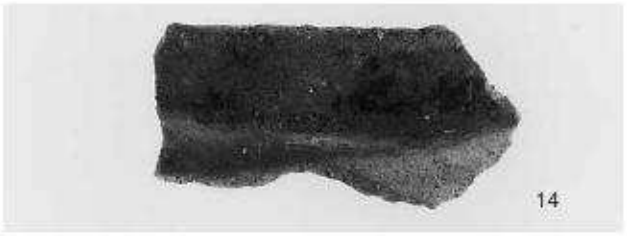
自然流路
遺物出土状況②（南東より）

自然流路　土層断面
（南東より）

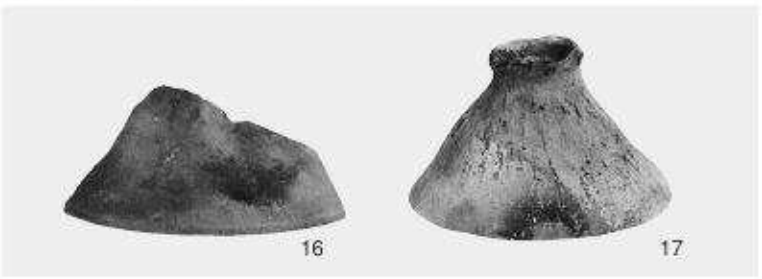


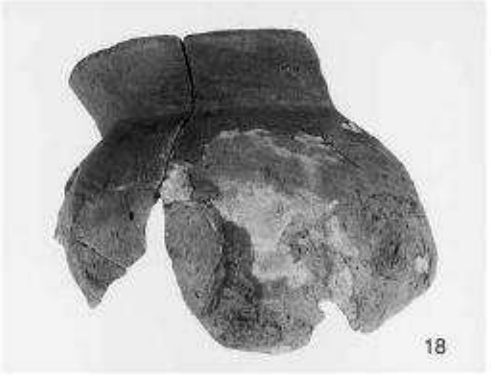
ヤナイタ２号墳　関連遺物

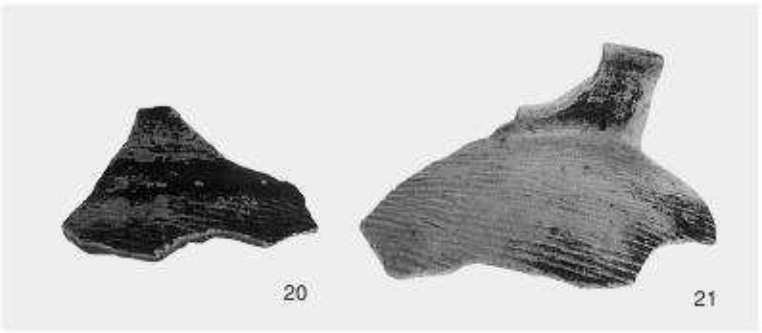

13


14

15

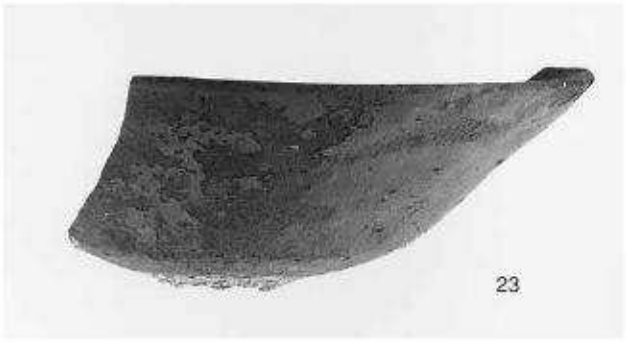

16　17


18


20　21

19

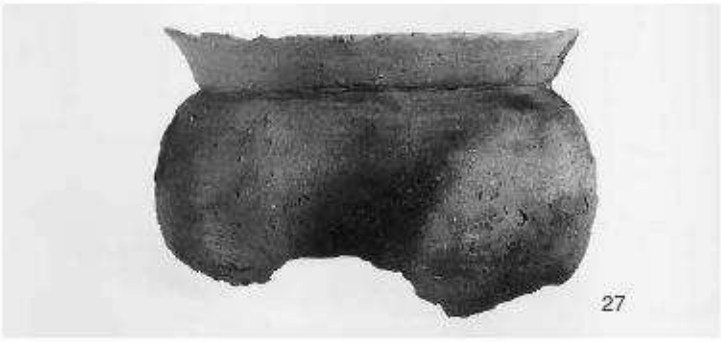
22

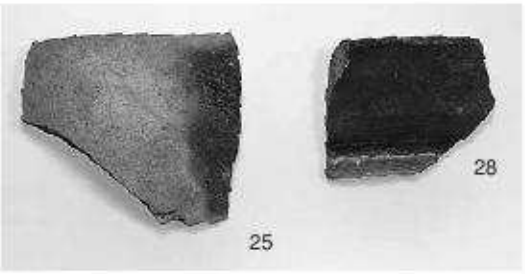

23

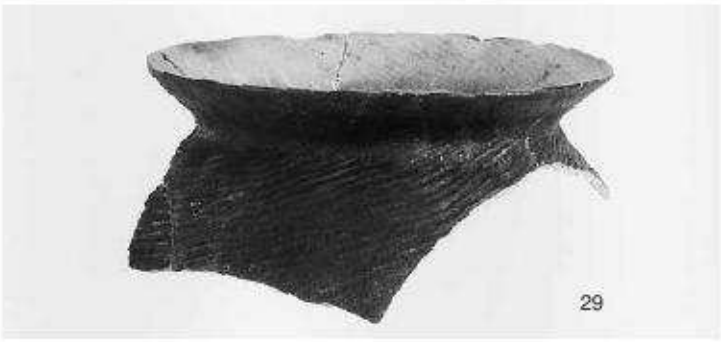
24 上半

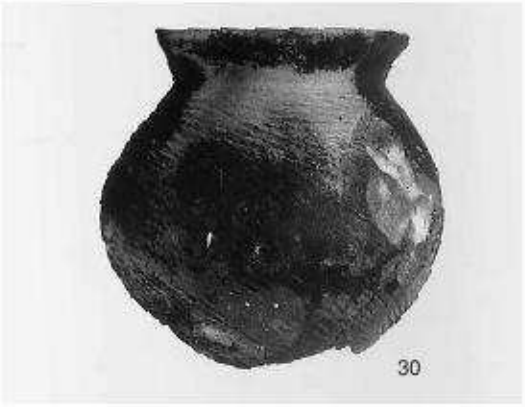
24 下半　26

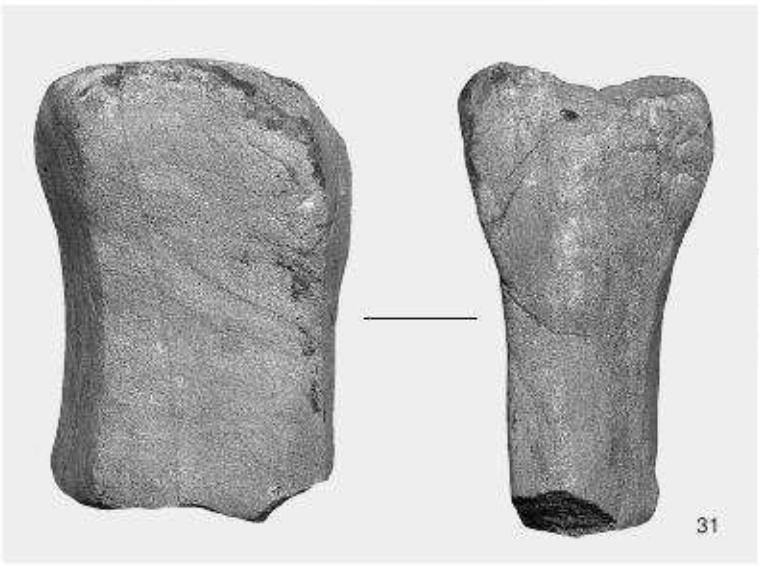
土坑2　出土遺物①

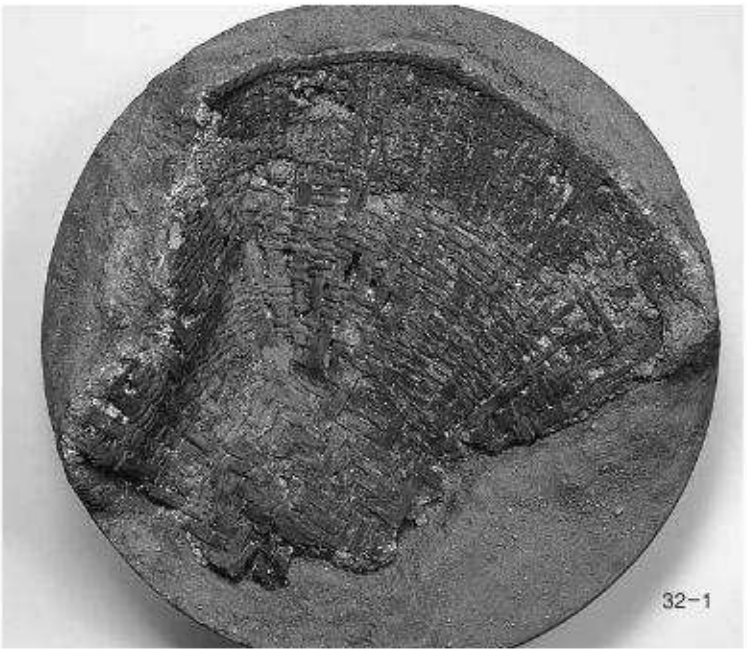






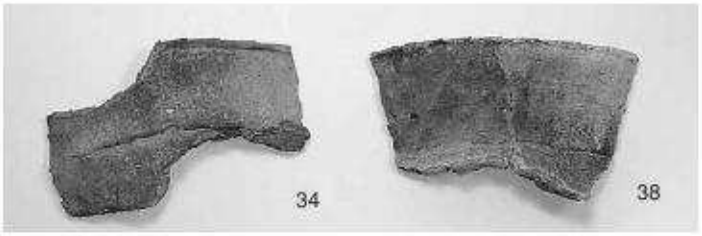






土坑2　出土遺物②

33

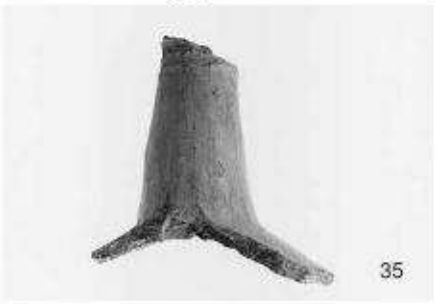

34　38

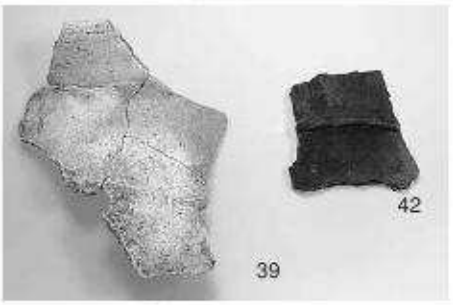
36

40

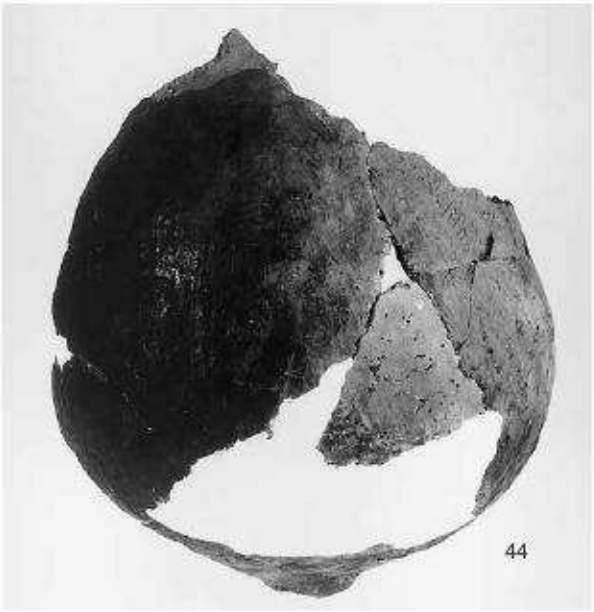
37

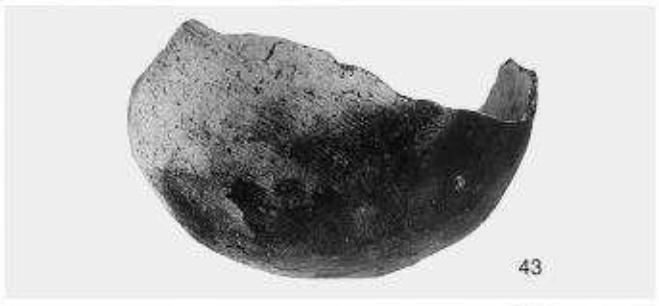
41


35


39　42

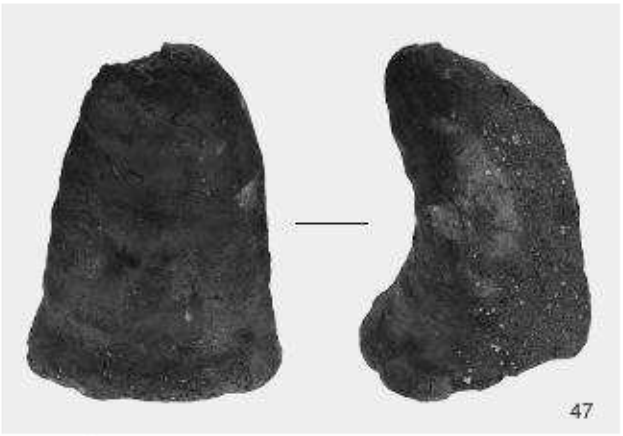
貝殻

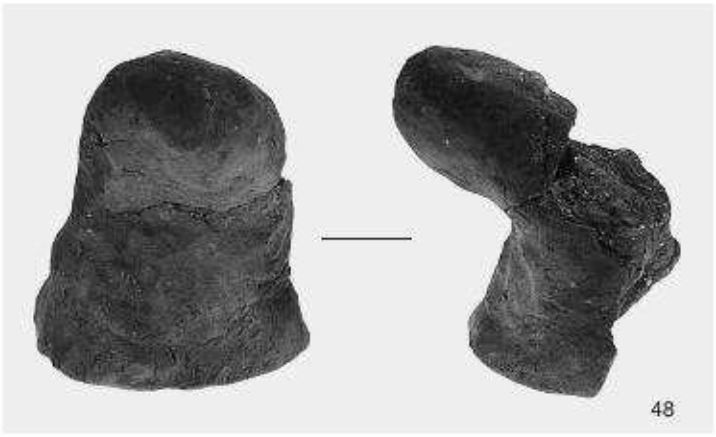

44

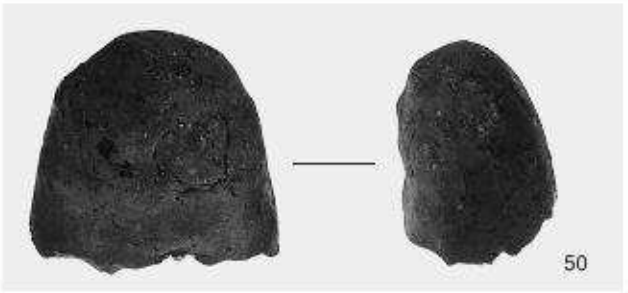

43

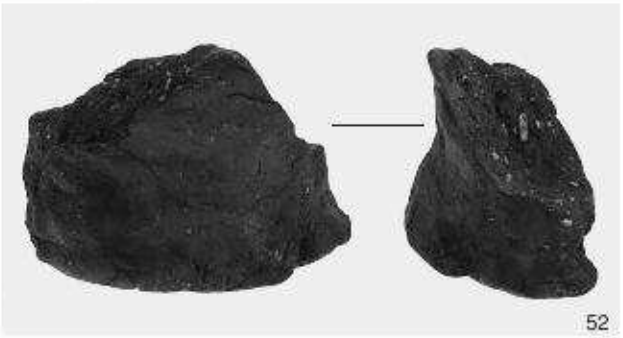
45

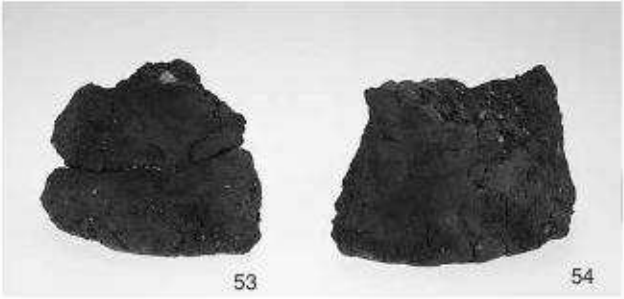
土坑4　出土遺物①



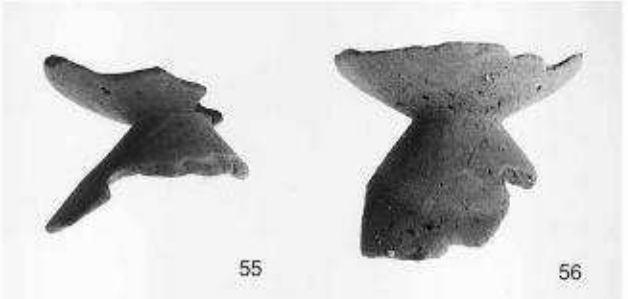


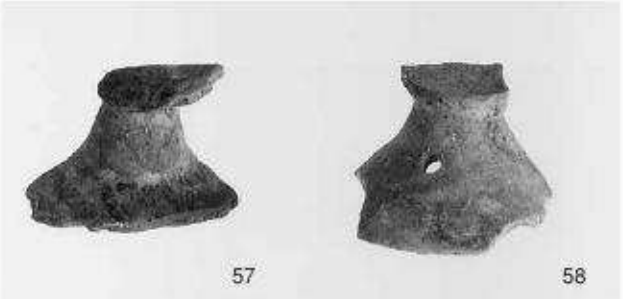




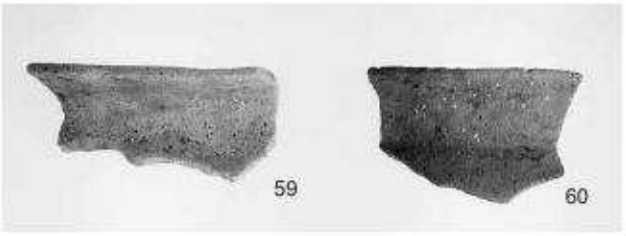


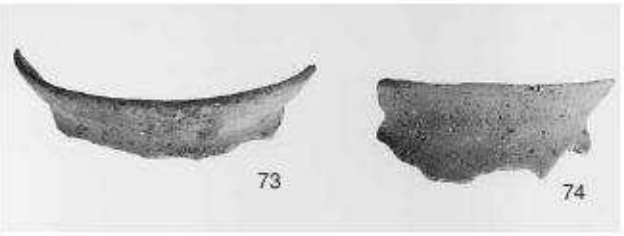
土坑 4　出土遺物②

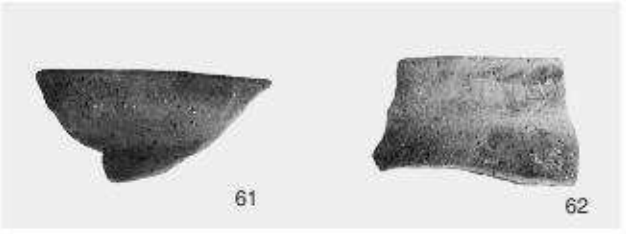


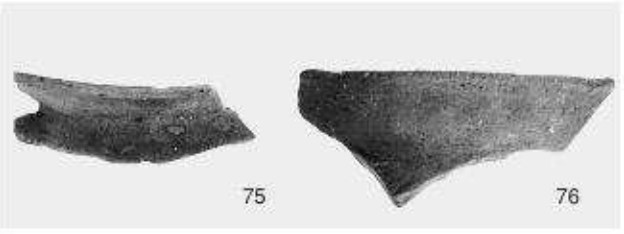


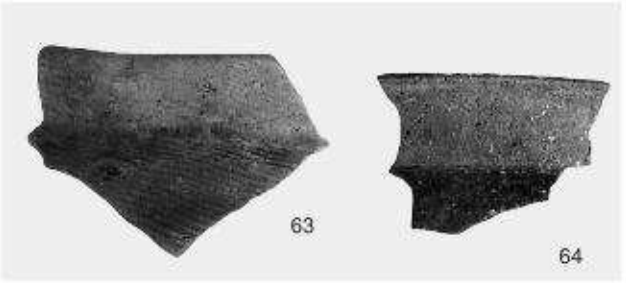
自然流路（北側）出土遺物①

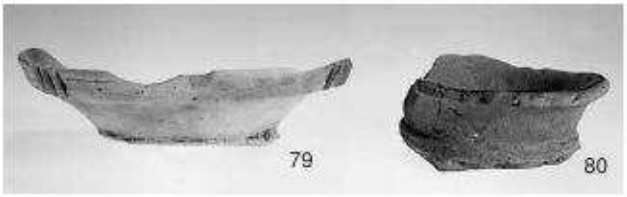


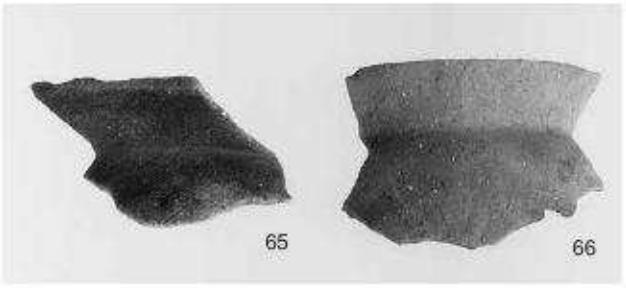


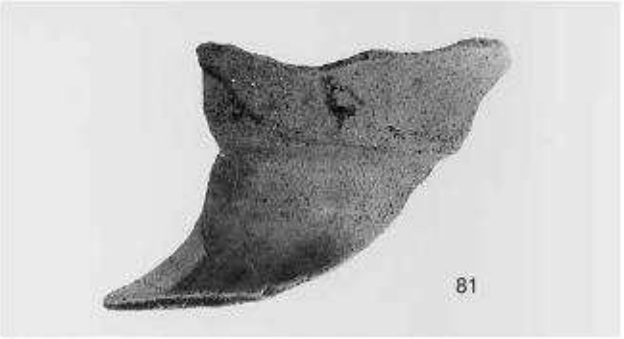


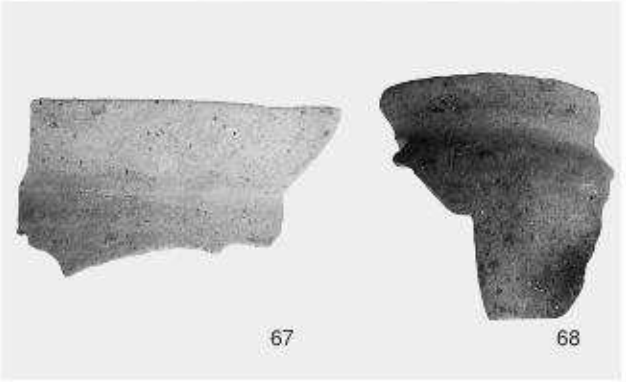


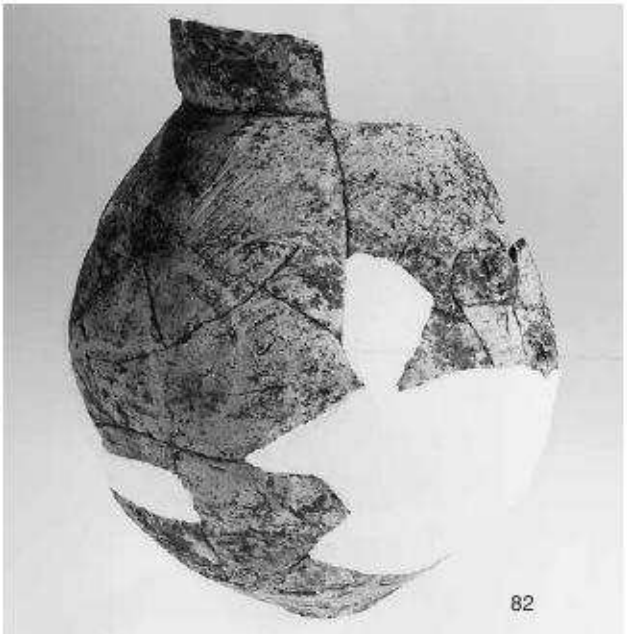


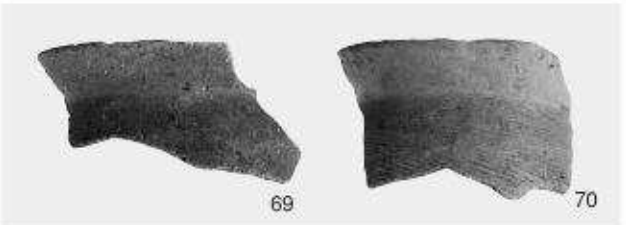


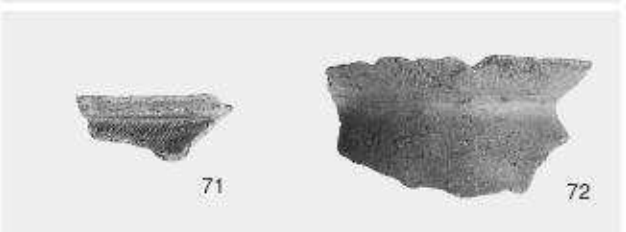




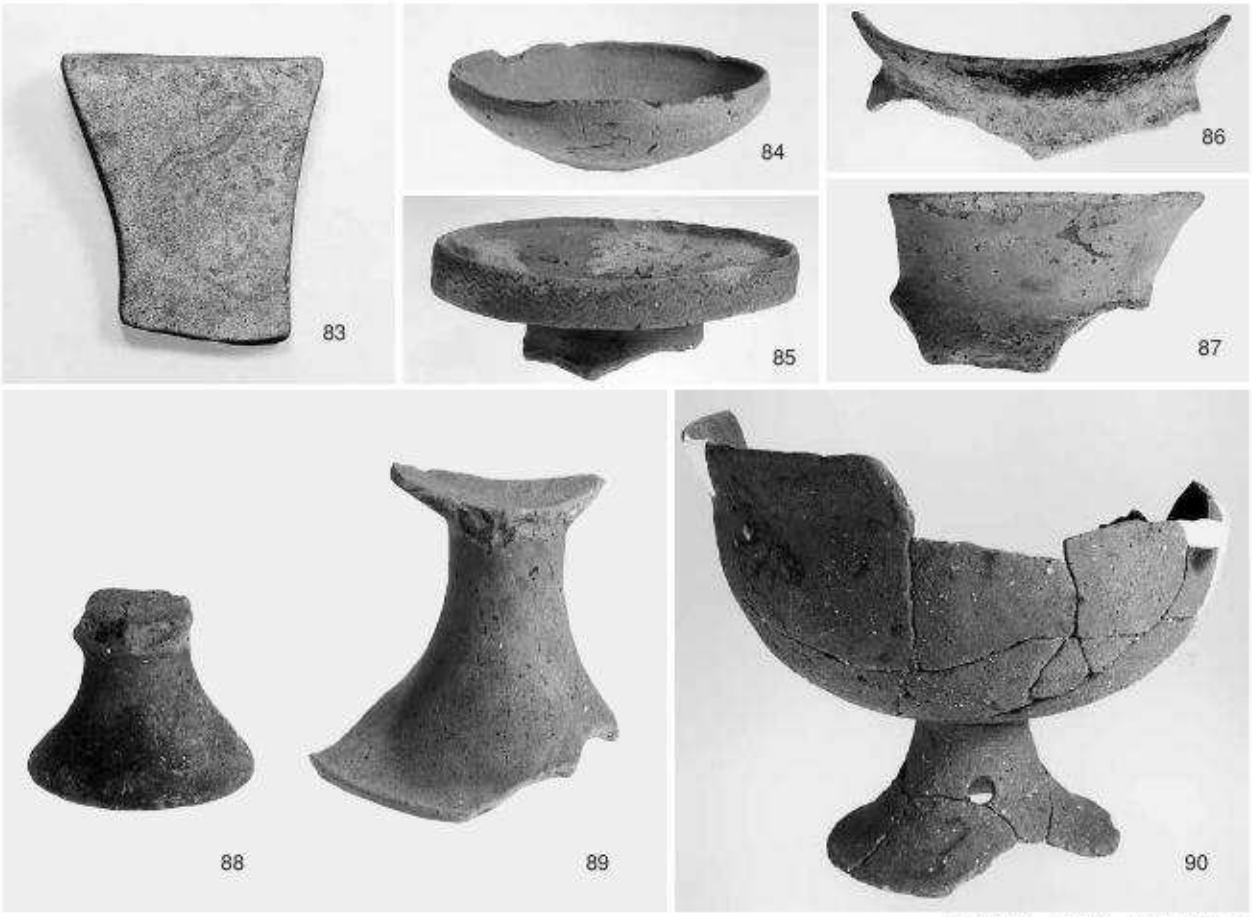




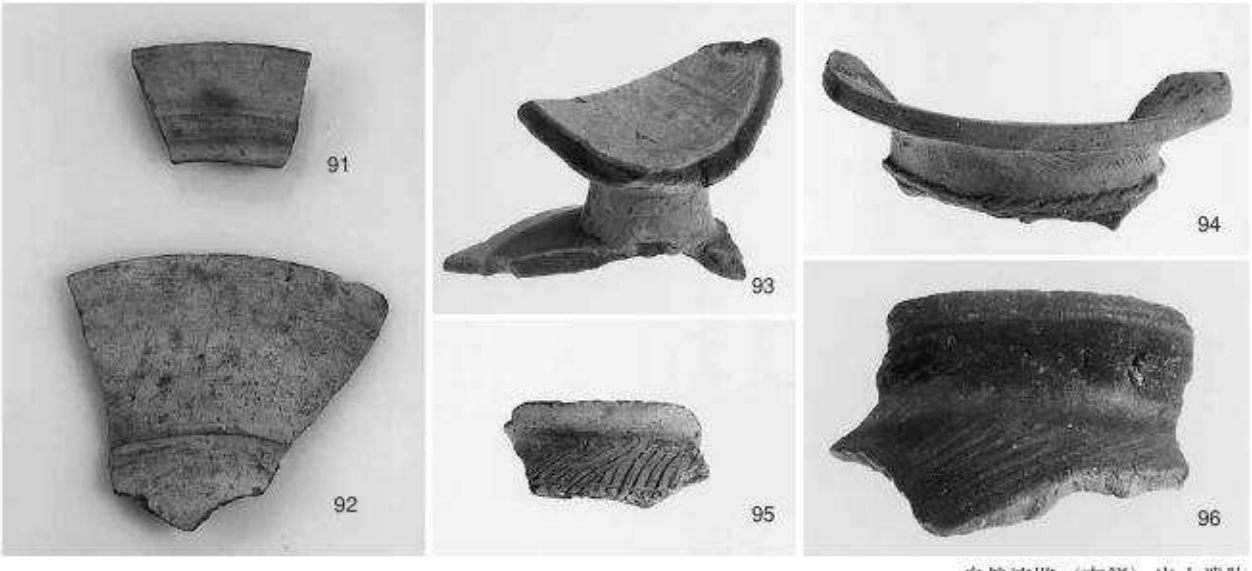




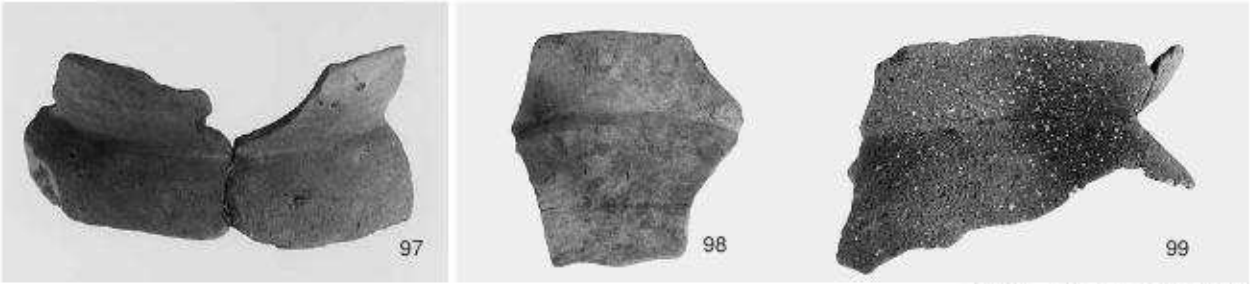
自然流路（北側）　出土遺物②



自然流路（北側）出土遺物③



自然流路（南側）出土遺物



土坑１・ピット４出土遺物

報告書抄録

書名	桜井市平成17年度国庫補助による発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第27集
編著者名	福辻淳　丹羽恵二　橋爪朝子
編集機関	桜井市教育委員会　文化財課
所在地	〒633-0074　奈良県桜井市芝58-2　　TEL 0744-42-6005　　FAX 0744-42-1366
発行年月日	2006年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
安倍寺跡(あべでらあと)第19次	桜井市安倍木材団地1丁目7－7	292061	14-B-28	34°30′03″	135°50′25″	20050705～20050717	72㎡	事務所建設に伴う
谷遺跡(たにいせき)第22次	桜井市安倍木材団地1丁目1－1	292061	14-B-203	34°30′19″	135°50′23″	20060130～20060206	30㎡	個人住宅建築に伴う
纒向遺跡(まきむくいせき)第144次	桜井市太田271－1	292061	11-D-487	34°32′46″	135°50′12″	20051227～20060331	470㎡	重要遺跡範囲確認調査
纒向遺跡(まきむくいせき)第145次	桜井市東田171－1他	292061	11-D-487	34°32′37″	135°50′04″	20060207～20060331	180㎡	農業用温室建築に伴う

所収遺跡名	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
安倍寺跡第19次	寺院跡	柱穴、溝	瓦、土器	
谷遺跡第22次	集落遺跡			
纒向遺跡第144次	古墳、集落遺跡	古墳周濠、方形周溝墓2基、古墳1基、掘立柱建物、井戸	土師器、埴輪、木製品、横櫛	石塚古墳周濠、石塚東古墳
纒向遺跡第145次	集落遺跡	古墳2基、土坑、溝	埴輪、土製支脚、土師器、籠状製品	古墳時代前期の土坑、ヤナイタ1・2号墳

桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書　27集

桜 井 市

平成17年度国庫補助による
発 掘 調 査 報 告 書

発　行　桜 井 市 教 育 委 員 会
文　　化　　財　　課
〒633-0074　奈良県桜井市芝58－２番地
TEL　0744－42－6005
FAX　0744－42－1366

年月日　平成18年３月31日

印　刷　株 式 会 社 明 新 社
〒630-8141　奈良市南京終町３－464